

建築ト社會

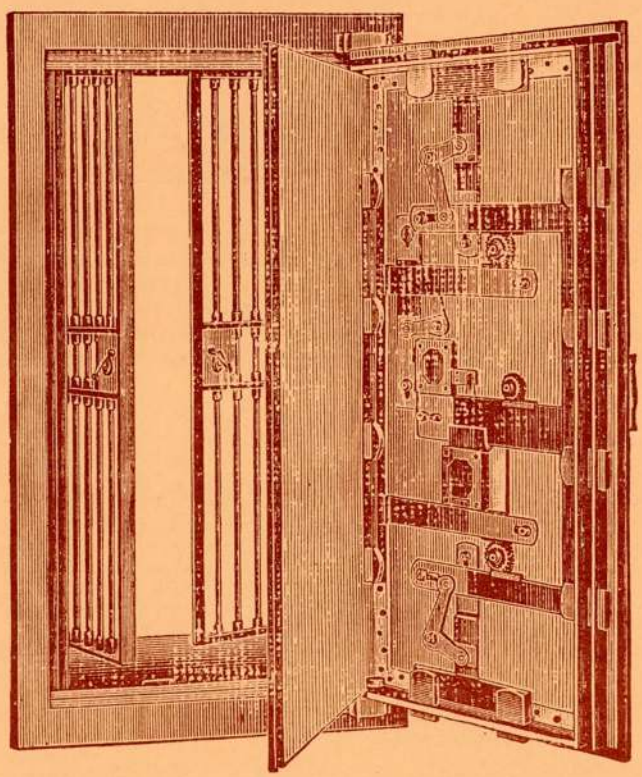
第七輯第八号

日本建築協會

大正十三年八月一日

耐震耐火 理想鐵扉の出現

金庫扉製造界の權威



大谷金庫店

店主 大谷榮之介

顧問工學博士 細木松之介

獨逸人技師 ア・シューハルト

營業所 東京市京橋區岡崎町二丁目
京都市松原通東洞院東入
大阪市東區淀屋橋筋（道修町）
神戸市楠町六交叉點西

工場 東京第一工場 東京市京橋區佃島壹丁目
仝 第二工場 仝 深川區東元町
京都分工場 京都市松原通り大宮西入

高級昇降機

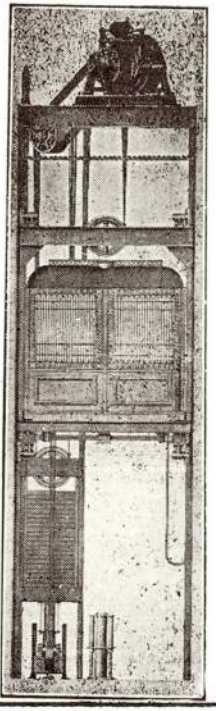
エー・ビー・シー

最近御採用御先報告

丸ノ内ビルデンク	十一臺
日本郵船	八臺
日本興業銀行	四臺
中外商業新報社	一臺
特許局	一臺
阪急電鐵	一臺
泉尾土地會社	二臺
大學病院	二臺
松竹キネマ座	二臺
神戸商船ビルヂング	四臺
明治海運ビルヂンク	四臺
淺野物産	一臺
村井銀行神戸支店	一臺
ブラナモンド社	二臺
內田ビルヂング	三臺
明治屋	二臺
其ノ他	拾臺

▼現在最大建築ニ使用サレ！

▼今後ノ高層建築ニ採用サレントス！



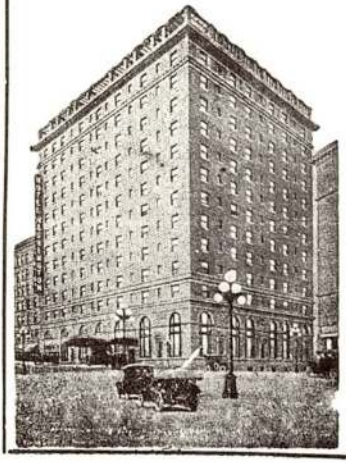
A.B.See!

ELECTRIC ELEVATOR CO.

220 Broad Way New York

ESTABLISHED IN 1883

Esteemed enquiries solicited!



東洋總代理店

內田商事株式會社機械部

東京　神戸　大阪

建築と社會　第七輯第八號目次

口絵　株式會社竹尾商店　一二
　　寶塚新劇場　一三

◆卷頭……裝飾藝術始原

論說

都市防備論……工學士　藥師寺主計……一

趣味の建築……工學士　古宇田實……一五

建築時言……古橋剛丸……二六

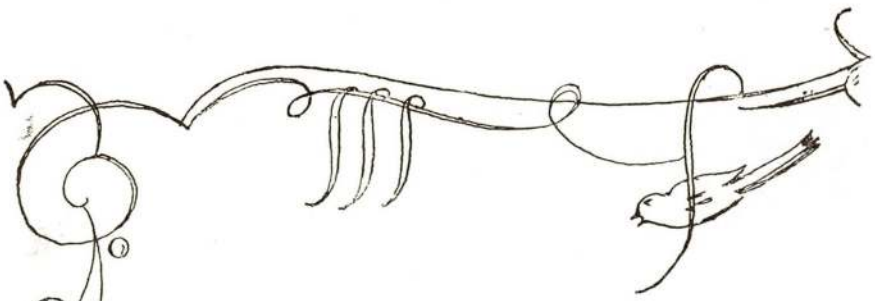
科學的價値に立脚せる徹底的産業愛國運動の提唱……工學博士　大河內正敏……二九

住宅

◆婦人に必要な住宅の智識……工學士　葛野壯一郎……三一

都市

◆國際市の實現(三)……太田寛吾……三九



資料

◆テベス西岸の二日 ……工學博士 天沼俊一 …四五
——續埃及遊記(七)——

◆中央市場に就て ……工學士 X Y 生 …五六

史傳

◆チヤールス、バリー卿 ……曼荼羅社同人 池田谷久吉 …六〇

漫錄

◆根來の大塔 ……澁谷五郎 …七七

◆建築覺書 ……沼島草房 …八三

◆笠置に遊ぶ(七月例會參加記) ……一理事 …九三

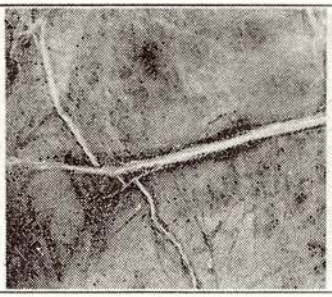
時報

◆市街地建築物法施行法中改正同施行規則中改正 ……

會報

◆大日本建築協會七月中記事 ……

大和錦 (A)　　白　瀧 (A)　　白　瀧 (B)


錆色青磁色ニ白模様　　薄青磁色ニ濃青磁色並ニ白模様　　青磁色ニ白模様

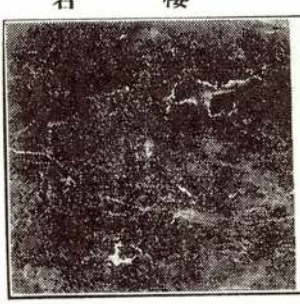
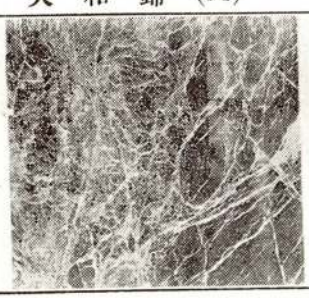
採掘地　鳥取縣八頭郡若櫻町字赤松
本店　鳥取市東品澤町
大阪販賣店　大阪市北區堂島中一丁目十八番地
東京販賣店　東京市日本橋區小網町三丁目二十四番地

旭大理石商會

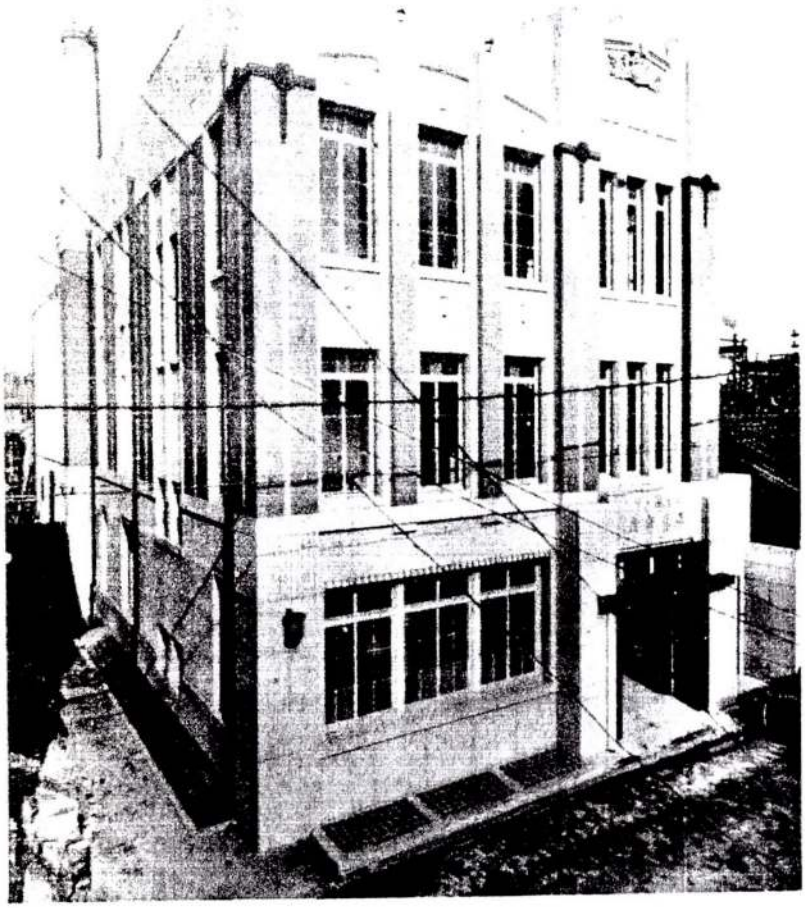
蛇紋石

礦量豐富　大材採取
耐火　耐酸　價格低廉

若櫻　　大和錦 (A)　　若櫻


濃青磁色ニ朱色模様　　錆色青磁色ニ白模様　　濃青磁色ニ朱色模様

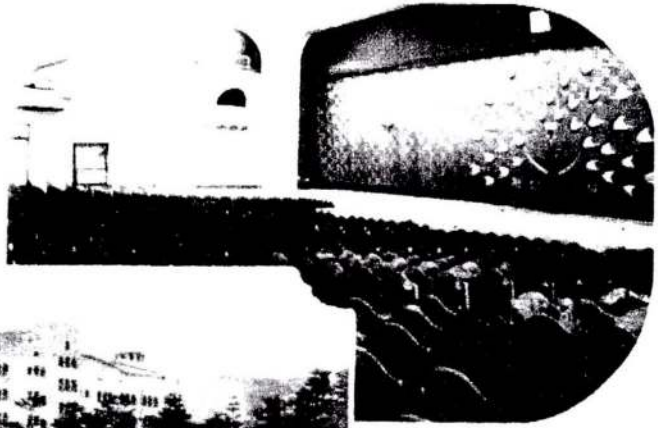


株式會社竹尾商店
（大阪市東區南本町三丁目）

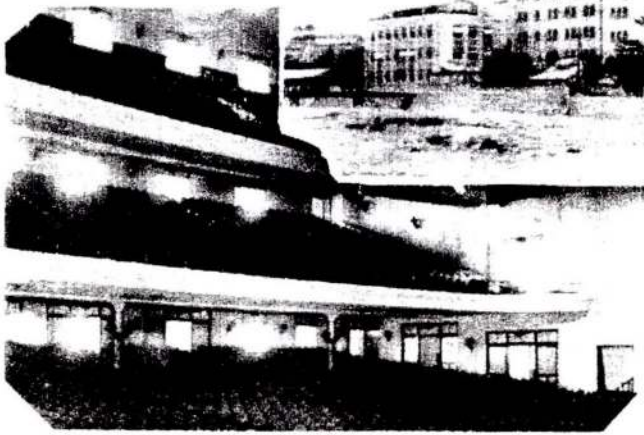
計設及工施督監
宗建築事務所
工事請負者
木村組

（二　の　そ）

舞臺面



觀覽席



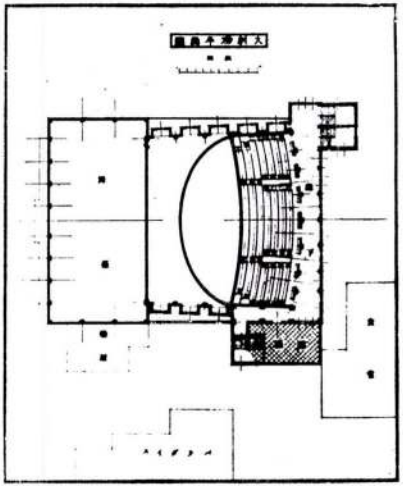
外觀

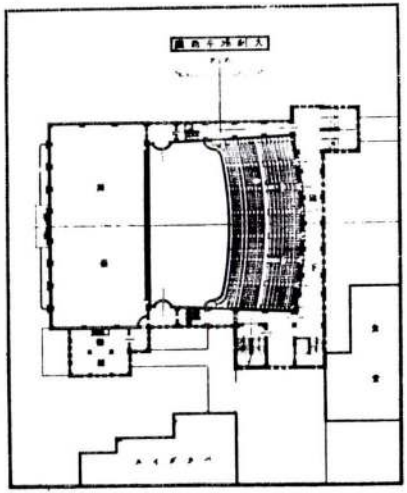


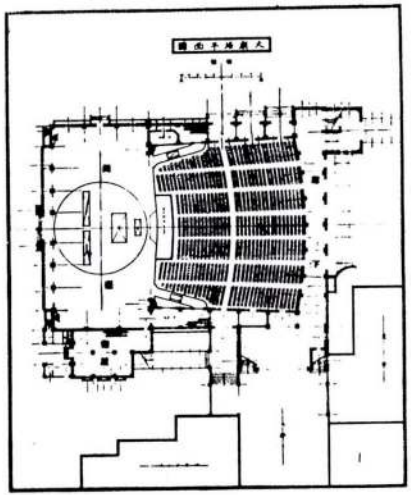
寶塚大歌劇場

竹中工務店 工施及計設

（二　　の　　そ）







會告

宿所不明者に就いて

左記諸君の轉居轉勤先が判明しないので、一切の郵便物は所在不明の廉で返送されて來ます、どうか御移轉先を知らして下さい、尚お知り人の方は御手數恐れ入りますが、本人に御注意下さるか、或は轉居先を本協會事務所へ御知らせ下さる樣願ます

會　員　高堂德治
地方會員　内藤益二　仝　松室成貞　仝　籔中一良
特別賛助員　今井完造
普通賛助員　伊東武雄　仝　石津三吉　仝　戸山音次郎
仝　地福勇吉　仝　太田四郎　仝　渡部三郎
仝　若林俊一　仝　若宮虎吉　仝　吉田榮次郎
仝　吉本新之助　仝　好岡亭　仝　吉松一
仝　田代正熊　仝　中山伊勢市　仝　植松與右衞門
仝　野々山政金　仝　久保豊　仝　矢田部喜平
仝　政安熊市　仝　福見亮爾　仝　藤本助一
仝　小林久之助　仝　小島榮二　仝　權藤洗二
仝　鴻上佐藏　仝　足立彌一郎　仝　青木立三
仝　酒井綏之助　仝　坂根秋光　仝　小枝實
仝　清原佐市　仝　木越誠二郎　仝　茂木清太郎
仝　檜山一男

轉居轉勤に就いて

會員、賛助員の方で御轉宅或は御轉勤なされた節は、其都度直に當協會へ御知らせ下さる樣お願ひ致します

協會員氏名錄新調に就いて

昨年十二月調製致しました協會員住所姓名錄は、年末多忙の際短時日を以て愴惶作製致しましたので誤謬が澤山ありましたのは編者の深く陳謝する所で御座います、そこで今回新調することに決定して過日來御住所等照會致しました次第でありますから、どうかお早く御回答を願ます尚昨年調製の住所姓名錄中住所の全く轉換致して居ります　のを左に訂正して置きます

頁	氏名	正	誤
8	伊藤幸太郎	大阪市北區相生町三五	大阪市外天王寺村天王寺一二八一
8	伊藤正文	大阪市外天王寺村天王寺一二八一	大阪市北區相生町三五



裝飾藝術の始源

ヴントに據れば、原始人に於ては造形的藝術の種々の形を見ない。唯その斷片を見るのみである。ヴエッダ及びセマング、セノイに於ては裝飾と云つても、直線模樣を竹製の弓、笛、櫛等の器具の上に施す。その際の意匠は三角模樣が基になり、是れが上下に重ねられ或は左右に列べられる。或は斜の筋を一杯に附けた三角形と然らざる三角とを交互に結合し、或は三角形の底を圓形に變じ、之を種々に組合せる。最も巧妙に是等の意匠が組み合されてゐるのはセマング及セノイの女の櫛である。カールフオンデンシュタインの研究によれば、直線の波形は蛇、三角形の角を下に向けて幾箇も重ねる模樣は女の前垂を上下に列べた所、多くの四角形を其の角を以て連ねるとこれが蜂の群、三角形の一邊が直線になるように並べると蝙蝠だと云ふ。此の場合に心理的に興味ある問題が起る。それは、此の樣な幾何學的模樣は、最初是等實物の模寫であつたのが漸次簡單化し變形して、所謂樣式化したものか、或は、初より斯る模樣として起つたか。ヴントに據れば後說が眞である。



都市防備論

藥師寺主計

緒言

歐洲大戰以來都市の防備に關する論議が盛んに稱へられ出した、曾て內務省で防火建築の宣傳びらに『爆彈投下の慘狀を思へ』などと揭記せられたこともある、又飛行協會の長岡將軍の講演を聞くと、投下せらるゝ爆彈一發で東京や大阪は寂滅の焦土と化するやうに言はれた、過般帝都震火災の被害程度以上の慘禍が、爆擊を受けた際には生ずるとさえ稱へられ、復興院の評議會や審議會に於ては　復興には帝都の防空設備を顧慮せよとの問題が喧しく議論せられたと聞及んで居る、帝都の防空は度々且つ益々問題になるやうだが、議論する人々にも亦當局者に於ても、何等纏つた具體的な防備策や施設案があるのでもないらしく、いつも其場限りの空論で終り、有耶無耶に立消ゆるやうであるのをみれば、まだ我邦では此問題は、眞劍味の甚だうすいもので緊要なことゝ思はれて居ないことが覗はれる、果

して此儘に推移にまかし擱て居いてよからうか。

東京や大阪が爆撃を蒙ることがありや否やは、起り得べき可能率の判定が全く見當つき兼ぬる、平和は世界皆人の理想とすることで滅多に戰爭は起るまい、けれども人類は爭闘すべく運命づけられて居る永遠の平和はとても望まれない、若し不幸にして我邦と他との國交が破れて戰端を開くやうな場合があつたと假定して、果して東京や大阪が空中爆撃を受くるであらうか、受けたとしたならば其結果はどんなであるか、言はるゝが如く數時にして灰滅に歸するものであるか、此等の諸問題はプロバビリテイが非常に稀れで全く豫測が出來ない、隨つて防備策は如何にせば可なりやの案件も假定が甚だ多くなるのと、實驗が伴はないので、まるで雲を摑むが如き糢糊曖昧な事柄であつて、少しも具體的に研究せられて居ないから、現今の狀態では如何とも解決のしようもなく、只時々の論題や話題に上るに過ぎないのは我邦現狀に於て無理からぬことのやうである、けれども不可解の問題として又起り得べき可能性の少ない事柄として何日迄も放置してよいとは思はれぬ、國防を八ケ間敷叫び軍備の充實に力を入れる我邦が、又文化の啓發には何事も歐米に劣らぬと自負する我民族が航空輸送や防空設備に無關心で、之を放棄の狀態にまかして將來を迎へつゝあることは非常な矛盾で且つ冒險であるやうに思はれる、やがて英米佛等と此方面の懸隔が及びもつかない掛け離れたものとなり、各國の飛行機及飛行船が交通運輸に續々東洋方面に飛來するの曉には、必ずや大問題として眞面目に考究せざる可らざるの時期が目前に迫りつゝあること丈けは、ある慥かさを以て想像せられる、そのときに周章狼狽せない覺悟と用意のみは、今日から是非顧慮して置くの必要があらうと思ふ。

近頃我國民性は總てのことに目先の議論のみに日を暮して實行の道程が遙に遠いやうな感じがしてならぬので、例へば當面の問題たる帝都復興事業の如きはお祭りの樽御輿行列のやうに押し歩く丈けで正味は埒もたわいもない狀態のもとにあるやうである、都市の防備などの如き大問題は具體的解決の曙光をさへ之を得るまでの研究や實驗は先づ當分行はれそうにもない、殊に航空爆撃のやうな差し當り目前

のことでもなく、又近き將來に於ては出逢ぬかも知れない、アンデターミネートの事柄に於て尙然りである、若し萬一帝國の防空及都市防備などに、多少でも見當がつくとすれば、それは矢張り歐米各國の後塵を拜しその糟粕を嘗むることに依つてゞあると、斷言して敢て憚りないことを遺憾とするものである。

歐米各國では大戰の實績に鑑み防空は單なる都市の問題のみでなく、國防上の重大案件として祕密裏に盛んに考究せられて居る軍事上に於て航空機は兵器の一種ではなく、陸軍海軍に對して空軍として鼎立し國防上の三部を形成せんとして居る、航空機に關しては航續力と積載容量の增進の研究に力を注ぎ又爆彈の研究は勿論のこと投下實驗をなし、構築物や、材料の抵抗强度、爆藥の威力等が調査せられつゝある、更らに航空機は文化增進の器として、交通運輸に常用して利便なる、能率增進機關として最上のものとなりつゝある、國際交通連絡の爲め歐米主要都市間には航路が拓かれて居る、其進展は眞に停止する處を知らずと稱するも決して過言ではない狀態になりつゝある、要するに彼等は此後の文化に將來の軍備に到達すべきの目標に向つて一意專心脇目も振らずに進んで居るものといへる、獨り我邦は之を對岸の火災視して拱手傍觀して居つてよいものであらうか。

歐州大戰に於ける都市の爆撃

歐洲大戰の際ダンケルクや、ベルダンや、ランスのやうな戰線にあつて砲彈や爆彈を、雨霰と受けた市街は別として、戰線から相當の距離にあつて主として空中爆撃のみを受けた代表的都市は、英佛の主府である、即ち倫敦と巴里とである、倫敦攻撃の航空機の根據地は白耳義やルール地方であつて、巴里襲撃のものはストラスブルヒやフランクフルト等のライン地方から出て來たのであつて、根據地の飛行場から二百哩乃至三百哩を飛來して倫敦や巴里を爆撃したのであつた、倫敦の空中爆撃は千九百十五年

一月十九日の眞夜中に航空船チエツペリンに依つて投下された重量二拾五瓲の爆彈に始つたのである、爾來度々飛行機も混はつて市民を威嚇し建築物を破壞した、殊に千九百拾七年七月拾七日の月明に乘じて獨逸の飛行機が群鳥の如く亂れ飛び無數の爆彈を投下したときには、さすがに大度沈着、物に動せない英國人も狼狽してなすすべを知らなかつたといはれてゐる、防禦の方法としては白國の航空機で之を迎擊せしむること高角射擊砲を市街の周圍に備え付けて射落すことであつたが、いつも夜分のことで敵機の發見が困難であつて一向命中しないのみならず落下する砲彈は反つて自已の市街を砲擊するやうな結果となり、さん〳〵困りぬいたあげく、敵機襲來の道筋に繫留氣球を配列して飛來し、之を連繫して鐵線の簾を釣り下げて、所謂空中防禦網を構成したが、之れとてさしたる効果はなくて戰役中を通じて倫敦の上空は全く獨逸航空機の跋扈跳梁にまかしたと言はれた、斯くて空中爆擊を受くること百餘回にして市民の死傷は六千餘人を算したのであつた。

巴里市街の襲擊を受けたのも倫敦同樣であつた、夜間一切の燈火を滅じたる暗黑の巴里市街に向つて幽かに星光に白むセーヌ河の反影を目標に辿つて飛來する獨機の技倆は眞に勇敢無比なる行動であつて之を迎擊々破するには、流石に優勢なりし佛の飛行機も、餘程の困難を感じ途方に暮れたと言はれた、擊留氣球を多數に散在して飛飜し空中障害物を設置したり、聽音機を備へて襲來の方向を知り、エツフエル塔からサーチライトを照して搜索するなど色々の方策を講じたけれども、いつも任務を果して悠々と歸り行く敵機のあとを追ふて砲擊した位が關の山で、思ふ存分荒らさるゝにまかしたといふより外に何等の對策もなく、戰役間を通じて爆擊を受くること前後七十餘回にして、投下されたる爆彈數は實に千五百餘發の多數であつた。

倫敦も巴里も市街の建築物は多くは屋根や床に特種防備の用意がなかつたとはいへ、壁が石造又は煉瓦造の不燃質材料で構築してあつたとと、都市の消火機關が完備して居つた爲に、其慘害も比較的少なく大火災を起すやうなこともなくて、常に被害は局所に止まつたのはさすが文化の都市として誇るに足

るものがある、家屋の防備方法としては倫敦では屋根に丸太の櫓組を構え木材を幾里にも積み重ね、尚其上に土嚢を乗せる案を立てたが、生憎勾配の屋根が多かつたのと、そんな餘計な荷重を屋上に乗せることを豫定して家屋を建築したのではない爲に、之を應用實行すべき建築物が少なく、其効果も實驗せられずに終つた、巴里では凱旋門やノートルダームのやうな名建築物や、ジャンダークの記念像などの周圍に、堅固な足場を組み砂嚢を積みかけたりして防禦策を講じたが土嚢が腐朽したり又は破れて砂がずり落つるに困つたといふことがある、ランスの大伽藍の如きは其東北面を高い土嚢壁で嚴重に圍繞してあつたけれども、砲彈や爆彈で蜂の巣のやうに破壞されてしまつた。

建築物で爆撃防備の顧慮を以て大戰中に構築せられたものが巴里に只一つある、それはソシエートゼネラルと稱する銀行の信托金庫であつて、直徑三十米突、高七十餘尺六階の鐵筋コンクリート造の圓筒型となり、周壁には只一ケ所の出入口を除きては一切の開口なく、壁及び屋根版は鐵筋コンクリート厚一米突の堅牢な構造となつて居る、採光は中央屋上の天窓より行ひ、電力によつて瞬時に開閉し得べき厚さ半米突の鐵筋コンクリート蓋を裝置してあつて、不時の爆撃に用意してある等一種の砲壘の如きものである、ベルダン要塞に於けるボーヤドーモン砲壘の外部被覆の鐵筋コンクリート壁が、獨逸の四十二サンチメートルの砲丸に可なりに抵抗した實績より推定すれば、此信托金庫は大戰當時使用した五十耗や百耗の爆彈投下に逢ふても安全であつたことが想像せられる。

之を要するに大戰中建造物の應急的防備策は、殆んど効果が擧らなかつたのであるが、防火構造であつた爲に爆撃を受けても大火を起すことなく、其被害は比較的少なかつたことは疑もない事實である、尚特筆すべきことは倫敦や巴里の市街は、公園や、廣場や道路等の公地（パブリックスペース）が多かつた爲に、爆彈の建造物に命中する率が非常に少なかつたことである、東京の復興に際して、市民も當局者も之等の實例を頭腦に刻銘して計畫に當らねばならぬことゝ思ふ。

航空機の發達

回顧すれば德川日野の兩大尉が代々木の原で、飛行機の滑走を行つて、始めて吾等に空飛ぶ怪物を紹介して以來、まだ十餘年に過ぎないが、近頃は爆音勇ましく帝都の上空を飛ぶ飛行機には、小兒すら珍らしがらなくなつた程夫れほど航空機は普通的のものとなつた、先達ての東宮御成婚日に、四十餘機が翼を並べて飛翔したのを見れば、我邦に於ける航空機の進展は、眞に隔世の感があるといへる、けれども一度眼を轉いて世界航空界の大勢を見れば、我邦のそれは餘りの貧弱さに、なさけなくなるほど、英米佛等と懸隔がある、日本の飛行機が、代々木の原で單なる滑走をやつて居た時代に、既に歐米では丁度今日の我國程度の狀態であつたと同樣な等差や夫れ丈け位の徑庭が、矢張り現今に於て、彼我航空界の間にあることは、歐米を巡つて見るとすぐ了解出來るのである、最も日本の文化とか文明とかに關する總てのものが歐米の輸入と模倣であつて、孰れも數十年のハンデイキャップを、彼等に占められて居ることに比ぶれば、航空界の現狀は、當りまへのことであつて、敢て憤慨するの要もないが、事は國防に關係がある都市防備の大問題だなどと言ふならば、現下我邦の航空界の狀況は、成り行きにまかして放置すべからざるであると思ふ、軍事のことは專門外から窺ひ知ることが出來ないが、兵器として軍艦や大砲などに比し、我國で一番遲れて居るのは、航空機であるといはるゝ、又實際に於て、海軍は華府會議で、日、米、英の比が三、五、五の比率で決められて、我國相當の防備力を有するものとして國民は許して居る、陸軍は過大であるとて軍縮の聲喧びしい位であるから、まづ各國に比し大なる優劣はあるまいと思はるゝが、獨り將來の空軍を構成すべき航空界の實力は、彼等のそれの五分の一乃至十分の一であることを斷言するに躊躇せぬことを甚だ遺憾とする、試に最近の調査による各國の軍用飛空機の數を比較すれば左の如くである。

英國　一、五〇〇　米國　二、八〇〇
佛國　二、五〇〇　日本　五〇〇
伊國　七二〇　露國　五〇〇
支那　七〇

この數字は平時に於ける比較であるが、戰時には英米佛共即時動員として二倍、三倍は容易に增加し得るといふ、殊に佛國の如きは何時でも操縱者一萬人を集め得るといふに至りては、只々驚くの外はない、千人の操縱者を得るに困難な我邦に於て所謂一旦緩急あるの秋ありとすれば眞に思ひ半ばに過ぐるのものではあるまいか。

英京倫敦と、佛都巴里との空中輸送連絡が開始せられたのは、つい三、四年前であるが、現今では其他の歐洲各國の主要都市間に、國際連絡の交通飛行が到る處に行はれて居る、佛國では塲國ウインを過ぎて、土國コンスタンチノープルに至る航路、リオン、マルセーユを經て地中海の彼岸アルゼリーに至るの飛行路などが開設せられて居る、倫敦と伯國の主府ブラッセルより和國の主府ヘーグに至る航路がある　獨國は伯林を中心として國內都市の連絡及遠くは露都モスコーに迄飛んで居る、米國は大西、大平洋の連絡大陸橫斷飛行を行ひ、尙、英、米、佛は東洋に向ふの航路をさへ計畫しつゝ米機は既に大平洋を飛び去り、佛機はあざやかに東京に着し英機も遠からず來らんとしつゝある。

歐米に於ける都市の連絡飛行には乘客の有無に關せず、每日定期に發着し、婦人小兒と雖手荷物をさげて嬉々として乘り込んで居る、倫敦巴里間には日歸りの商用などを達する爲に之を利用する人が大分あるといはる、發着所の設備なども既に一定の型が出來て居て、旅客待合室、事務室、稅關出張所、食堂等が設けられ、夜間着陸の照明及數十哩を照す探光燈、信號標其他の設備は、正に鐵道停車場と同樣な整頓したものとなりつゝある、飛行機も乘客十二人乘から二十五人乘となり尙漸次型を大にしつゝ、既に先年伊太利では百人乘用機さへ出來た位である、我邦で朝日新聞の京阪連絡飛行機が、天氣のよい

日を選んで時々思ひ出したやうに飛ぶのとは、遙かに掛け離れた進展の域にあるのである。

軍用の飛行機は飛ぶ丈けが能事でなく、偵察、戰鬪、爆撃とそれぞれ分業の任務に服するやうになつて來た、最早航空軍は陸軍、海軍附屬の戰鬪の一機關でなくて、空軍として立派に獨立し得る資格を具備して、丁度海軍の軍團編成のやうになりつゝあるのである、都市を爆撃する航空機の如きは、大戰以來積載能力及航續力急激に增大し、今日では無着陸十數時間、爆撃一噸以上を携載する等のレコードを作れる等其進歩改良は停止することなしといふも過言ではあるまい。

爆彈の脅威力

都市を爆撃するのは主として爆撃飛行機である、歐洲大戰當時チエッペリン飛行船が倫敦や巴里の市街を攻撃したが、飛行船は圖體が大きくて取扱に不便なると、速力が遲いので飛行機や砲丸に破壞されるとと、經費が多大に要する等で、此後は爆撃には飛行機が重用されて發達すべき運命にある、歐洲大戰中獨逸のフオッカー式飛行機などが都市を攻撃した當時の爆彈の携載量は五百瓲が最大であつたが、今日では二千五百瓲以上增加した、即ち百瓲の爆彈二十五個五百瓲のものを五個、携行し得るに至つた爆彈も一個一瓲以上の強大なものさへ製作され出した、大凡之等の偉大なる威力に對して普通な地上構築物の何物が抵抗し得るであらうか、歐洲戰爭當時の實例を見ると、煉瓦造又は石造建築物には五十瓲の爆彈は三階を、百瓲彈は五階を貫通して居る、僅かに堅固に造られたるコンクリート造の地下室が安全であつたに過ぎない、石敷やコンクリートの舗道に落下した場合二米突乃至四米突の摺鉢形の孔を穿ち、尙周圍に龜裂破壞を及ぼして居る、之等被害の程度より推定するに五百瓲、千瓲の爆彈の破壞力の偉大さは想像に餘るのがある、三千米突の高空から投下した爆彈の地上に於ける侵徹破壞力は、丁度同重最の砲丸を直上に打ち放つて其射距離三千米突の高度に達する大砲の、砲口に於ける威力に相當す、三千米突の高さより落下せる物體の地上に達する瞬間の秒速は約四百三十米突である、同高度より投下

した千瓲の爆彈の威力は恰も四十サンチ重砲の、砲丸の秒速四百三十米突の時に於ける威力に等しい、斯の威力に對しては吾々の知れる範圍の建築材料や、建築構造學の程度では何物も之を防止することが不可能事であることが考察せられる、茲に普通構築材料の掩護層に向つて四千乃至五千米突の高度より投下せられたる爆彈の破壞度を揭記すれば大凡次記の如くである、

一、尋常土の塲合

百瓲の爆彈　五米突半徑圈內
三百瓲の爆彈　六米突半徑圈內
千瓲の爆彈　十米突半徑圈內

一、煉瓦體の塲合

百瓲の爆彈　一米突五十半徑圈內
三百瓲の爆彈　二米突五十半徑圈內
千瓲の爆彈　三米突五十半徑圈內

一、コンクリート塊の塲合

百瓲の爆彈　〇、六米突半徑圈內
三百瓲の爆彈　一米突半徑圈內
千瓲の爆彈　一米突八十半徑圈內

構築材料のうちで未だ其抵抗力度の分明して居ないものに鐵筋コンクリートがある、歐洲大戰の際砲壘を除きては普通の建築物等で鐵筋コンクリート造のものが、砲擊や爆擊を受けた例がなかつたので、其成績が確證せられて居ない、が確かに他の材料に比して優越なる掩護材料であることが想像せられる、過般の大地震の際某ビルデイングの建築塲で次のやうな事件が起つた、それは約八十尺の高所から一噸重量の金物が鐵筋コンクリートの床版の上に墜落したのであつたが、其被害は僅かに徑七寸位の孔を穿

つに過ぎなかつた、然も鐵筋コンクリートの床版は四寸厚の甚だ薄い物で挿入の鐵筋は三分丸棒であつたに係らず、之を貫通するに至らず鐵筋は衝突を受けて少しく彎曲移動し其部分のコンクリートが破壊せられたに止まつた、又工兵隊が建造物殘骸の爆破に際して最も困難したのは鐵筋コンクリートであつた、其實驗をみるに爆破の被害は局部的に影響するのみである、二寸位のコンクリートの被覆中にある一吋の鐵筋は、二瓩の爆藥の力で僅かに彎曲せる程度に過ぎなかつた等の實例を見ても、鐵筋コンクリート構築物の抵抗強度は非常に大なるものであることが考察せられる、既に一昨年佛蘭西のアーブ軍港では鐵筋コンクリート造の家屋や煉瓦造の建築や其他の構築物に千瓩の爆彈を投下して其抵抗力を試驗したことがあつたが、鐵筋コンクリートが最も其成績優良であつたといふことである。

爆彈には破壞彈の外に燒夷彈がある、各種の酸化劑、炭水化物等の強烈なる發火燃燒藥を塡充せるものにして、其破壞力は屋根及最上階を貫通する程度のものであるが木造建築物等に及ぼす慘害は決して前者に劣るものではない、歐洲大戰中巴里に於ける佛國陸軍省の建物、クランス百貨店などの燒却せられたのは此燒夷彈の命中によるものであつた、佛國の飛行將校が日本の都市は燒夷彈十數發で全滅せしめ得ると廣言したとのことであるが、東京のやうな火災に對して無防禦な、加ふるに消防機關の頗る貧弱なる木造都市は少し强風でもある際に、此種の爆擊を受けたならば、過般のやうな大慘害を生じないと誰れが確信をもち得るであらうか。

都市の防備

我邦の都市の防備如何は勿論國防上に大なる關係がある、確然たる國防の方針が樹立せなければ防備の方法も亦其要不要も分明しないけれども、今漠然たる都市の防空如何といふことより論ずれば防備策としては積極的と消極的との二つの方法があると思ふ、積極的防備とは所謂毒を制するには毒を以てす

の類で、都市を爆撃すべき航空機の襲來に對して優勢なる航空軍を以て之を迎撃して撃滅せしむることである、又空中防禦網や高角射撃砲を備へて敵機の浸入を防止する等、主として軍事的施設に待つべき事柄である。

消極的防備策とは都市の構成に關するもので都市計畫の完備せる遂行にかゝるのである、歐米に於ける、都市は先天的に防空設備が出來て居るといへる、即ち完全なる都市計畫が行はれてあるからである都市の改良は平時にありては、交通運輸を利便にし商工業の隆盛をはかり、市民の保健衛生に役立つ等都市の完全なる發達を助成し人類の幸福增進に資するの法策施設であるが、一朝事變に際しては災害防止の効果を擧げしむるに肝要なものであつて、都市防空の要項は取りも直さず都市計畫の要點を合致するのであると言へる、茲に都市防備の必要事項を列擧すれば左の如くである、

一、都市の市街區劃は成るべく單純整一なるを要すること、
一、道路の幅員は可成的之を廣からしめ、其交叉點又は交通頻繁なる箇所等には廣場を設くること、
一、都市の區域内及近接せる郊外には多數に且つ廣き公園を設くること、
一、道路公園廣場等其他の空地には樹木を植え公園廣場等には噴水池、遊泳池等の貯水池を配置すること、
一、市街地の建築物は成るべく多く防火構造となすこと、主要道路に面しては特に鐵骨鐵筋コンクリート造等災害防備の構造となすこと、
一、建築物の階數成はるべく階數を多くし各階床及屋根等は鐵筋コンクリート版の構造となすこと、
一、交通機關として堅牢なる地下鐵道を施設すること、
一、上水道瓦斯電燈及電話線は地下隧道内に之を收容し上部は鐵筋コンクリート材料等にて之を被覆防護すること、
一、橋梁は總て鐵筋コンクリート造とし、吊橋等の鐵梁及桁はコンクリートを以て掩護被覆すること、
一、瓦斯及石油タンク等爆發性構築物、火藥類の危險物に總て郊外の遠くに之を隔離すること、

一、消防設備の完全と消火機關の充實をなすこと、

地下鐵道や上水道管の掩護層の厚さや埋設の深さは、將來の爆撃を顧慮して計畫するならば、實驗の結果を得て之を決定すべきであつて簡單に取扱はるべき問題ではない、建築物の高さや階數や、又は其屋根及床の構造法等に於ても同樣である、歐洲大戰當時有効であり又安全であつたと稱する巴里や伯林の路下式電車や、建築物の地下室は最早此後の都市としては安全なるものではないのである、東京の復興に際して將來都市の防備を顧慮するならば、只單に歐米都市を模倣して計畫を行ふことは悔を百年の後に殘すの類であると思ふのである。

我邦の領土には北西に沿ふて延々として三千哩の亞細亞大陸が横はつて居る、浦潮から東京へは六百哩上海から北九洲へは七百哩の距離がある、孰れも今日の航空界の趨勢からみれば往復連續飛行が可能である、又東南は渺茫として果てしもない大平洋である、水上飛行機は任意隨所に根據地を構えて飛行襲來し得るのである、大平洋の荒浪も日本アルプスの嶮も空高く飛ぶ飛行機には何んの障害にもならない、天空は無限に高く自由解放にまかしてあるのである、陸軍海軍の軍備は平面的防備であるが立體的空中防備は此後に於ける當面の軍備であらねばならぬと思ふ。

都市の防備は尨茫たる大きな問題である、財政經濟の狀態や國防方針から出發して工學技術に渉り其範圍は頗る廣汎多岐に及んで居る、只論議しても何んの効果もない豈んや孰れの方面を見ても根據のない想像からの水掛論に過ぎないに於てをやである、空論するよりは歐米各國のやうに實驗や確證を捉まえて一つ宛解決してゆくのが一番捷徑である、積極的防備として先づ航空機の充實發展が最も急務である、現狀のやうな劣勢の空軍では心細い極みだ、殊に民間飛行界の貧弱さは、殆んど存在を認められないといふなさけない狀態にある、英國のやうに思ひ切つて空軍の擴張を行つたり佛蘭西の如く民間航空を補助奬勵することは一日も擱き難き國防の大勢であると思ふ、消極的都市防備の解決としては佛蘭西のやうに各種の家屋を構案して爆彈投下を實驗して其抵抗力を確認するの必要がある、亞米利加が最近

行つたやうに一市街一部落の建物を犧牲として爆撃演習を行ふことは決して無駄なことではない、地下室や路下鐵道が安全であるか否やは實驗しなくては確かめられない、研究機關もなく實驗も行はずに漠然として都市防備を如何んせんなどゝ叫んでも致方もないことだ、復興評議員會で防空問題が八ヶ間敷かつたとき後藤總裁が穴を堀つて這入つたらよいじやないかといふたとのことだが、當局者として無責任極まる言分だけれども全く現下の狀況に當て嵌つた名言だと思ふ、我邦に於てはいざ鎌倉といふときに、丹那のやうな隧道でも穿つて隱れるより、今の處外に策はあるまい。

遮莫、歐洲大戰の實驗を見て又現下各國航空界の現狀に鑑み、ある確實性を以て考察的の斷案を下すならば、都市の防備策は他國に比して世間並の航空軍備の充實をなすことゝ、所謂都市計畫なるものゝ徹底的施行に待つを急務とす。我邦の財政が空軍の擴張を許さないならば、軍艦の一艘や二艘の建造を止めても、陸軍の一、二箇師團を廢止しても航空軍の發展を行ふ方が大切であるやうに思はれる、東京の復興に金がなくて、廿四間道路が拾八間幅に縮少せられたのは致方がないとしても、區劃整理などは豫定通り行ひ度いものである、殊に防火建築の遂行の成否は東京市將來の運命に懸つて重大なるものがある。（大正十三年六月稿）

日盛りを
靜まる海の
蒼さかな

趣味の建築

神戸高等工業學校教授　古宇田實（文責在記者）

趣味とは何？

人爲的綜合と所謂建築樣式

一口に『趣味』と云ふことを世間一般で唱へますが、其の意味は甚だ漠然たるものである。即ち、如何なるものが『趣味』であるか、と云ふことを確りと捉へることは困難である。併ながら、之を哲學的に、或は科學的に、又は文學的に檢討することは別として、たゞ常識的に、又通俗的に考へて趣味を謂ふならば、趣味とは趣味の文學、趣味の藝術、趣味の園藝と云ふやうに、何れも好い意味即ち藝術の範疇に入れて考へることは、恐らく當然のことだらうと思ふ。まさかに、趣味の泥棒であるとか、或は趣味の墜落であるとか、趣味の脫線とか云ふやうな惡い意味に趣味を見て居ることはあるまい。仍で、趣味の建築とは、勿論、惡い意味のものではない。卽ち、大に好い感じを與へる處の佳い建築、と云ふものに向つて『趣味』なる形容詞を使ひ得ることゝ思ふ。拙い建築、意匠の惡い、不完全な、壞れ易いやうな建築に對して、まさか、趣味の建築だ、といふことを唱へる者はあるまい。

それで、趣味の建築――趣味なる形容詞を戴いて居る建築とは怎麼ものか、と云はゞ、常に人に快感を與へ、市街としては其の美觀を添へ、我々の誇りとなるやうなものを指すことゝ思ふ。卽ち 最も恰好の好い、釣合の取れた、周圍との關係の整つて居る、而も威嚴あり、價値ある建築を目して、趣味の建築と云ふことは論ずるまでもない。併し乍ら、建築は、勿論、天然に出來るものではない。併し其の材料は天然のものを使ふとも、それは、要するに、人爲的のものである。人間が之を集め、之を適當に

組立て〻作るものである。されば、其の纏める人達が有つてゐる處の、所謂趣味嗜好と技能に關係することは論ずるまでもない。けれども、其の趣味は、人の面貌や姿體が異つてゐるように、固より千差萬別である。扨うした人々の集團である處の社會が種々に異つて居るやうに、建築の集團とも謂ふべき都市も亦各々異つて居る。そうして社會の狀況や、習慣、或は之を時間的に考へるならば、その時代に依つてそれ〳〵の特異を有つてゐる。斯くした處の影響を受けて、所謂趣味の建築なるものは、數學的に歸納し得るやうな一定のものが出來る氣遣ひはない。必ず、其處に、或點に於て何れも特異の形が出來るのは當然である。即ち、是が建築の樣式、スタイルとなる一つの原因である。換言すれば、諸君の前に現れて居る幾多の建築物、之を分類すると、樣々なる形式の下に——即ち、所謂萬態千容を綜合することが出來やうと思ふ。

趣味建築の歷史的考察

無數なる樣式と樣式發現の基調

歷史的に稽へると、讀者も識つてゐられる通り、例へば、埃及、亞剌比亞、波斯のやうな紀元前の建築であるとか、或は希臘、羅馬の建築を所謂古典式、或は『クラシック』式と稱して居る。次に『バジリカ』式(初期基督敎式)或は『ロマネスク、シセッキスク』と云ふやうな所謂中世紀の建築樣式、更に羅馬、希臘を復活した復興式、引續いて最も新しい方では『アルヌボー』、更に當時流行して居る『セセッション』式、式は表現式——表現式と云ふ言葉は適當でないかも知れぬが、近頃各所に奇拔な建築が起つて居る之を表現派の建築と稱して居るが、是も今日では一種の建築樣式になつて居る。又古典式の中にも『イオニック、フリンシャン、コンポジット』と云ふやうな建築の殆ど根本をなす樣式がある。例へば、大阪市の中央公會堂の大集會室に於ける柱の如きは、所謂「コリンシアン」と云ふ式から成立つて居るが、尙ほ、日本銀行の玄關或は圖書館の玄關の如きも亦『コリンシアン』である。而して、之等の建築樣式を

復興式（ルンネッサンス）と稱する。斯様に建築樣式が澤山出來て居るが、是は孰も構造の必要から起つたと云ふよりも、寧ろ趣味の結晶であつて、卽ち、孰も趣味から出た反映である、と謂つて差支へない。さうして、其處に時代思潮を現し、國民性の一面を窺知し得るのは、斯の趣味から起る建築である。

藝術的價値の建築

時代思潮と國民性の表現　實用主義と藝術的取扱ひ

されば趣味の建築とし云はゞ、其の時代精神を表現し、國民性を象徵したもの、卽ち、藝術的價値のある建築でなければならぬ。若しも、それを、偶々或る一部の人達が云ふように、建築は實用物であると云ふ立脚點からのみ建築を扱ふならば、決して、其處に、時代思潮が現はれたり、或は國民性が象化される氣遣ひはないのである。それにも拘はらず、現在猶ほ、建築は實用と構造から考ふべきもので、所詮、建築は非藝術である、と云ふやうなことを唱へる人達がある。是れは恐らく總てを分析的に、理智推斷を以てしなければならぬ、といふ習慣に累されたのであつて、情操方面若くは感情方面を全然踈却した觀方に外ならぬ。斯くの如きは、要するに、一種の畸形的觀察である。是は確に惡い習慣であると同時に、日本に於てのみ行はれてゐるそれである。今日、建築の非藝術と云ふことを唱へる人は恐らく他の世界に於ては無い、それは、日本だけの特產物であると云ふことを私は斷言するに憚らぬのである。併し、此處に讀者の注意を要することは、如上の論議を以て、趣味の建築に實用の方面を不要なりとした、との誤解を避けられたいことである。實際に、建築の多數は、無論、實用を基礎とし、其の實用と云ふとに對しては、總てを科學（サイエンティフィック）的に行つて居る。又、斯く行ふことが建築の原則である。唯、之を扱ふ上に、初めて、藝術と云ふ問題が加はるのである。建築を論ずれば、常に二つの方面がある、と云ふことに歸着するのである。卽ち、一は智的考察から來る實用と科學、今一つは、情的方面から來る趣味とである。建築には、必ず斯の二つの方面が備り居るのである。仍で、私は、其の構造的方面、智的

の方面の事ではなく、情的の方面、即ち、趣味の問題を捉へて、此處に自分の所見を述ぶるのであるから、實用的方面に對する檢討は、自ら他日の問題たらざるを得ない。

斯樣にして、何れの建築も、善かれ惡かれ一つの相當な趣味と云ふものを有つてゐるのである。其の點は、衣食と異りはない。着物は、直接個人に取つて建築以上に最も必要なものである。寒暑に應じてそれ〴〵相當な衣類を着、又禮儀として適當な着物を纏ふ。どんな暑い時でも、野蠻人でない限りは相當な衣服を着けて居る。寔に人間生活の上に必要缺ぐべからざるものであるが、等しく衣物と云つても同じ洋服にも皆なそれ〴〵に異つた繩柄や『スタイル』がある。殊に、婦人の和服などに於ては、それ〴〵の人の好みに依つて、着物の形が異ふと云ふことは、今更ら述べるまでもないことである。又食事に於ても同樣である。成る程、衛生學者などから云はゞ、何が何程這入つて居るとか、取り合せが怎うとか云つて『カロリー』に依る論斷に沒頭するが、何も『カロリー』のみが人間の滋養になるのではない。尤も、食物は滋養と云ふことが第一であるのに、實際取扱つて居るものを見ると、滋養以外に食物の献立を考へる。或は、器具と食物の取合せに心を配る。是が、即ち、食物を趣味的に取扱つて居る譯である。建築も是と殆むど同樣である。唯、其の分量が、食物や衣服などよりも大きい。食物は、小さいお盆やお膳に總て纏め得られるが、建築をマサカお膳の上に纏めると云ふことは出來ない。左樣に大きな分量であるだけに、其處に科學（サイエンティフィック）的に扱ふことも大きいし、或は趣味的、美術的に扱ふことも非常に大きくなり、食物や衣服よりも更に一層大きなる趣味の上から建築を論じなければならぬことが起つて來る。

洋手和心の建築

建築の講造は洋式なるもその表現は大和式のそれ

私は斯樣に考へる、建築は其の構造法、卽ち科學的方面の建築、日進月歩の歐米の遣方に手本を採り

大に歐米に學ぶべきである。けれども、其の情的方面、即ち、趣味の方面に於ては、敢て西洋に倣ふ必要はない。大に國民の趣味に基いて、益々國民性を發揮せしむるのが當然である。と同時に、建築に藉りてその國民性が現れて來るこそ、其處に、初めて、其の建築が日本の建築である、と云ふやうなことにもなる、と信ずる。十何年か前であつたが、東京に於て國會議事堂の建築の始まる際に、東京の建築學會で講演會を開いて、議事堂の建築を如何にすべきかと云ふことを討議した。私も、其の時の講演者の一人として、斯う云ふことを述べたように記憶してゐる。即ち、『日本の議事堂は我國民性を現した建築でなければいかぬ。而して、其の構造は洋式であるが、其の情的方面に於ては大和魂が這入つて居なければいかぬ』斯う斷言した。今日は、其の當時と大分時代が變つて、思想に於ても、物質的方面に於ても、非常に變化して居る。けれども、猶ほ、私は、情的方面に於ては、矢張り國民性の現れて居るものでなければいかぬ。建築の精神の中には大和魂がなければならぬ、建築の精神の中には大和魂が存在し得られると云ふことを深く確信して居る。曾つて――曾てと云ふよりは、丁度前年であつたが、私は、歐米を巡歷して、獨逸に入り、あの綺麗な住宅の集つて居る伯林郊外の住宅地ダルムスタットや美術村とでも云ふべきクロォハラルドなどを巡覽して、非常に愉快に感じたが、其の建築物は、我々が日本に於て屢々見るやうな建築が多かつた。それは、どう云ふ譯か、と云ふに、日本では、近頃此の獨逸風の建築物が殿に行はれ、從つて、それ等の美しい建築を見て居るとき、日本に於ける同樣の所謂文化住宅に、獨逸風の建築を聯想されて、日本の建築は、情的方面即ち其の意匠に於て、獨逸に征服されたやうなものである、日本の文化村は獨逸の植民地である――何も日本は强ひて獨逸其の他の外國の眞似をする必要はない、日本自からの生活狀態、社會狀態から出發して、其處に一つの文化村を造らなければいかぬ、と云ふことを熟々感じたが、歸朝してから後、今日も猶ほ其の考は少しも變りはない。所が、方々に出來る文化村なるものは亞米利加や獨逸あたりの佳いものを採つて居らうが、何時まで經つても獨逸や亞米利加の文化住宅に到底及ばぬと云ふことは、唯其の形の上のみを模倣するからであらう

と云ふことを考へて居る。寔に、是は、建築家の罪であらうが、必ずしも建築家の責めばかりではない。恐らくは、一般の日本人が、建築の趣味を有つてゐない、と云ふことに原因して、一つにも二にも獨逸や亞米利加邊の眞似をすれば可いつと云ふ風な考への結果であらうと信ずる。仍で、若し眞似をするならば、其の精神的方面に於ては強ひて外國の眞似をするに及ばぬ、日本の古代建築にも勝れて佳いものがあり、現在の建築に於ても相當に優良なものがあるから、それを眞似る方が可い。繰返して云ふが、私は、建築物に就いても精神的の方面、即ち、情的方面に於て、大和魂の表現が欲しいのである。

趣味の分野

東洋趣味と西洋趣味は所謂兩端の觀察也

併し、もう一度此處にお斷りして置くことは、斯樣に申すと、私は甚だ舊弊な頭を以て、德川三百年の鎖國時代に戻せと云ふやうなことを言ふ如く思はれる方があらうかと思ふが、私自身は、最も進歩した、最も進取的な思想を有つて居る者だ、と私かに恃むで居る者である。蓋し、日本人は、——日本人ばかりでない、東洋人、或は西洋人もであらうが、日本趣味、東洋趣味、或は西洋趣味と云ふものは絶對に反對したものであると云ふ風に考へて居る人達があるようである。私は、趣味と云ふものに就いて左樣に絶對的反對のものではない、最も進んだ、ハイエスト、テーストと云ふものは一致すべきものである、と云ふことを確に信じて居る。即ち、最も高尚なる趣味は、洋の東西を問はずして一致すべきものである。殊に、今日では、諸種の交通と通信機で四通八達段々世界の距離が短縮されると同時に、是等の趣味と云ふものも。皆な東西相混和すると云ふやうな傾向を有つて居る。是は、實際のものを見て明にさう感ずる。又、私は、常に、斯の趣味の問題を競馬に比較して考へて居るが、約り、一つの圓に競馬場があるとして、其の發足點(スタート)を趣味の起りとすれば、それは即ち埃及とか希臘の所謂古代の建築趣味であつて、それから種々の事情で、東洋方面のものは右側を走り、西洋方面のものは左側を走ると云

ふ風に岐れ、互に競走して決勝點に行くのである。而して、其の決勝點は、要するに最も優れた趣味の極致そのものである。其の決勝點に達する間には、素よりそれ〳〵の遲速はあらうが、兎に角、其の趣味の頂點に達すれば、其處には日本の趣味もなければ、東洋趣味もなく、西洋の趣味もない、凡ては其處に一致するのである。唯、其の途中に於ては、進歩に遲速があり、左右相反して、是が東洋趣味で、彼が西洋趣味であると云ふやうな極端に岐れてゐるが、段々進んで最後の所に到れば、兩方が一致するものである。是は、實際に種々なる事實から歸納されるので、決して誤見ではないと云ふことを、私は確信してゐる。

仍で、屢々、東洋の趣味、西洋の趣味と云つて、之を絶對的に相反するものゝ如く考へてゐる人のあるのは、要するに、最後の決勝點まで行かず、左右兩端を彷徨してゐる人達の言ふことで、忌憚なく云はゞ、それ等の人達は、まだ本當の趣味にまで到達してゐない人である。今その實際の一例を申さば、一昨年であつたか、我實業家の團體が歐米を漫遊された中に、我が海運界に知られた一人である處の藤原銀次郎氏があつた。同氏は我現代の有數な實業家であると同時に、茶人として名高い人である。同氏は、件の漫遊から歐羅巴の所謂バタ臭い道具を種々持つて歸へられたが、遖が茶人だけにそれをお茶の道具に利用されて、或は水差とし、菓子鉢に使ひ、煙草盆などに用ひるなど却々思ひ附きであつた。處が私は、それを拜見して、如何にも能く調和してゐるのに熟々感心したのである。成る程趣味をほんとうに理解した人が扱へば、西洋のものだからと云つても、日本の茶の湯に適當しないと云ふことはない。西洋には西洋の面白いものがあつて、それを利用すれば如何なるものでも日本の趣味に適合するものであると云ふことを感じたのである。斯うした一片の事實から考へても、趣味の達してゐる者は、洋の東西を問はないと云ふことを私は疑はないのである。又、もう一つ面白いことは、曾つて、東京の細川流茶道の家元である細川子爵家に於て茶道の大會を催された節、私も聘れて參つたが、其の庭には澤山の茶席があつて、日本で所謂『つくばひ』の手洗鉢と云つて、西洋人には趣味の解らないものだと云はれて

ゐるやうな最も澁い手洗鉢があつた。是は多分羅馬邊りから持て來られたものであるように思はれる分それは公會堂の大理石で出來た所の所謂『コリンシアン、オーダー』の柱を利用したもので、或る部が缺げてはゐるが、其の手洗鉢が、如何にも能く日本の斯う云ふ茶席と調和して居り、普通のものを使ふより面白いと云ふことを見て、成る程、茶の湯も斯くあつて本當の茶の湯である、所謂お手前宗匠が茶はどうしなくちやならぬ、お手前は斯うしなくちやならぬと云ふのは、まだ未熟なものであつて、本當に茶道に達したものならば、西洋のものであらうが、何處のものであらうが、それを面白く扱ふことが出來る、是が本當の趣味に達したものである、——と斯様に考へられる。即ち、趣味と云ふものは、其の最高所に到れば、洋の東西を問はず、總て一致すべきものであると云ふことを痛感した。食物に就いても、例へば、巴里の人は赤蛙や蝸牛を食べるが、それは恰當、日本の人が海鼠腸や海鼠を賞美すると同様なものである。而も、その赤蛙や蝸牛を食べるのは所謂食道樂の人で、其の方面に於ける趣味の最も進んだ人だと聞いてゐる。日本でも、海鼠腸を食べたりする人は、最も食物の趣味の達した人だ、とされてゐる。聊か牽強附會の嫌ひはあるが、そこらも矢張り趣味の一致してゐる點であるかと考へられる。從つて、衣服、飲食、住居の上に於て、其の趣味のある所は西洋でも日本でも殆むど異りはない。日本では、西洋料理を食べるとき、皆同じやうに象牙か銀の柄の附いた『ナイフ』を用ひ、殆むど一樣の皿を使ふものと考へられてゐるだらうと思ふが、西洋に於ても、趣味の達してゐる人は、日本と同じやうに、色々の器具を銘々異へて使ふてゐる。恰當、日本の茶人が色々好みの道具を出して、お客に饗應すると云ふことゝ同じである。私は、此處等趣味の一致してゐる點を現すのではないかと思ふ。

庭園樣式の推移

形式的庭園と自然風の庭園

尙ほ、庭園に於ても同樣である。今、少々庭園に就いて述べむに、歐羅巴の庭園は、十七八世紀の頃

まで・伊太利の庭園、若くはそれから變化して一層大きくなつた佛蘭西の庭園、之を總稱して復興期（ルネツサン）の庭園とでも謂ふべきものが歐羅巴の一般に流行して居つた。斯んな漠然としたことでは甚だ意味が通じないが、之を樣式の上から云はゞ、此の伊太利から來た庭園は形式的庭園と稱する。それより、十八世紀になつて、英吉利に自然風の庭園が流行するやうになつた。是は如何なる動機から出來たか、と云ふに、支那及び日本などの研究から始つたのであつて、佛蘭西では、之を英吉利（イングリツシユ・ガーデン）の庭園として、大に賞美して居る。今日に於ては、此の英吉利の自然風の庭園が、歐羅巴全體の庭園の風潮であると云ふやうな有樣であるが、是は、全く自然を基としたものであり、其の自然を歡ぶと云ふ所から、又日本の庭園と云ふものが非常に自然風に能く行屆いて居ると云ふので、歐羅巴一般に日本の庭園を賞美する風習が出來てゐる。日本では、日本の庭園を箱庭みたやうであり、或は作り物のやうであるから、西洋の庭園のやうにしなくちやならぬと云つて、西洋の庭園を眞似てゐるが、西洋の方では、それと反對に、日本の庭園は甚だ妙味があると云ふので、英吉利に於ても、佛蘭西、獨逸、伊太利に於ても、日本風の庭園が賞美され、貴族の家などに之を造つて自慢にしてゐると云ふやうな風である。是は所謂趣味の合體で、西洋に於て日本の庭園の面白い所、佳い所を取入れて少しも差支ないと同時に、西洋の所謂イングリツシユ、ガーデンを日本に持て來ても、日本の建築に相應しないと云ふことはなく　寔に能く調和するものであると云ふことを私は信じてゐる。建築に於ても矢張り同樣である。即ち是等のものと建築を色々比較することが出來る。

趣味の建築の理解

紳士としての一資格　趣味建築の認識法

仍で、十九世紀頃の歐米に於ては、趣味の養成と云ふことに就いて、どう云ふ風に扱つてゐるか、といふに、十九世紀の頃では英吉利は勿論のこと、佛蘭西獨逸邊りに於ても古代の建築――と云ふと、或

は語弊があるかも知れまが――即ち歴史的に遺つてゐる處の趣味の建築と云ふものを識ることが、紳士の資格の一つとして考へられて居つた。今日でも、歐米に於ては、矢張り斯の趣味の建築を理解すると云ふことが、『ゼントルマン』の一つの資格であると承知してゐる。是は、單に私がさうであると聞いてゐるばかりでなく、英吉利の前建築協會の會長であつた處のジョン、ベルチャーと云ふ有名な建築家がある、此の人なども其の趣味の養成と云ふことから、どうしても一般の人に、佳い建築を理解する知識を有たすべく努力されてそれに關する著述も出されたが、是は至極尤もな事で、私は、聽て其の方法を日本にも應用したい、と考へてゐる。

然らば、如何にして趣味の建築を認めることが出來るか、と云はゞ、是は實際問題になると甚だ難しい。私は今述べて來つた『趣味』と云ふ言葉が甚だ漠然であると同樣に、實際讀者に趣味の建築を理解しろ、建築の趣味を有て、と云ふた處で、それは甚だ難しい事であらう。要するに、是は理窟で以て出來べきことでない。日本では、兎角、理窟に依て此の趣味をも養成しやうとするが、それは決して理窟ではいかない。實物に就いて敎育され、又は趣味の養成をすると云ふことが必要である。然るに、建築は繪畫や彫刻のやうに分量の小さいものではないからして、一つの堂、一つの陳列室に繪や彫刻を集めてそれに依て趣味を養成すると云ふやうな譯には運ばない。況んや、西洋に於ける、例へば希臘、羅馬の大きい立派なる建築、或はミケラアンゼロが拵えたとかラッハエルが關つた、と云ふやうな建築を、日本へ持て來ると云ふやうなことは、申すまでもなく到底出來ることではない。縱むば、そのモデルを造るにしても極めて困難な事である。仍で、西洋の建築趣味を日本で得やうと云ふには、先づ今日の所では小さな寫眞であるとか、或は書物の插繪に依るか、或は人の說に依て纔に知り得るのであるから、日本に於ける西洋建築の趣味がなか〳〵進んで居らないのは、寧ろ當然の結果である。此の趣味の建築に就いては單に其の形のみならず、分量の美、大きさの美、色の美、環境の美と云ふやうなものが最も大切な條件であるにも拘はらず、之を小さな寫眞や插繪に依て理解しやうと云ふとは、事實困難である。

然らば、どうしたら可いか、と云ふ問題になるが、私は、之に就いて、前に述べた處の、所謂日本の趣味も、西洋の趣味も、最も佳きものに至つては一致する、と云ふ樣なことを敷衍し、日本の建築の最も佳い實物に依つて西洋の趣味を養成するが可いと云ふことを斷言したいのである。私は、神戸の高等工業に於て建築科を預つて居り、同時に、東京の美術學校に於ても、建築科を預つて居るが。其の生徒に向つて、私は、徒らに西洋の建築の解らないものを以て自分の趣味を養成すると云ふことは困難である、寧ろ日本に於ける最も美しい優れたる實例に依つて趣味を養成する方が捷徑であり、それが又本當の趣味の養成になる、と云ふようなことを、常に說いて居るが、此處にも、私は、矢張り其の說を主張したい。幸に、關西地方に於ては、日本の建築の最も優れたものが澤山ある。然るに、是が、或方面からは日本の建築は火に燒け易い、地震に壞れ易い、甚だ不安固な建築である、と云ふやうなことから、もう既に排除されやうとして居る。成る程、構造の上から云へば、今日の學問に於て、鐵筋コンクリート、鐵骨構造が最も可い。又、最も進步したる建築法である、と云ふことは、私も否定しない。勿論、他にも左樣勸めて居る。併し乍ら、趣味の上から云ふならば、私は、日本の建築の決して西洋の建築に劣るものでない、と云ふことを斷言する。私は、歐羅巴の各地を旅行して、希臘から『シ、リー』の方面に往き、希臘建築の粹の粹たるものを覽、印度に於ては、佛敎建築の最も佳いものを覽た。瓜哇に於ても『ボロブドル』のやうな世界的に有名な佛敎建築を見て來たが、それ等の優れたる佛敎建築、或は希臘、埃及を首め、西洋の最も優秀なる建築と、日本の古代建築、古社寺若くは桃山時代の住宅建築、例へば修學院や桂の離宮の如き所謂木造の住宅建築など比較して、日本の建築は決して劣るものでない、成る程其の建築の構造の上に於て、或は劣つて居るかも知れないが、其の建築の趣味に於て、藝術的方面に於ては、一步も讓るものでない、と云ふことを深く感じて、流石に日本は藝術の國である、と云ふことを懷はされた。そして、朝してみると、却つて、是等の貴むべき建築が一向顧みられないで、寧ろ壞れた方が可い、と云ふやうな狀況であることを示されて、寔に、歡かはしく思ふのである。

日本の古建築物

或るプロフエツサーの叱責と日本建築の眞實な理解

されば、私は日本建築より得た處の趣味に依つて、西洋の建築の趣味を解することが出來ようと思ふ又同樣に、西洋に於て有名な大家の說を聽くに、古社寺の如き日本建築、例へば、法隆寺、唐招提寺、東大寺、與福寺或は京都に於ける金閣寺、銀閣寺、桃山御殿の跡と云ふやうなものは、總て日本建築を代表する處の寔に佳い建築である、と云ふことを——お世辭でなく言つて居る『お前は何しに歐羅巴まで出て來たが、丸で事情の異つた西洋の建築を研究しないでも、日本には遙に進んだ、國民性の現れて居る立派な建築があるではないか、それを研究するを忘れて、何を苦んで、態々大金を掛けて歐羅巴まで研究に來るか』と言つて、私は叱られたことがある。現に『ブタペスト』のリヒネルと云ふ、——いまちよツと名を忘れたが——『プロフエツサー』から怒鳴られたことがあつた。是は眞に私共のことを考へて言ふて呉れたのだらうと思ふ。私は、其の時深く感謝したと同時に、成程さうである、と感じ、後で笑つて別れたが、兎に角、私は、西洋建築のほんとうの趣味に達して居る人こそ、日本建築の最も趣味の優れたるものを理解し得ると同時に、日本建築の最も趣味のあるものを理解し得る人であつたならば同樣に、西洋建築の最も佳いものを理解することが出來る、と云ふことを確く信じて居る。

天才と建築

所謂建築家の獨斷場ならざる○味の建築

仍で、奈良や京都邊りには、幸にも優秀なる建築物が澤山に在るから、諸君はそれ等の優秀な建築物を屢々見物され、それに依つて得た趣味を以て、當時の建築或は御自分の建築物をお扱ひになり、又は批評されるやうになつたならば、そこに眞實な趣味のある建築を造ることが出來ると私は考へて居る。而して、歐羅巴の『ルネッサンス』時代、卽ち十五世紀頃に於ては、建築物を造る人は建築家だけではな

く、畫家もやれば、彫刻家もやつた。それ等の時代の名人と云はれる所謂天才の人は畫家であり、彫刻家であり、建築家であり庭園師であると云ふ風に、一人にして各種の專門を兼ねて居つた。有名な彫刻家の神樣と呼ばれるミケランゼロでも、畫聖と言はれるラッハエルツでも、是等の人達は、繪に於ける第一人者であり、彫刻に於ける第一人者であると同時に、亦、建築に於ける第一人者であり、庭園に於ける第一人者であつた。而して、其の專門は、建築をやらうと思ふならば、繪畫や彫刻は其の手段に過ぎないので、目的は建築にある。或は、目的が大彫刻にあり、大製作にあるとしたならば、其の大製作をする爲に、建築の知識或は其他の知識を手段として行つたのである。讀者各位の中にも、或は他の藝術家もおありだらうと思ふ、建築を建築家のみに委かせることなく、他の藝術家も、或は專門の無い方も、自から建築の知識を修められ、建築に對する趣味を養成されて、相當に建築を批評されるやうになつたならば、そこに、最も佳い趣味の建築が出來る、と思ふ。徒らに、新聞や雜誌の一部分の記事や批評にのみ賴らずに、自ら優秀なる實物に就き、最も高尙善良な趣味を養成して、建築家を鞭撻されるやうになり、又、建築家自身も自分の專門にのみ馬車馬的にならず、種々の趣味を以て建築を扱ふたならば、茲に、眞に優秀な趣味ある建築を造ることが出來るであらう。然らずして、趣味の建築を要求し又は其の要求に副ふ所の建築を拵えやうとしても、是は、到底難かしいことである。

要するに、どうぞ、讀者も、善良な趣味を、善良な建築を覽ることに依つて養成され、之を建築家に委任するだけに止らず、又、其の精神に於ては、單に西洋を模倣することなく、所謂大和魂なるものが建築の中にも存在し得る、と云ふことを考へて、互に共同して、大に趣味のある建築を造られんことを望む。

× × ×

建築時言

古橋剛丸

建築と日常生活との交渉は一日も之れを引離すことは出來得ざる關係にあるが故に、吾人建築者以外の人士をして自覺發見せしむることは勿論肝要事であるが、建築專門家が社會的に常識を研究し、接近し醇和して注文者の氣持必要を滿足せしめ、且つこの形造らるゝべき建築物に接見すべき萬象の總てを滿足せしめなければ眞の建築家たるの立場でない、然るに吾人の世界に於ては建築者の爲めの建築、藝術者の爲めの藝術の樣に考へられ、處理せらるゝの傾向がある、之は甚だ遺憾千萬であらねばならぬ。

吾人建築家の使命は既往現代の美術研究及應用のみではない、即ち文者爲政家が社會の指導者たる如く人類生活の基調を率うるの大責任あるものゝ樣に思考す、故に吾人は社會萬物に接見するの中何程かの『ヒント』を得、之を應用し、開發し、進歩さし、社會的に一歩の否數歩の新人であらねばならぬ、余は建築家が單なる構造學者、美術家乃至造家屋を以て任する以外に於て生活の基調、目標者を以て出處せんことを希望するものである、今や幸に世の無產有識階級にまで住宅難の問題より出發して、建築思想を釀成せんとし、余等に質問する其着眼點が專門家をして傾聽せしむべきものあり、歐洲戰爭の後を受けて關東大震災の感激より帝都の複興等、吾人の畑は空々漠々新日本の建設には將さに維新大業の時期に再會したものである、自重而して果斷たらんことを念とせねばならぬ、我大和民族の日本建築家以て如何なす。　十三年六月十日稿）

科學的價値に立脚せる

徹底的産業愛國運動の提唱

工學博士　大河内正敏

近來國の內外を通じて多事多端を極め、國防上、經濟上、國産奬勵の聲が旺なるに至れるは欣ぶべき事である。

帝國經濟會議などでも種々の題目について意見を闘はしてゐるが、要するに總ての産業を通じ、又國民の生活上に於て、內地品の使用を奬勵する事が、一般産業に對して第一の急務であり、又効果の多い事である、從來も此の國産奬勵の聲が頗る旺んであつた事もあるが、然し之れ等は兎角唯經濟上の問題に限り、單純なる價格の高下を論じ、又は漠然と愛國心に訴へて激越に議論するに止まり、科學的事實に立脚してゐないために、實質上內地品の方が外國品よりも優秀なる場合、又は少なくとも同等の實質內容を具うる場合に於ても、之を具體的事實に基いて發表する事が少なかつたために、よつて擧げ得たる効果は聲の大なるに比し甚だ乏しかつたと思ふのである。

今、一、二の實例を擧ぐれば、コンデンスミルクの如きは年々一千萬圓以上の輸入があるが、實際營養試驗を行なつて見ると、外國製品よりは內地品の方が優良なる成績をあげてゐる事が、數字を以て示され得るに拘はらず、國民一般に舶來品が上等なりとの先入主に囚はれてゐるために、優良品なる內地品が外國品よりも價格が廉いと言ふ樣な事實がある、若し之れが外國品と同一値段で賣れるならば相當に引き合ふ事業となつて、一千萬圓の輸入を防遏し得るのみならず、却つて營養價値の高いコンデンスミルクを一般に用ゐる事が出來るのである、之は實に考えても恐な話ではなからうか。

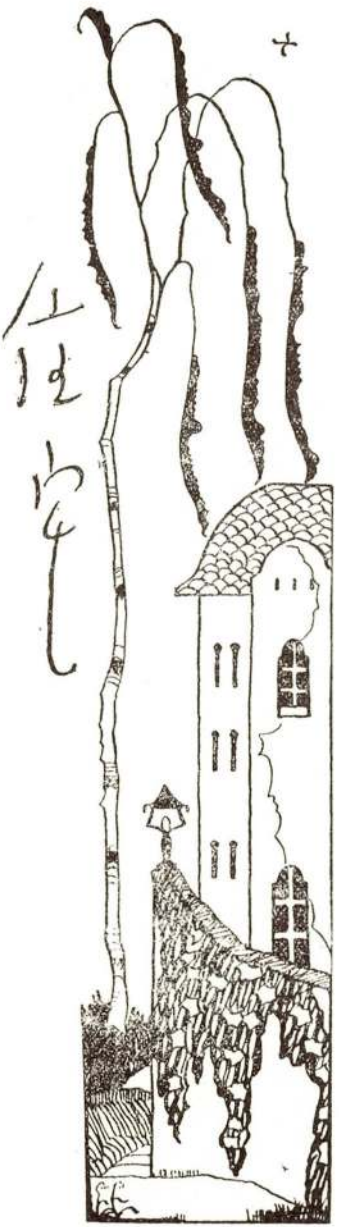
次に他の一例として、科學的價値によつて取引されるために、日本品が外國品よりも値段の高い實例をあげると、人造肥料の硫酸アムモニアは、外國品が一噸百六七十圓であるに對し、有効成分の高率な日本品は百九十圓位を以て賣買されてゐる、これはたしかに日本品が良いと言ふ事が明瞭にされたためではあるが、もし更に詳しく如何なる程度に宜しきやが明かになつたならば、一層價格の相違が出來るか、若し然らずとするも自ら輸入を防遏するに至る事が不可能でないのである。

或は日本の特種鋼の如きも、外國品と比較してその劣らざる事を、學術的に明示する事も不可能でないと考えるのに、今日では唯輸入さへすれば好いと思つて居る。

其の他各種の産業に就て色々の製品を科學的に試驗したならば、斯様な實例は多々ある事と思ふ。

日本人は從來折角かくの如き自國の製産にかゝる優良品をもちながら、一面に於ては外國品即ち舶來品を盲目的に尊重する弊風のためと、又一面に於ては科學的智識の普及が不充分なるために、偶々國産奬勵に關する世論がやかましくなつても、國民の多くが左程心から之に呼應し進んで實行に努める風のないのは甚だ遺憾な事である。

以上述ぶる所を以ても明かなるが如く、今日、國産奬勵は最も必要であり、官公署を始め一般國民は努めて内地品を使用する樣に宣傳もし、奬勵もせねばならないが、單に之を漠然と叫び、又は觀念的に強ひる事をやめて先づ科學的價値を明かにし、一を外國品に比べて如何なる優劣ありやを調査し、劣れるものは之が改良、進歩を圖り、優れるものは堂々とその優良なる具體的成績を示して之が使用の奬勵をなす事にしたならば、國民は安心して、且つ欣んで之を使用するに至るであらう、即ち今日以後の國産奬勵は斯樣な確實な科學的事實の上に立脚せねばならない事を信じ、世間の有識者が斯の如き立脚點の上に徹底的なる産業愛國運動を實行せん事を切望するものである。（終）



婦人に必要な住宅の智識

葛野壯一郎（文責 社記者）

婦人の仕事と男子のそれ　其の體質なり、其の氣質なり、色々の點から考へて、婦人に最も適當な、最もふさはしい仕事は何であるかと云へば、家事を主宰し、我々の生活を指導することである。是れは、一見些事なようであるが、男子の執つてゐる仕事の何れに比べても、優るとも、決して劣ることのない愉快な、意義の深いものである。一口に生活と云ふが、衣食住の日常實際の生活は勿論のこと、更に文藝、美術、宗教、音樂さう云つた精神方面の生活に就いても、矢張婦人の手に依て指導せらるゝことが最も現代に必要である。男子は、實際生活に要する費用を稼ぎ出す爲に、日々に相當に忙しく働かなければならぬ。其の結果、男子殊に都會に於ける男子の考は著しく物質的に偏るものであるが、之を或程度まで調和し、生活の内容を充實して、愉快に自由な本當

の人間らしい生活を味ふには、どうしても其の方面の婦人の努力が必要であらうと思ふ。

住宅に就いて完全なる智識　住宅に關する知識に就いても、男子に比して婦人の方に寧ろヨリ重要であらうと考へる。婦人が家事の主宰者であり、生活の指導者であると云ふ點に於て、是非とも婦人に住宅の完全な知識が欲しい。住宅のことに就いて、一向に何も識らない、と云ふやうなことは、私共の今日の生活の上から云つても、婦人の非常な缺點ではないかと思ふ。例へば、食物の調理と云ふやうなことから考へても、臺所のそれ〳〵の設備に直接關係がある。又は、之を攝る食堂其のものゝ設備が整はない限りは、如何に立派な食事でも、本當にそれを旨しく食べることは出來ない。更に、衣服の問題にしても、幾ら洋裝が便利で、輕快で、今日の時代に適合すると云つてもお互に住んでゐるやうな疊敷の家では、どうしても二重三重の和服を用意しなければならぬ。衣食住の滿足と一口に云つても、衣の滿足、食の滿足は矢張り住居の滿足を中心にしないと、それを完全に得られない。其の點に於て、殊に住宅の知識が必要であらうと思ふ。

世智辛い現代と住宅の滿足　現今は非常に生活の困難な時代である。一口に云へば、暮し惡い時代である。何の屈托も無く、氣樂に衣食住を充たして安閑と暮してゐる。人は、至極少數であつて多數の人は、其の日其の日に追はれてゐると云ふのが現代の狀態である。斯樣な時代に自分の滿足するやうな家を得ると云ふことは、想望として可いかも知れぬが、多數の人に取ては、なか〳〵難かしいことである。家賃さへ廉ければ什麼家でも可い、と云つたやうな考が多數の人を支配してゐる。多數の人は先づ住宅の不完全に滿足しなければならないやうに、遺憾ながら、現代は寔に世智辛い時代であつて、住宅に就いても、食堂は斯の如くあるべし、居間は斯う欲しい、寢室は何うである、と——幾ら立派な理想を並べて見ても實は極く少數の人だけにそれ等の應用が出來るので、多數の人には、謂はゞ猫に小判と云つた樣に實際其の日々の衣食住には餘り關係の無い、價値の無いものである。斯う云ふことに現代はなつて居りはしないかと思ふ。理想的住宅の間取など種

々と並べて、ヤレ此處は斯うする方が可からう、彼處はあゝする方が可いと考へて見ても、御當人は吹けば飛ぶやうな長屋に寢ころんでゐるやうでは、全く猫に小判で、そんな結構な家に住むやうな幸運には、迚も一生涯運り合はせることば出來ない。

問題は先づ現在住むでゐる住宅を中心として　されば、私共が住宅の事を考へるに方つて、今日現に我々が住つてゐる住宅其のものから出發して考へることが最も必要であらうと思ふ。此の住宅のことに就いては、種々な說が出で、殊に、種々と新しい考も出てゐるが、私は、先づ其の考の出發點に就いて能く考へて見ることの必要を認める。兎に角、斯やうな世智辛い時代に於て、多數の人の住宅と云ふ立場から考へるならば、我々は或る程度のもので滿足しなければならぬ。例へば百圓の收入の人ならば、百圓の程度、八十圓の收入の人のならば、八十圓の程度、即ち其の人の日々の收入其のものを標準として其の住宅を考へて行くことが實際に必要なんである。どうも足りない、足りないと云つて見ても、どうしても出て來ない金は、何處からも出やうがないのであるから、どうしても我々は、自分の收入の容す範圍、合理的に支拂ひ得る範圍の金で、如何なる標準に於て自分の住宅を求め、其の求め得た住宅を如何に按排し、如何に取扱ふて、我々の生活を縱令少しでも好いものにし、愉快なものにするか、斯樣なことが、實際問題として、お互に先づ考へなければならぬ問題である。

我等の生活と住宅の一標準　兩親に夫婦に子供、先づ普通の狀態から考へて、少くとも九乃至七つの部屋が必要なのは間違ひの無いことである。食事と居間を一つの部屋で兼ねるとして、子供の部屋、老人の部屋、夫婦の部屋、之に臺所を加へると、人間の生活をする住宅としては、少くとも五つの部屋が是非必要である。併ながら斯樣な廣さの部屋を有ち得る人は一體どれだけあるかと云へば、それは矢張り少數の人であつて、多數の人は、もつと狹い、むさくるしい部屋で滿足しなければならぬ。構造の方から云つても、住宅は獨立家屋であつて、周圍に相當な餘地があり、

十分に日光と新鮮な空氣に浴することの出來る家でなければならぬ。それは理想であつて、誰しも望む所である。併し、實際さう云ふ獨立の家に住み得る人は矢張り少數であつて、多數の人は、極く非衛生的な、不愉快な長屋住ゐを餘儀なくされて居るのが、現代の實狀である。又、材料の方から云つても、木造、煉瓦造、『コンクリート』造と云ふやうに種々なる種類があり、又其の各々に、それ〴〵の式があるから、之を一樣には云ひ得ないが、何にしても、住宅としては、堅固であつて、安心して住へるものが必要なのである。所が、不幸にして、我々多數の人間は、殆むど假建に等しい借家普請に、不安な生活を毎日續けて行かなければならぬ。斯う云ふことは、我々人類社會の一つの大きな不幸事である。併ながら、今日の場合今直にどうすると云ふことも出來ない。是非もないことであるが斯の事は總ての人が是非考へなければならぬ問題であつて、富裕で氣樂な生活をして居る物好きの住宅と云つたやうなものは問題でない。今日の時代に於ては、斯の多數な人が怎うしたらもつと好い住宅に住んでもつと好い生活をすることが出來得るか、と云ふことを、建築家としても是非考へなければならぬと、私は、深く信ずるものである。

收入と住宅に要する經費の關係　其の大さや構造や種々の點から、希望としては、唯今まで述べたやうに種々なる希望はあるが、實際問題としては、我々が出來るだけの範圍、我々の收入の容す限りで、自分達の住宅を設定しなければならぬ。斯樣な實際問題に當つて、然らば自分の收入の何割を住宅の方へ振當てるのが最も適當であるか、と云ふことを考へてみるに、今日お互ひ日本人の生活に於ては、衣食住のバランスが取れて居らぬ。或人は案外安い月給を取つて居つて、非常に立派な着物を着て居り、或人は非常に安い月給を貰つて居て、毎日御馳走を食つてゐる、けれども、其の家は恐ろしくお粗末な、見窄らしいもので、家庭へ這入つて見ると、實に慘めな生活をしてゐると云ふ風に、衣と食と住が適當にバランスの取れて居らないのは、今日の日本人の生活に於ける著しい缺點ではないかと思はれる。尤も、斯

樣に物價が高くては、迚も總ての滿足を得られないから、どれか一つでも好くしたら、と云つたやうなことが云へるかも知れない。併し乍ら收入の容す範圍内で、衣食住の適當なバランスを取り、適當な家計の基礎を造る其のことが、私は婦人に最も必要なことでないかと思ふ。さう云ふやうな意味に於て、家賃は一體我々の收入の幾割を出すのが適當か、と云ふことが考ふべき問題である。學校の家事の教方などで、どんなことを教へてゐるか私は知らないが、其の一例として、米國邊りの住宅經營——殊に勞働者向の最も一般的な住宅經營の家賃なり、賣價なり、さう云ふものゝ計算の基礎とする考へ方は、勞働賃銀の一週間分を一箇月の家賃とする。——即ち、一日五弗の賃銀を得るとすれば、其の一週間分三十五弗を以て家賃とすると云ふ譯で、一箇月百五十弗の收入ある者にして三十五弗の家賃を拂ふと云ふ計算法である。約り、日本で云へば、百圓の收入なれば其の四分の一二十五圓を家賃に當てると云ふ割合である。何れの家でも、家賃と云ふものは、家計の最も主要な支出であるから、婦人としては、斯の問題を輕卒に考ふべきものではない。どんな家でも可いと云ふ譯にいかない。無論、贅澤の限りを盡すことは出來ない。まことに切り詰めた自分の經濟からそれだけの費用を家賃として支出するのが適當であるか、と云ふ一つの標準を考へるならば、私は、前述の事例が適當ではないかと思ふ。全體、日本人の收入は今日どれだけあるか、と云ふことに就いては、統計の確實なものがないから、之を速斷する譯には參らないが、少くとも、月百圓の收入がなければ食つて行けない。それでも、兩親があり、子供が澤山あつては難しいが、少くとも百圓を要する。さうすると、先づ二十圓から三十圓位の家賃の程度の家が、最も多數の人に必要なものである。斯の程度の家を、如何にして、今日より最も好い、もつと住宅らしいものに改良するか、是が今日の住宅に關する技術上の問題として一等大切なことであり、お互に研究して、是を少しでも住宅らしいものに改良することが出來たならば、どんなに幸福であらうか。是は、單に男子の問題でなく、婦人も亦斯の問題に就いて十分の考慮を願ひたい。

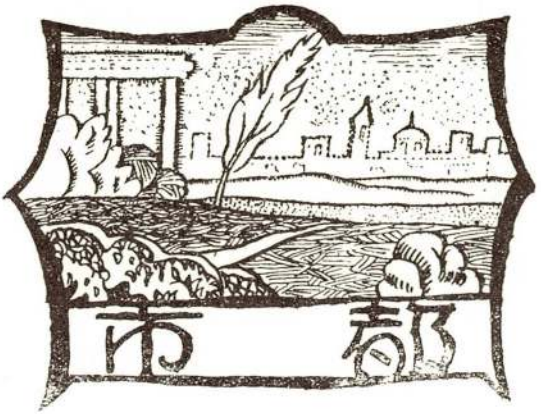
住宅の價値と婦人に依る取扱ひ　元來住宅は設計の如何に依つて其の價値が定まるのであるが、亦、其の居住者の取扱ひ、維持、管理の方法如何が、非常に住宅其のものゝ價値に影響する。婦人の心掛が少し親切であるならば、同じ家でももつと小ざつぱりとした、愉快な生活が出來る、さう云つた例は幾らもあると思ふ。第一に日本の家で私共が常に感じることは、亂雜な點である。即ち、整理が出來ない。唯今まで述べた程度の日本の住宅は、殆むど家の中の何處を覗いて見ても非常に亂雜である。日本の住宅の斯樣に亂雜である原因の一つは、たしかに『押入』にある、と私は考へてゐる。婦人が家を搜すのに方り、其の第一の標準とされるものは何であるかと云はゞ、それは『押入』の多いことである。是は大變便利で都合が好い。小さいものでも、大きなものでも、高いものでも、低いものでも、何でも手當り次第に押入へ押込んで置く、と云ふものが日本の習慣である。是は、一面から云へば、なにも取り片附いて大層可いやうであるが、實は、是あるが爲に我々の家をして、非常に不整頓ならしめ、無駄なものまで仕舞ひ込んで、竟には、何時までも取出すこともしないと云ふやうな不始末を來すのではないか、と思はれる。無論、夜具などを納めて置く一部の『押入』は必要であるが、私は、寧ろ、『押入』の如きものはもつと少くして、無駄なものは人家へ置かない、と云ふ樣にするため、婦人達のそれに就いての研究が必要ではないかと思ふ。住宅の內部が亂雜であることは、約り、日本の婦人の頭が亂雜である、と云ふことを明に證明するのであつて、斯う云ふ點は些細なことのやうであるが、實は、非常に重要な、婦人としては是非考へなければならぬ事の一つである。又、壁、襖、障子、疊、さう云つたやうな直接我々が毎日見てゐる內部の設備、構造、材料と云ふやうなものに就いての知識も、非常に必要である。然るに、從來、日本の婦人は斯う云ふことに就いて一向に無頓着であつた。尤も、我々が住んでゐるやうな下等な家では、襖と云つても、殆むど紙一枚張つたやうなものであり、壁と云つても、袖が一寸觸るとばら〳〵壞れる、と云ふやうに、至極お粗末なもので

それが普通のものであるが、斯う云ふことにも、婦人方で注意になれば、斯う云ふものの改良を如何するか、我々の家を、もつと壊れない、もつと永久性を有つたものに是非改良したい、と云ふやうな希望が、婦人の切實に出て來なければならぬと考へる。私共が斯うしやう、あゝしやうと考へるよりも、直接家庭に在る婦人が是等のことに注意して、襖は斯う云ふやうにした方が可からう、今の疊は不潔であるから、斯う云ふやうに改良すれば可い、押入の構造は斯う云ふ風にするのが、一番便利だ、壁も斯う云ふ破損し易いものよりはもつと他の方法で、適當な塗料でも施した方が可からう、斯う云ふ風な注文を婦人の方から我々が受けるやうに、實際的方面の建築知識に就いて是非御婦人の研究を願ひたい。

快適生活と室内の裝飾　家の中を愉快にするには、趣味を以て適當な選擇をなし、家の中を裝飾することが必要である。それは、何も高島屋や、三越、大丸と云ふやうな所に行つて、高價なものを買つて來いと云ふのではない。最も手慣れた有り合せのものでも、亂雜にして置かずに、總てのものを調和的に片付けると云ふ所に裝飾の藝術はあると思ふ。決して、其のものが高價であり立派であると云ふことではない。其處に二つの『テーブル』があり、五つの椅子があり、又一つの額があり、一つの花瓶がある——假令それが如何に貧弱なものであつても、それ等のものが適當に按排配置され、全體として一つの調和を保つてゐると云ふ所に、非常な趣味があり、興味があるので必ずしもお金を掛けて、贅澤なものを集めると云ふことではない。斯う云ふ點に就いて、婦人の趣味の働きが、ぐんなに私共の家をば愉快な住み心地の好いものにするであらうか、**私**はさう云ふ方面のことに就いて一般の御婦人に今一段のお考を願ひたいと思ふ。

日本の婦人と能率ある家事　更に、住宅に就いて特に考へなければならぬのは、家内の仕事を成べく手數の要からないやうに、もつと能率の擧るやうにすることである。日本の家庭婦人は、頭をバラ〳〵の蓬頭亂髪で、帶をひつからげて、

お尻端折りと云云ふ姿で、朝から晩まで子供の世話と、炊事と洗濯とに驅けづり廻り、日が暮れたり、坐睡りをしてしまふ、と云つた程、家事に取紛れて、何の餘裕も無いと云ふのが、普通子供さんの少しあるやうな家の狀態である。斯んなことでは、到底、生活らしい生活の出來る筈は無い。婦人の修養などゝは以ての外のことである。之に就いて、今もつと家事其のものを組織的に、もつと便宜にするやうに考へて行つたならば、もう少し婦人の家庭に於ける時間に餘裕が出來るのではないか。斯のことに就いて、亞米利加に於ける臺所の最も新しい研究などの一例を見ても、非常に其の考へ方が組織的系統的で、全く一つの大きな工場で何か製造をやるのと、同じやうな心持に、家庭の總てのことを最も組織的にやつて行く樣に考へてゐる。臺所の設備にしても、流し場の位置から、調理臺の位置、割烹戸棚、冷藏庫、七厘と云ふやうな凡らゆる臺所に必要なもの配置に就いても、周到な注意を拂ひ、魚の『フライ』なら『フライ』を拵えるにしても、冷藏庫の中から魚を出して料理を爲し、味を附けて、メリケン粉なり、饅飩粉なり、衣を掛けて、『フライ』鍋に入れ『フライ』にして、皿に載せ、食卓に運ぶと云ふ——其の魚を冷藏庫から出して、食卓に運ぶまでの仕事を五つとか、六つのシステムに分けて、一々系統的に最も短い時間に、最も少い勞力で爲し得るやうな配置をば、圖面の上で一々物差を當て、呎で計算し研究をする。配置の仕方に依つては、二百呎かゝるものも、百五十呎に減ずることが出來る、と云ふやうな、極めて緻密な、系統的臺所の研究法が最近盛に行はれて、最も配置好く出來た臺所では、八歩あるくだけで、魚の『フライ』が一つ出來上ると云ふまでに進めることが出來る、と云ふやうなことを書いてゐるが、日本の私共の臺所では、唯空いた所へ流し場を置き、或は戸棚や七輪なお置くと云ふやうなことで、晉さへ小さな臺所が甚だ不經濟に使はされてゐる。殊に、小供の世話をしながら炊事をすると云ふには、もつと凡てを組織的に配置を宜くし、成るだけ手輕に、手間の要からないやうにして、もつと能率の擧る遣方にしなければならぬ。さう云ふことに就いても婦人に於て十分お考になることが必要であらうと思ふ。



『國際市の實現』（三）

太田寛吾

五

ポール、オトレー氏の所謂萬國博覽會開設即ち國際市建設の內容は、その『來るべき博覽會は、各國人の將來における新生涯に、缺ぐことの出來ない機關の一つ、國際市を建設するの絶好の機會である』によつて總括し、目的、位置、建設の財源等かなり具體的に示されてゐる。

先づ、國際市を設くることによつて、此處を國際の公的生活の中心たらしめ、その中心の活動は卽ち博覽會そのものとなし、また同時に此處を人類住居の中心たらしめ、一の『田園都市』(Garden City) となし、以て建築や住居等社會的生活の向上發達に資すべきものを蒐集するにありたい。

國際市は、世界の生活々動の大運動の集中又は連絡の場所とさせたい。智的又は科學的のことについては、合理的組織の重要視されるに從つて、益々一の中心地なるもの、必要が感せられて來るのである。また社會的事項においても然り同樣である。何んとなれば、すべての社會に起る諸多の問題は、本質的には何れも類似のもので、それは東洋、西洋、北國、南國だから、全然別異のものであるといふものではない。故に、地球上如何なる場所において實現されたる進步でも、それ等を比較研究するために、一の中心研究地を必要とするのである。

國際市の存立の必要なることは、現今世界の經濟的生活の諸要求によつても、極めて明白なこと

である。實に世界的經濟生活は、日を趁うて益々規模の大なる組織體を要求して止まぬものであつて、これによつて、秩序整然たる調和のとれたる經濟手段の完成を期し得べきである。この時に當つて、國家の政策的干渉が可なるか、又は個人的自由放任主義が可なるか、この問題が起つて來るのである。そして、世界の經濟組織の現狀は、未だに資本主義的の基礎に置かれたるものにして、最近に至るまでの諸多の經驗によつて、益々この種の基礎が鞏固になつた。かゝる現狀にあるかぎりは、經濟組織の改造、若しくは完成は、資本主義によることを要する次第である。そしてまた、この種の完成を期するためには、此處に一つの道具として、各國人民努力の集中點を必要とする。つまり、或る一定の土地を選定して、此處にすべて國家的、政治的の優越權とは全然關係、沒交涉たることを得て、世界擧國の商業的及工業的の大利益、原料、銀行、交通、財政等の大利益の永久に亘る代表者を倚らしめて、すべての國際的問題又は事件を處理すべき國際市なるものを設置することが必要である。

吾人は倫敦、紐育、巴里、漢堡等が實際における此の種の中心地として、絶好のものであることを否み得ない。しかしまた、一方吾人はこれ等の都市即ち天然的の世界中心地に對抗せしめて一つの『人工的世界中心地を建設することの理想的なることも確かによい』と信ぜられるのである。吾人の思ふところによれば、むしろ前者の如き數多の自然的中心地があるため、却つて、之等を結合統一せしむべき新中心地を必要とすると思ふ。かくして、それぞれの中心都市は、それぞれの國內的整理統一、その國と他國との關係を整理統一する役をなすべきである。

かく說き來つたオトレー氏は、更に經濟的に國際市の必要缺くべからざることを詳細に力說し、最後に『國際市なるものは、少くともその一部を國際聯盟の事務所に當てらるべきものである』として、國際聯盟の本部所在地は、その規約第七條に定められたる如く、何時でも他の地に移轉することを得ることになつてゐる。また、一九二一年九

月の國際聯盟總會においては、その所在地の決定問題を公然議事とし、新に不動産を取得することを拒否したのであつた。國際聯盟の本部は遂に滿足なる所在地を得られないで、ゼネヴアに置かれた。既に、海牙には國際裁判所が設置せられ、國際聯盟なるものを非集中的のものにしてしまつたのである。同じ思想から推論する時は、ゼネヴアは、總會のための外交官集合所となすべく、海牙は司法的集合所となすべく、更に社會的生活、經濟的生活、智的生活の中心地として、白耳義の國際市を選定したらどうであらうか。と勇敢に主張してゐるこれによつて見ても、實現しやうとする國際市の目的は大要窺はれるであらう。

六

實現すべき國際市の位置、財源は、この計畫の活殺的重大要件であつて、最も苦心を拂はれてゐるところである。

その位置は、第一條件として廣大なる土地を選定しなければならぬ。そこで白耳義の首府ブラッセルの東方、ソワニユ森の近傍に未だ自由に使用し得べき一大平原を認め、此處に建設するがよいといはれてゐる。若しこの土地を充當するならば幾分の餘裕地と共に尙ほ數百ヘクタールの土地でこの森を背景にしてテルヴユーラン街路に通ずる土地を必要とするとのことである。そして、これと同時にその土地及土地に建設さるべきもの、法律上の占有權を確得することが必要であり、そのためには一の法律干渉を必要とする。特色は集合的事業にあるため、法律で特殊の『市』を創造せしめる。すなはち、租稅の免除、土地建物の占有權享有、法規制定權、勞働の組織、事業の組織、租稅徵收權、地方的警察權等に關して、特別の地位を與へねばならぬ。

法律的組織をつくるに當つてはよろしく國際的性質を具備せねばならない。一九一九年十月の法律は、國際的協會の主要なることを充分認めて、これに法人格を認めたのであつた。この法律の原理原則は、この國際市において始めて、その適用を見ることが出來る譯である。

更にオトレー氏は『國際市の領地は、將來のため是非共治外法權地とせねばならぬ』とて、今日までの國際博覽會を例證して、その利益を說き『白耳義は、今回の博覽會に當つる用地に對して、法律上治外法權を許すやうにせねばならぬ』と冒頭して、次のやうな意味のことを述べてゐる。

博覽會の土地において、その治外法權を認めた爲め、白耳義の領土が削減されるくらゐのことは、大觀した場合は何程のことでもない。僅かに全領土の二萬九千分の一に當らないのみか、あらゆる經濟的社會的利益は自國に歸すべく、政治的には國際市のあるために、好箇の自國保護者を得る譯である。國際市は單なる傀儡ではない。若し白耳義を攻撃せんとならば、必ずこの障害物を念頭に置かねばならず、またこの領土を侵害せんとならば、國際聯盟を形成する六十箇國と戰ふことになるべく、これを避くることは戰略上至難　不可能なことであらう。白耳義にとつては、この國際市の存在によつて、一の外國地を自國領土中に存することにもなる。一方これがため如何なる害があるか。白耳義は既に和蘭、ベエルレ、ジユック等と境界を共にしてゐるではないか。そして、その共同境界制度は決してブラッセルの門戸を閉すことになりはしないのである。

次に財源の問題である。これは國際市が當然國際聯盟なるものゝ權威の下に置かれるものであつて、叙上の制度、叙上の實際狀態にある以上　最早や白耳義一ケ國のみで支出すべきものでなく、諸般の負擔は各國共同の義務となるといふのである。すなはち、博覽會を建設するためには、國際市が資金を他より借り入るべく、人もこれに貸金することは支拂をなし得るからである。博覽會はよろしくその負擔の抵當として、耐久力ある建物を所有し、これを賣るとか、長期限を以て貸與するとかの出來るやうにしなければならぬ。且つこの博覽會によつて受くるところの好景氣は、投機者流に利用せらるゝことのないやうに努め、よろしく博覽會それ自體が利益を占むることに昂めねばならない。全體の成功は東西洋の出品人も、觀覽人も、各々來會する事實にあるのだから、この協同作用が當該社會のため、または國際市を構成するところの諸國共同の財產のために、益する

やうに變遷して行くといふことは、正當のことでなければならぬといふのである。

七

國際市については、かつて夢想的大計畫として嘲笑されたアンデルゼン氏の計畫、更に一九三〇年ブラッセルにおいて開催される萬國博覽會によつて、愈よ實現せんとする國際市の計畫を、極めて概念的ではあるが既にこれを併せ述べた。

要するに、アンデルゼン氏のそれは内容、構想その他如何にも藝術家の計畫らしく、純理想的であつて、多少實現不可能と認めらるゝ點がないでもない。しかし、彼の當時、既にあれだけの大計畫を企圖し、またあれだけの設計を完成せしめた熱心と努力に至つては、殆んど驚嘆するの外なく殊にその思想には敬服せずにゐられない。氏は更に一九一三年以來『國際市建設期成同盟會』ともいふべき『世界良心協會』(World Conscience Society)を組織して、極力其實現に意を須ひると共に、世界大戰終了後、平和會議の開始に際しては ウヰルソン大統領に對して、國際市の建設を會議の問題とせられんことを提議した。この提案理由には、一に大戰の記念碑的意味において、二に將來に成らんとする國際聯盟の本部所在地として、その建設は最も適當のものと認めるといふのであつた。けれども、この提議は遂に平和會議の容るゝ所とならなかつたのである。

これに對して、萬國博覽會により、これを國際市に押進めんとする計畫は、その目的にも示されたやうに、博覽會といふ絶好の機會を得て、人工的の世界中心地を建設する、すなはち、博覽會都市即國際的記念にして、また模範的都市を實現せんとする、頗る現實的な計畫である。アンデルゼン氏の藝術的中心乃至學問的中心に重きを措いてゐるに比較して、これは經濟的方面に重きを措いてゐるのも、計畫の道程よりして當然のことゝ首肯される。唯こゝに特に注目すべきことは、オトレー氏の報告に ア氏の計畫を認め『國際協會同盟會ではその總會において、アンデルゼン氏の著述「世界交通中心の創設』(Creation of a World Centre of Communication)を一般に知らしめた』と記されてゐることである。この著述によつて、

この計畫の受けた影響は、かなり大なるものであらうことも想像されるところである。

いづれにしても、その計畫を一貫して流るゝところのものは、彼の世界一國を夢見る『世界主義』ではなく、諸國家の對立を前提として、世界的共同生活を要求する『國際主義』である。すなはち(Cos-mopolitanism)ではなくて(Internationalism)である。この基礎的思想こそは、計畫をして偉大ならしむるものであつて、最も尊重される所以でなければならない。

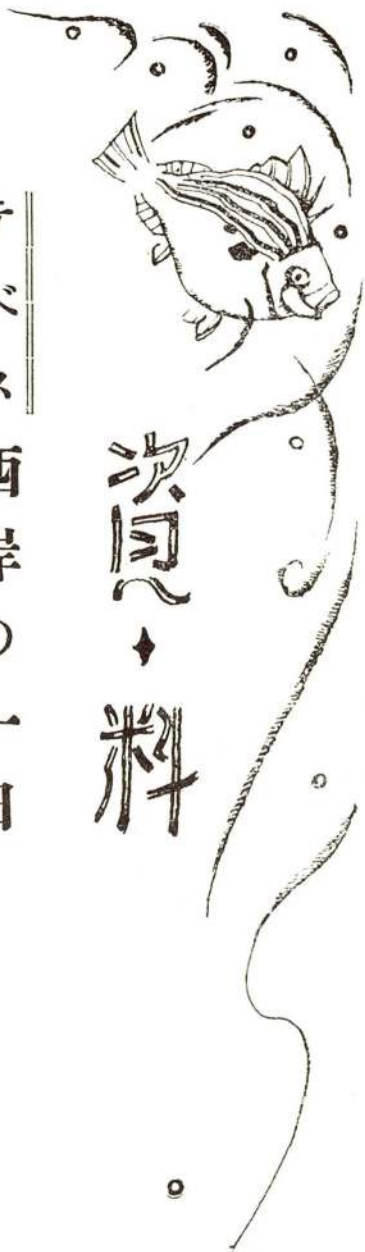
最後に、ポール、オトレー氏の『結論』を掲げてこの偉大なる計畫の前途を祝福しやう。

一九三〇年ブラッセルに催さるべき博覽會は、從來その變遷の跡著しかりし萬國博覽會の歷史において、新たに一大改新の跡を示さうといふのである。

大戰以後、世界改造を始め數年によつて、大いにその特色を發揮した世界的の進歩を完全なる、しかも生き寫しの狀態で以て、これを綜合せしむることを以て、今次の博覽會の目的としやうとの考へがあるのである。

若しかやうな一大綜合體を成さんとならば、一の都市を建設し、以て此處に組入れることを必要とするのである。所謂都市とは、すべての材料において模範的のものたると同時に、世界萬國の人類が加へたる努力に相應しい記念碑たり、またあらゆる國際活動のための永久的の議事所たり、または改新せられたる人道の象徵たるべき種類のものを造るにあるのである。(完)

後堂のヒソと油燈や日の盛り



資料

テベス西岸の一日

—續埃及遊記（七）—

工學博士　天沼俊一

十月二十九日　（日曜、好晴）

昨夜はつかれたせいか近頃になく熟睡して今朝は六時五十分に起きた、此位よくねると平素朦々朧々たる頭も割合に透明な様な氣がして、甚だ心地はいゝが困つた事には少し寢過したので、少々慌氣味になり、手早く食事を了り支度をして、對岸に渡るべく昨日と同じ様に河岸に出た。

今日はどうしてもテベス西岸の西半部を片付ねばならぬ、其爲めには見られるものから先きに見ておくのが一番いゝ、そこで先づ第一に所謂『メムノンの大像』へと志した、案内人は歸りにした方がよからうと言つたが、朝でないと正面に日が

あたつてゐぬから寫眞が撮りにくい、だから是非朝にするといつて頑張つた結果さう決つた。

二軀の大像は何れも座して東西し、砂原に立つてゐるが、昔しは大堂の大門の前に安置されたので、今堂も門もすつかり亡びたから自然砂原に立つ様になつて了つたのである。

其南方のものは　元總高約七十尺あつたが、今は六十四尺だそうな、だから今度は奈良の大佛かいくら威張つても及ばぬが　併し此れは腰を掛けてゐるのだし、大佛の方は結跏趺坐してゐるのだから、立上つたら兩方大概同じ位であらう。これはメムノンの大像として知られてゐるが、其の實



所謂メムノンの大像

はAmenophis III であるけれども、夫れでは通用せぬのださうな。で此の像をメムノンだと言ひ出したのはいつ頃からかといふに、羅馬帝政時代からださうである。

讀者諸君子はどうか知らぬが、私には此の名が大變に懐しく聞える、夫れはメムノンが希臘神話中の人物であるためではなくて、もつと遙に優美艶麗花の如く夢の如き Papilio memnon を聯想せしむるからである。而も其北方のものは拂曉一種の音を出すこと泣くが如く愬ふるが如くなので特に有名になつた、そこで早速これに就て神話が製造された。夫れを紹介しておかう、

トロイの戰爭で討死をしたメムノンは石像となつてテベスの平野に出現をした、そして毎朝早く其母神 Eos が附近を徘徊する時、石像は一種微妙な音を出して歡迎する、さうすると母神は其音を聞き、我が愛子の呼べるを知り悲みを新にして落涙をする、草の葉における朝露は此女神の涙である。石像が怒れる時は此の音は聞く事が出來ぬ。

と、所が不幸にして此神話は Septimius Severus 以

降不通になつた、なぜなら此王が像の修理を命ぜられたところ、從事した職人が叮嚀にやらなかつたせいか、反て餘計なことをした樣なもので、其時以來まるで石像は泣かなくなつて了つたからである。併し夫れなら夫れで、またうまく辻褄のあふ樣に、神話をもう少し作ればいゝのに、さうしないでやめちまつたらしい。

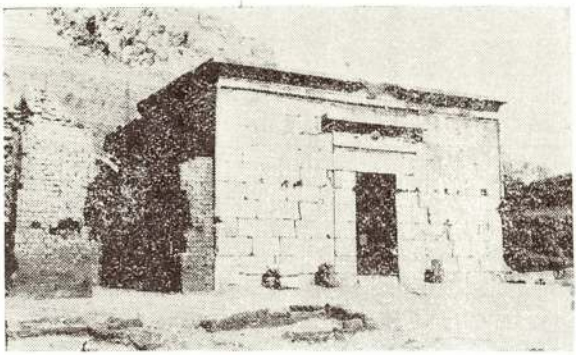
我國には佐夜の中山夜啼石といふのがあつて、實物はまだ見ぬが、繪でみると路傍に轉がつてゐるいゝ加減な石ころであつて、これが夜になると啼くさうである。奈良の元興寺には俗に『啼燈籠』と稱する大凡南北頃（延元元年の銘があると古書に出てゐるが今は磨滅して判らぬ樣式から觀ると延元元年のものとして差支ないのである）の立派な石燈がある、此れは今は奈良帝室博物館の構内にあるが、少しも啼かぬ樣である、其上、其昔し啼いたのは夜か晝か明瞭でない。夫れはどうでもよろしい、夜にしても晝にしても、啼いたものは何れも小規模のごろ石か又は工藝品だから知れたものだ、けれども高さ七十尺もある大石像がラベッの平野で腰掛けたまゝ朝泣きをやつたのは如何にも壯觀（？）であつたらうと思はれる。

神話は神話として、朝起る時機嫌が悪く、殆んど毎朝の樣に駄々を捏ね、じぶくりちらして母親を困らせるあまやかしの坊つちやんの樣に、石像がなぜ泣くかといふと、夜は温度下降して意外に寒く、石が冷へきつてゐたところに、急に暑い日光が直射するので、石の表面が從て急に熱せらるゝ結果、石の細片が表面からはね飛ばされる爲めだと說明されたのであつた。故にこの現象は敢てこの像のみではなく、まだ他にいくらもあるといふことである。

私は此大像に多大の期待をして歩を進めた、ところが行つてみたら像の邊は今迄汎濫してゐたナイルの水が漸くひいた許りで、まるで我國の水田と同じく、本道より分れて大像に向ふ一條の巾約一尺位の小徑を行ける丈け行つたが、靴のまゝではどうしても近づけぬ、そこで仕方なしに馬子に負はれて近くへ行き、少しく乾いた樣なところへ下りて寫眞を撮つたが、これ丈けでは滿足が出來ぬ、もつと敬意を表する爲めもう一度馬子におん

ぶして北像を一巡したが、隨分ひどく破損をしてゐるのに少なからず驚かされた。實は南像へも近づき度かつたが、思ひ切つて歸る事にした。

本道へ出るまでに馬子は心附の催促に及んだ、其理由とするところは、到底行けさうもないところへ奮勵努力して行つたのだから、定めて滿足したらう、どうか自分の功勞を認めてくれといふにあつた。其通り如何にも私は滿足したのであつたが、こんな事はしまひになつてから言へばいゝのに、くれるかくれぬか知れぬうちから催促ではいやになる。そこで私は幸にお前の骨折でみる事が出來て大滿足だつたから、ムスタフアにさう言つておく、會計はあの男に任せてあるから、あとであの男に貰つたらいゝだらう、といつた丈けで多少の持合せはあつたが私からはやらなかつた。



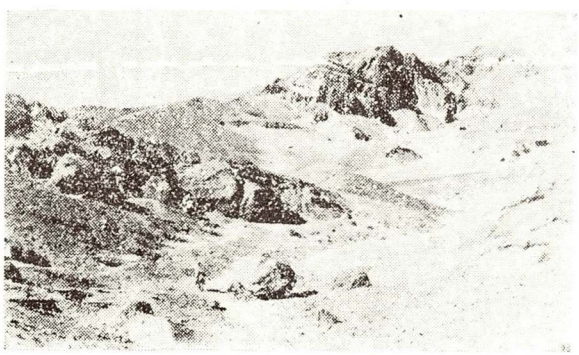
所謂「町僧庵堂」

本道へ出てから暫くの間は正直に歩いたが、案内人は途中から近みちをするつもりで水のひいた所をはすに突切らうとしたところ、泥土意外に深く泥田の中で進退谷まつたところへ、何處からともなく土人一人出現して驢馬を導き漸く逃れて本道へ出た、そこで案内人に命じ心附を與へさせたところが、難有うといふだらうと思ひのほか、暫く何か言ひ爭つた揚句、私に向ひたつたこれ丈けといふ素振をして今貰つた錢をみせた、みると十五ミリーム(約我十五錢)ある、成程これは少しく可愛想である。そこで私はもう十五ミリームやつたら直につけ上つてもつとくれといふ、怪しからんから直に驢馬へのつて出かけたら、後ろで何やら罵る樣な聲がした。私は案内人にあれでも未だ少ないのかときいたら、『あんな男にはいくらやつても切

りがありませぬ、私が最初やつた丈けで充分なのに、あなたがあとから倍にしてやつたので、直につけ上つたのです』といつた。夫れからまた少しの間炎天下にあつてから、Deir el-Medinch——にDêr al-Madînat＝Town Convent の堂の前で下馬した。

此のデイル・エル・メヂネの堂は『王陵』に通ずる路傍に在つて、泥土煉瓦を以て積める塀で圍まれてゐる小堂である。主として女神ハソール及びマート Maat とに捧げたもので、正面からみたところは挿圖の如く甚だ簡素で、ただ入口の上と軒とに埃及一流の繰形があるばかりである。堂は耶蘇敎時代には一時宣敎師の住居に用ひられたために、北僧庵堂と同樣壁面の裝飾も大分にひどい目に遭はされたのだ。かうかくとテベスの堂のみがこんな運命に出遇つてゐる樣であるが、さうばかりでもない、我國でも明治の初年に於いて、今日『特建』に指定されてゐる樣な立派な寺の客殿を小學校舍に使用したり、或は兵隊を收容し臨時の兵營にしたりした事もあるから、此れもまた人の事は言へぬのである、且名の『町の僧庵堂』は前記の『北僧庵堂』と同じく、據て來たるところはこゝにあるのである。

併しながら夫れでも內部には相當にみるべきものがあるが、今は略して記さぬ、堂は割合に新しく前三乃至二世紀のものである。曩にも記した通りこゝからの順路は『王陵』であるが、昨日みて了つたから今日はすぐに『女王陵』(Bibân el-Harim) へ向つた。

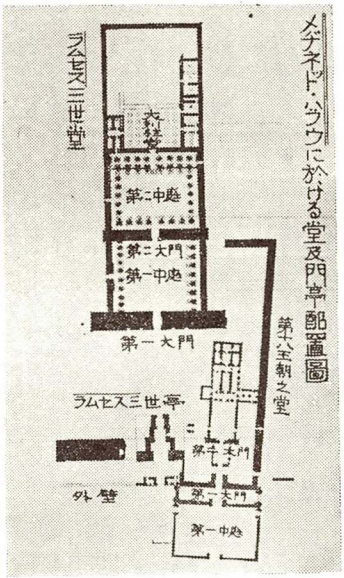


女王陵への道(午前十時半頃)

此道がまた昨日の樣に土石累々壘々として一本の草木なき丘陵起伏せる間を、頭上から照りつけ

られ驢馬に跨つて行くのだから可なり困難であるが、王陵街道の樣に道丈け殘して兩側に屏風を立てた樣に絶壁がない丈け幾分かいゝ。漸くにして達し次の三陵墓を見學した。

第五十二號の Queen Titi陵第五十五號の Amenher-Khopshef 皇子の墓——此の皇子の名は墓の入口に『Amonchopeshfuの墓』とかいた札を掲げてある。然るに案内人は『アーメンカベシュコの墓』と何度きゝ直してもいつた、どれがほんとか今以てよく判らない、どれでもいゝだらう——及第六十六號のラムセス二世の妃 Nefret-ere Mi-en-Mut ——前同樣入口には Nofertari Mine mut とあり、案内人はネフエルターリの墓といつた——の三つ丈けみておいたが、何れも代表的の陵墓である、併し王陵より其平面は大分簡單である。

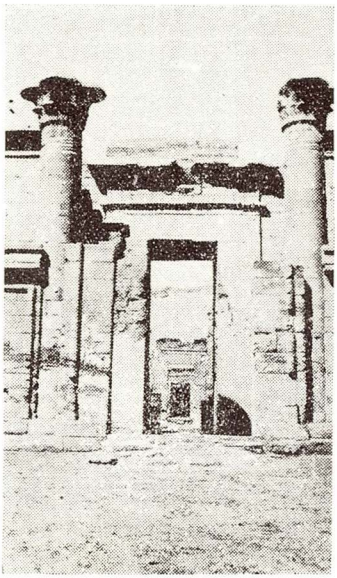


此所から東南に退却し、テベス平野の最南端なる Temple of Medinet Habu(一にMadinat Habū)へ向へた。今迄私はメヂネット・ハブーとは人の名であらう位に考へてゐたが、さうではなくて『ハブーの町』を意味してゐるのださうな、デイル・エル・メヂネが『町の僧庵』から、成程これは『ハブーの町』な等である、けれどもハブーとは何の事かつい聞き洩して了つた、だから今でも矢張判らない。

先づハブー堂から記してみると、此れは第十八王朝に起原する小規模の堂で、其第一中庭より内部への入口の兩端に、昔しから繪で極く親しくなつてゐた開花柱頭の柱が立つてゐたので、何だかおそろしく懷しい感じがして、實際、伊勢は津でもち尾張名古屋は城でもつ樣に、ハブー堂は此二本の柱でもつてゐるので、これがなければ夫れこそつまらぬものになつて了ふのである、私は此二

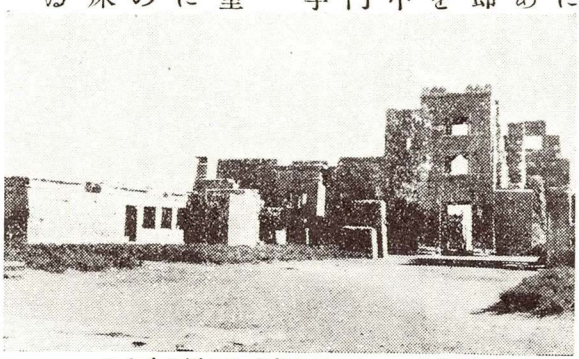
本の柱を斜にみたり正面からみたりして獨り微笑を禁じ得なかつた。實に心のうちでは嬉しくつてたまらなかつたのであつた。だから後日の樂しい思ひ出の材料に供するため撮つた寫眞をこゝに掲げるが、其中央に見ゆるのが此の小堂の第一大門で、其第一大門の內に小さく遠く見ゆるのが第二大門である。

此の小堂と竝びて所謂 Pavilion of Ramses III（ラムセス三世亭）があるが、これは丁度門の樣になつてゐて、上部は室になつてゐるけれども、下は通路である。案內記によると此れは昔し此所より若干の距離に建つてゐた宮殿に附屬してゐたので、種々の目的に使用されたのであつた。圖は西北即ち內部から外方をみたところで、中央のが通路即ち門であり、向て右手に見ゆる石階は、中央部の上の二室へ登るべく近時に新に設備したものであるが、今其床は落ちて了つてゐる。



ハプー堂の正面

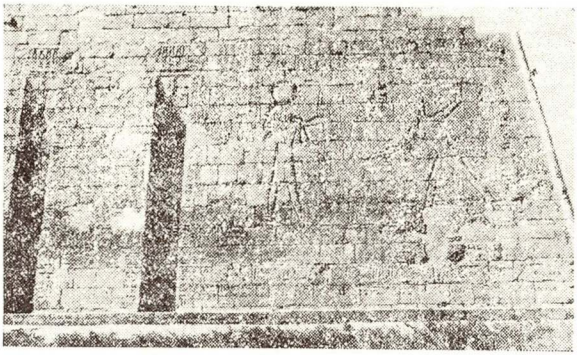
第三には此亭の突き當りの、最大にして最重要なる『ラムセス三世堂』を紹介しやう。長さ約五百尺、巾約百六十尺、正面には型の如く旗竿溝を作れる大門あり、これはいふ迄もなく第一中庭に入るの門で、其各面には種々の彫刻がある、こゝに示せる一つは大門左翼の正面下部で、向て右側の



所謂「ラムセス三世亭」を內側よりみる
左方の建物はハプー堂の後部である

大きな人物はラムセス三世で、棍棒を以て俘虜を毆打せる有樣で、左方のは鳥頭人身のトート神——Thoth——で、木葉の上に此王の名を書付けてゐるところであり、其左方二本の太き黑溝は即ち旗竿溝である。

例の木村氏によるとトートの神は我國の少名彦名神ださうである。私にはそんな勇氣はないが、

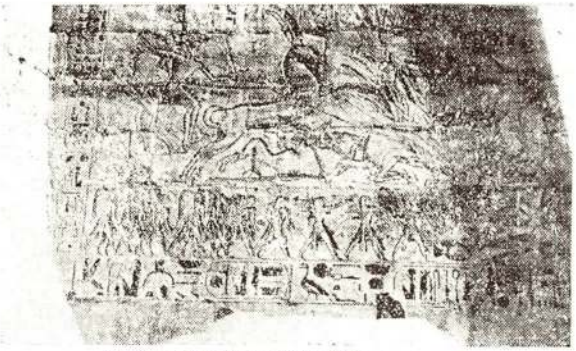


ラムセス三世堂大門左翼正面の彫刻

トートの頭は元來が Ibis だから、少し潤色すると鷄になる、ホーラスでも同樣である。ハソールが牛頭人身で出現したときは、少しも手を加ふる事なくして立派な牛である、古代亞述亞に於ける有翼鳥頭人身の神は、頭は鷲の如き猛禽で、此場合には頭上に裝飾的の羽毛——鳥冠——を生じてゐるこれが一轉化して肉質を帶びると正しく雞のとさかと同じものになる、だから前回のアヌビス同樣此等も亦、十二支神中の酉や丑の原だらう位の法螺は一寸吹いて見度い樣な氣もする。そして此の位なら、少名彦名神よりは大分に無邪氣だから、別段大した不都合もあるまい。

其二は右翼即ち向て左の裏側の袖壁の一部である、こゝはラムセス三世の狩獵の場で、下段には大勢の臣下が弓を引き絞り矛を持してゐるところで、右端には大きな魚がほりつけてあり、左と下の線は全部を象形文字で埋めてある。

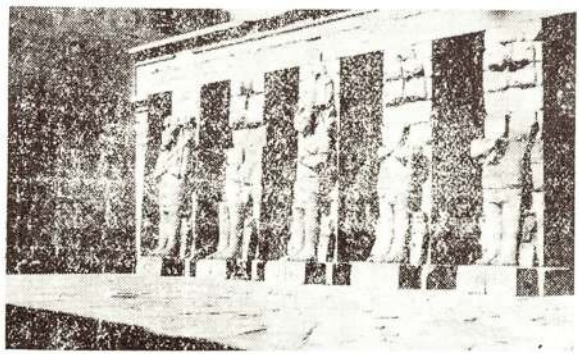
此等の彫刻は何れも埃及一流の Cavo-relievo でやつてある事勿論で、其上主要なる人物其他を特に大きくして一見明らかならしめ、其他は何れも數等小さくしてどこ迄も從たらしめてあるから、甚だ以て要領を得てゐる。同じ位の人間であるべきに帝王丈けを特に大きくしたりするなんて、昔しの人間は尺度の頭がない等といふものがあれば夫れこそ眞に野暮の骨張である。



ラムセス三世堂大門右翼裏面柚の彫刻

第一中庭に入ると右側には方柱が立ち並び其面にオサイリスの立像がついてゐるが、孰れも破損してゐて完全なのはないが其内最も良の者即ち寫眞の右端のが先づ一番完全で、顔面から兩手及び持物に到るまで揃つてゐる。極めて見聞は狹いが、私が當國の諸堂でみた大きな此神の立像では、此所のが最も完全であつた、但し殆んど常に木乃伊の形であるのに、此所のは膝から下に二本の脚を揃へて立つてゐて、而も其脚が少しく脚氣の意味だから、餘り形はよくない。

第二中庭から奥は澤山の柱があるけれども、孰れも基礎と柱身とが少し殘つてゐるだけである、併し下端に棕のあることもよく判るし、面に薄く漆喰を塗つてあるのも判る壞れた外壁の上にのつて中央に今より三代前にBagdadより移住し、現今は埃及國王ファッド一世陛下の忠良なる臣民たるルクソルの住人、當年とつて三十八歳、色黑く背高きMustapha Kharil を腰かけさせて撮つた寫眞を掲げておくから此男と比較して室及び柱の大さが略想像出來るであらう。



ラムセス三世堂第一中庭の Osiris 像

× × × ×

何分三日に渡り出來るだけ詰め込みたる結果、

少しくOverflowの形である上、上からは烈々たる天日に照りつけられ、下よりは強い反射を受けたゝめ、少なからず閉口したから、少憩の後歸宿に定め其通り實行した。

今日はナイル河上で囃子をきく事もなく、至極無事平凡に歸宿するや、部屋に寫眞機をおいて直に停車場へ寢臺車の談判に行つた、即ち十一月二日夜アスアンから開路迄の寢臺を保留せんが爲めであつた、然るところ係員の話しでは、未だ季節前なので一週二回ほか連結せぬ、二日は丁度寢臺車はつけぬといつた。連れてゐつた案内人に相談したら、未だ今はさう客はないから大丈夫一小間を占領出來るから樂にねて行ける、だから心配はないが是非いるなら一日の夜にアスアンがたてる樣に準備するといつた。考へる迄もなく私としては大金をつかつて斯樣な所迄來て、寢臺車の爲めに一日を繰り上げ、不完全の上塗迄するには當らぬのである、要は自分の健康を氣づかうのから出た心配であるが、大概先づ大丈夫らしいからこれはどうしても二日にした方がよささうである。だから思ひ切つてさう決めた。

昨日から西岸遺跡旅行に雇つたDonkey boyは其名をHassanといふさうだ、Gazaの住人で蘇西通ひのCamel driverと同名異人なる事申す迄もない、私がHassanと呼びかけるとAiwa＝Yesと返事をする、まるで『八さん』『アイ』といふ樣で面白い、此男英語の會話が頗る上手で、發音は案内人よりも被案内人よりも明瞭にして正確に近い中々うまいがどこで稽古したかと訊いてみたら、『アッシやあ家が貧乏でね、學校なんかいきませんでしたから字は讀めても書けもしません、だからほんの聽覺えで



ラムセス三世堂に於ける列柱

さあ』といふ如何に最負日にみても、自國語（即ち暴夜語）の讀み書きすら覺束ない、だから本人のいふ通り全くの聽覺えだらうが、夫れにしては實にうまいものだ、『ハッサンを忘れずにゐてください』といつた、覺えて居ねばならぬ事が一つ一つ增して困つて了ふ。

夕食をすませてから勘定を拂ひ、部屋へ歸つて荷物萬端すつかり片附け十時就床した、遂に樂しかつたルクソルの三日は過ぎて了つた、カーナックのアモン大堂も、王陵も、女王陵もメムノンの大像も、何も彼も皆なたゞ淡い記憶に殘つてゐるだけで、萬事夢の如くである、明朝は早い出發だから寢過ごしては大變なので、何となしに不安に感じてゐたが其中疲ていつか眠つて了つた。

（大正十三年五月五日稿了）

今も眞冬の樺太

色々變つたことや珍しいことがあります、何れ詳しく御通知することも出來ませう

暑い夏の七月中旬に、ストーブを焚いて冬支度ですから

鰯は群をなして川を上つてゐます、毎日瓦斯（霧のこと）で覆われゐて、晴れた日は少ないのです

七月十六日

在樺太　中村義雄

中央市場に就いて

工學士　X　Y　生

本篇は我六大都市に於ける中央市場の建設に方りその參考資として執筆されたるものに係り業者は一般に公表の豫定ならざりしも乞ふて此處に揭載することゝせり。（編輯者）

市場の大さとその建築敷地の撰定

大なる市場の建築は市内に於ける小賣市場とは異つた位置を必要とする。これは大市場では或期間全市の食糧品を貯藏して置く必要があるか、小市場では都市の特定部分に對する一日又は數日間の貯へをして置けばよい爲であつて、實際の模樣を見ても小市場は常に大部分の必要品を大市場から供給されて居る。

大市場は停車場に直接連絡して居るか又は道路に直接面して居る建物を必要とし、郊外又は非常に遠い所から輸送して來た貨物を直接建物内で荷役出來ることが必要であるが、小市場の方は都市の中央で交通の便利な所に設けたらよいのであつて出來ることならば以前から市の開かれて居つた場所か又はその近くに設くべきものである。

又大市場では大量に送つて來た食料品を輸入することゝ、其所から小市場へ送るべき物品の小量輸出とに便別であることが必要であるが、小市場では一般の便利ということを眼目として其位置を撰ぶべきである。

『リンデマン』氏は伯林で第二回目に建てた小市場から得た經驗より市場の位置としては二百個の販賣臺を設け得る丈の建物を建て得られる場所を撰ぶ必要があり又廣路とか或は廣場では高い建物の間にある後方地上に置く方がよく、又出來る丈廣大な前庭を取つて、車などを置き得る樣にすることが望ましいと謂つて居る。

（伯林では小市場を合理的な方法によつて設けて小市場を一定の距離内に交互に建設して居る）

市場から住宅迄の距離が十五分乃至二十分以上

即ち千米突又は千二百米突以上ある時は主婦が市場へ買出しに行くことが困難である。

建築配置

市場の建設に對する主要條件は次の様なものである。

一、建物には出來る丈多くの光線を必要とする。但し主として北方の光線を取入れること、

二、建物の下部には出來る丈通風を少くするも上部は出來る丈通風を良好ならしめること、

三、建物の周壁は頑丈なものとして、夏期は熱氣を冬期は寒氣を防ぎ得る様にすること、

四、必要を滿すに充分なる丈の大さを有すること、

五、充分なる丈の數あり、且又便利な通路を有すること、

六、建築費の低廉なること、

市場の建物は其内外に亘つて特別に建築上の美觀を保たしめることは經費を多からしめる許りであつて、無用のことである。

この建物は實用的の建物として、出來る丈收入を得る様なものとすべきである。それは露天市場などで天候の影響を受けて、腐敗する様な貨物を低廉な土地使用料で貯藏し得る様なものとせなければならぬ。

建物としては丈夫であつて、且簡單な構造を撰ぶべきである。

建物を鋸齒形の屋根で覆ふたり、中央部丈高い屋根で葺いたり、或は閉すことの出來る葺下し屋根や其他の形の屋根を用ふることは全てその必要に從つて取捨すべきである。なせならば屋根を支へて居る中央の柱は建物の任務を全く侵害しないが故である。

『ヘンニッケ』氏の説に依ると硝子や又は鐵で造つた高い建物を建てゝ内外を建築的によく見せることは不適當であるといふことである。

巴里の市場では過度の光線と日光を和げる必要が起つて來て天光を亞麻の覆を以つて蔽ふことにして居る。

市場内部の室は適度に照明して、少く共中丈は全く蔭になる様にせねばならぬ。それには片側に硝子の日覆窓を持つて居る鋸齒形の屋根か、兩側

に硝子窓を有つて居る『マンサード』型の屋根かを用ふるとよい。そうすると採光、通風の要求が最もよく解決される。

廣い梁間の普通屋構は不必要である。それは鐵の柱が内部の分劃に役立つが故であり、室内の高さも大きくする必要がない。最もよい高さは七米突乃至十米突である。

一般的の構造

市場の建築構造で第一に注意すべきことは太陽の光線をして無害ならしめることである。若し左様でない時は食料品が害せられることが多い。

古い市場の建築、就中巴里の大中央市場とかその他の佛蘭西の多くの市場は、何れも全部鐵と硝子とで作られて居る。

これは建物内に出來る丈多くの光線を取入れ様とした結果であるが、この爲に夏期室内が非常に暑くなつて、閉ぢた室内で同時に換氣をせねばならぬ様な煩しい不都合をして居る。

獨逸でも『アシャフェンブルグ』『スツットガルト』、『フランクフルト、アム、マイン』などの古い市場はこの方法で建てられて居つて、上部丈を硝子屋根として居る。

この種類の硝子屋根では夏期高き位置の太陽から來る光線が室内に多く差し込むから、假令唯一つの採光窓即ち天窓すらも取ることを避くべきである。

時日が經過し、硝子面上に埃が溜ると、日光の影響が多少弱められるが、その代りにこれにより室内の照明が害せられるし、硝子面上が不潔、不愉快に見へて面白くなくなる。又この外にこの硝子屋根の建物は冬期降雪の爲に時々暗くなることがある。

これらの見地から後世建てられた硝子張の市場では常に廻廊を設けて、單に廻廊の壁からのみ光線を取入れることにしてある。

然し出來得れば窓は唯北側にのみ設くべきである。そうすると日光の光線は少しも直接差し込まなくてよい。

この結果窓を北に向けた鋸齒形の屋根がよいことになつて來て、『ドレスデン』の中央市場や、伯

林にある二三の市場はこの式で建てられてある。

但し建物の通風といふことから見ると、この種の屋根を設くることは、後に示す様に利益のあるものでなく、又建築上の見地から見ても内外共に不都合なことがあるので近頃ではこの式を用ふることは甚だ稀である。

鋸齒形の屋根を用ひて、北に面した窓を備へることが出來ぬとすると、自然他の周壁に窓を設けて、夏の光線や熱度の侵入を防がねばならぬが、丁度夏になると太陽の光線が殆むど垂直に落ちるので、垂直の窓面には僅かしか感せなくて、暑さも餘り恐ろしいとはない。又中間の時期では太陽の光線の爲に困ることは少いし、冬は全く直角に取入れることも出來る。

市場の建物は日光の溫度を防ぐ爲に出來る丈頑丈に建てる必要がある。實際新しい建物の殆ど全部は頑丈な周壁を持つて居る。

一八四二年に建てられた『ハノーバー』の市場は鐵骨の構造であつて、一寸逆戻りした譯であつたが、その經驗から謂ふと矢張都合のよいものではなかつた。

最近では市場の建物として鐵筋『コンクリート』が非常に重要視されて居る。これは鐵のものよりも多くの利益があつて、其主なるものは次の様なものである。

即ち鐵は熱の良導體であつて、屋根に受けた大陽の溫度を全部室内に傳へるのに反し、鐵筋『コンクリート』の構造では鐵に被覆材がある爲にこれを避くることが出來るといふことである。

『キユスター』氏はこの構造を『プレスラウ』の新市場に用ひたし、『カスター』氏の建てた『ミユールハウゼン』の市場もこの構造である。

鐵筋『コンクリート』は高き溫度を徐々に取入れるが故に強き暑氣にも比較的長く冷却狀態を保ち得る利益がある

廻廊のある建物又は數階建の建物

經驗に徵すると、全市場に於る交通を特定の階、例へば一階にのみ限ることは最も實用的である。地積を節約する爲に建物の周り或は長手の二方に廻廊を備へこれにも販賣臺を設ける

とがあり、特種の場合には他下室すら販賣に利用することがある。然し何れも有利な方法と謂ひ難いことが證明された。

それは一階以外の販賣臺は常に顧みられぬし、又廻廊上を通行することにより埃が立ち、その埃が下にある貨物の上に溜つて保健上面白からずといふ議論がある爲である。

埃の發生は最も清潔にしても尙よく全く避け得られない。然しこの埃は其量甚だ僅かであつて、不潔なる街路の埃とは比較すぐき程度のものでもないので、多くの市場の中には廻廊を設けて大いなる面積を得て居るものもある。

伯林の大市場や『ドレスデン』にある二箇所の小市場や、『キヨルン』の中央市場や『クレフェルド』、『フランクフルト、アム、マイン』、『ハノーバー』、『ライプチツヒ』、『ニユルンベルヒ』の市場や『ストラスブルグ』の東市場や、『ブレスラウ』に在る二つの市場の如きはその例である。

廻廊には便利であつて、且容易に登ることの出來る階段を設けねばならぬ、又可成昇降機を設備すべきである。

廻廊の設置についてはこれ以上述べる必要がないので、次は數階建の市場建築のことについて述べることにする。

前にも述べた通り、市場の建物は市内の最も便利な所に建てなければならぬが、斯樣な所は地價が一般に高いのが普通である。それで建物に要する地積の制限されることが實際上望ましい。

これには販賣室を各種の高さに交互に配置するとよいのであつて、この爲には建物内に多くの廻廊を置く許りでなく、近頃の百貨店の樣な數階建の建物が考へ出されてゐる。

數階建の建物でも販賣室の配置が上手く行つたならば、これを市場の建築に應用して差支ないのであつて、一般の人が既に買物の爲に三階又は四階に登ることに慣されてゐるから、この土地が『食料品用の都市百貨店』として充分利用される譯である。

實際完全な二階建のもので既に建てられたものがある。それは『ブラッセル』の『マーシェ、ヅ、ラ、

マデレーン』であつて、こゝでは階下の床が上階の床と同じく、交通盛なる街路より近き所に設けてあつて、相互をば建物内の通路で最も便利に連絡さしてある。

一九〇四年に『エルベフエルド』市の市場として『シエンフエルデル』氏が一つの計畫を樹てた。それは地下室と一階の外に尚四階あるものであつて一階建として必要な敷地を調べることが出來なかつた結果近頃の百貨店を手本としたものである。

數階の建物では勢ひその上階を販賣臺を持つて居る市場の從業者か又はその使用人の小住宅に使つて居るが、それに就いてはその住宅に傳染病の起つた場合をよく考へて置かねばならぬ。

地下室

地下室に販賣臺を設けない場合でもこゝを貨物の置場にしたり、又は貯藏所に用ひたりすることがあり、又こゝを冷藏室にすると非常によいから、如何なる場合でも地下室丈は造つて置かねばならぬ。

入口と戸

市場の建物をして眞に意義あらしむるものは入口であつて、建物が周圍の道と最も便宜に連絡して居ることが甚だ必要なことである。又これらの通路が充分な幅があり、且出來る丈多數あつて、交通を最もよく區分し得る樣にすることも必要である。

大抵の市場には少く共四つ以上の入口がある、其幅は市場の性質と通路の數とに關係があるが、最小限の幅として一般に用ひられて居るものは三、五米突である。

『リンデマン』氏は入口戸の幅は三米突、高さは三、四米突にするとよいと唱へて居る。

尚又小市場では貨物を運ぶ車や小車が建物の入口前に自由に引込み得ることが絶對に必要であるが、大市場では貨物を車に積たり、卸したりするのに便利であることの外に、一般人の出入することが少いのであるから、車や小車を建物内に引込み得る樣にもして置く必要がある。

それには鐵道の貨物上屋の樣に市場の床を高めて建物の長手に沿つて屋内に引入れた車輛の積卸しが出來る樣にして、中央部の空所を一部は貨物の置場に一部は一般人の通路とすることが有利である。

入口の兩側には市場買出人用として入口と出口とを分けた幅が少く共〇、九米突ある通路を設けねばならぬ。

又戸に車輪留が必要であるが、同時に歩行者が躓かない様にもせねばならぬ。それに一番よい方法は歩行者や駄者の眼につく様に花崗石やその他の硬石か又は鑄鐵製の高い緣石を設けることである。

建物の上部には多くの換氣裝置を設けねばならないから、全體の入口には通風を避ける様な特別の裝置をせねばならぬ。

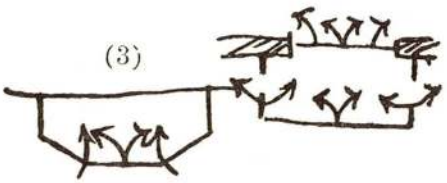
(一)圖の様な傾斜角を有つた風除裝置は横の通風が起るので用ひられぬ

(1)



(2)

(3)



(4)



(二)圖の様なものか(三)圖のものか、又は(四)圖の様な特別に戸のないものがよい。

戸や風除けの裝置に硝子を入れる時は人の背高よりも高くして硝子面が壞れることのない様にする必要があるし　又もし扉の上部全體に硝子を入れる時は防護用として格子を取付けておかねばならぬし、尙又閉つた扉から通風せんとする場合には開閉容易な翼を設備しておかねばならぬ。

建物の床は屢々洗ふ必要があるから、風除け裝置の木柱が腐らない様に鍛鐵製の沓を嵌めることもある。

風除け裝置の戸は鐵では造らないものである。それは戸が自働的に開らねばならぬのに閉りにくゝて、市場へ入る人が絶へず手を用ひねばならぬからである。

内部設備

建物の内部は各種の商品やそれらの販賣臺が都合よく置かれる様にすべきである。そしてそれは市場の平

面が何んな形であつても同じ事である。

大きな市場の内部は大抵机や椅子などのない大室であつて、商品を陳列する爲の用意が一つもして居ないが、市場では中央部に大きな空室があつて、こゝで野菜、青物及び果實を商ふことにし、肉や魚の販賣には壁に沿つて造つた机などのある場所を用ひて居る。

野菜を販賣する室は小市場に設けらるゝものであつて、その最もよい方法は、これを平面に作つて各種色合の舖床材で賣場と通路とを分つことである。

賣場には販賣人が居り、通路には一般の人か立つのであつて通路に沿つた賣場には机や長椅子を置てそれに貨物を列べるのである。

但し固定式の机とか長机は近頃では實用的ならざるものと見做されて居る。

室を柱で分劃することは屋根の構造を廉價ならしめるし、又これが爲に少しも妨害とはならず且又販賣場を區劃する上から言つても非常に都合がよい。

いくら簡單なものでも肉を陳列するものには帳場臺と釣枠と刻肉器などを取付けた特種の販賣臺が必要であるし、魚類を販賣する臺には水盥と机とが必要である。

巴里の中央市場では肉の販賣者に對しては五乃至九平方米突、果實と草花の販賣者には四平方米突、野菜の販賣者とは二平方米突の地積を與へて居る。

『リオン』では中央部の販賣臺が孰れも三、五平方米突、側面のものは九、五平方米突であり、『ブラツセル』では側面のものか約七平方米突、正面のものは一五平方米突である。

『アベルデキーン』では側面のものが一二平方米突あり、『ニユーカツスル』では側面と中央の販賣臺が一〇乃至一二平方米突あり、『リバプール』では側面のものゝ大さか一〇平方米突である。

『ヘンニッケ』氏の説によると建物内の主要通路に沿ふた部分の區劃の幅は三乃至五米突あればよく、中間の通路に面して居るものゝ幅は一、五乃至二米突あればよいとのことである。

佛蘭西では同人の說に從つて青物用の固定販賣臺を二平方米突に肉類用のものを七平方米突迄として居るし、英國では青物などの爲に單に六〇乃至七〇糎米突の幅ある固定机を設けてあり、これを各米突毎に分つて、其大さに從つて借して居り肉の販賣には少く共一〇乃至五〇平方米突の大さを與へて居る。又縁板と机との間には輕い鐵架を架してこれに鈎を附し貨物を陳列する樣にして居る。

「リンデマン」氏は販賣臺の面積を次の樣に分つことを奬めて居る、

魚の販賣には	百分の五
肉類同	同二十五
青物、果物、『バタ』等	同　七十

伯林でやつた經驗によると肉の販賣臺は唯周圍の壁の所にのみ設けて、その中央部には設けなくともよい。

床と廢物用溜

建物の床には『グース、アスファルト』通路には『スタンプ、アスファルト』が多く用ひられて居るが、斯る床は何れも接目のないものであつて、清潔であり、或程度の憚性を帶びさすべきである。

『キョルン』の新中央市場では車道と鐵道線の『プラットホーム』と建物に隣接した通路とを『アスファルト』板で造つて居る。

時には『コップスタインプラスター』を用ふることがあるが、これは材料がよく施工がよいと非常に抵抗のあるものであつて、車輪などで生ずる撞撃を非常に輕くすることが出來るが、その接目に『セメント』や『アスファルト』を注入すると清潔に保つのが困難である。

道路用としてはこの種の『プラスター』を用ふると馬蹄の爲に痛むことが少くてよく、厚さ八乃至十糎米突の『アイゼンクリンカー』も多く用ひられて居る。

單に清潔といふことから見ると格好がよくて色合のきつぱりした陶器製の敷瓦が一番よい。

敷瓦の厚さは歩行者丈しか入らない所では三糎米突以上とし、小車とか運搬車などを引入れる所では五糎米突以上のものとせねばならぬ。又平滑なる爲に起る危險を豫防する爲には固い溝をつけ

た敷瓦を用ふるとよい。

然しこの溝は床の排水を困難ならしめることがあるから溝の位置が少しも交錯せず、一定の方向に並列する様に敷瓦を並べねばならぬ。

『ハノーバー』の公設市場では『メトラッハ』の一等敷瓦を用ひて、入口と通路には厚さ五糎米突ある溝で十六に區劃した『プラスター』敷瓦を用ひて居る、又色合は一般が白であるが、販賣臺の部分は暗黒色のものを用ひて居る。

『キョルン』の新中央市場では中央に弧立した販賣臺があり、この中間にある歩道は厚さ三糎米突の硬質『メトラッハ』板で敷つめてあり、それに掃除並に排水用として魚骨形の溝を設けてある。

板の大さは六枚を正確に並べると一米突の長さとなる様に造つてあり、賣店の部分は明るい色と暗い色の板とて將碁盤の様に一平方米突宛に區劃して各商人に屬する面積を見分け易い様にしてある。

敷瓦と同じ様に厚さ約八糎米突ある『コンクリート』の層を用ひてもよく、場合によつては煉瓦を用ひてもよい、又極く稀ではあるが天然石の板を敷くこともある。然しこれは比較的廉價であるが又は或堅さを必要とするか、又は僅かな經費で床面を平滑ならしめ且床より起る流動物を呼收せしめない事を必要とする場合にのみ問題となるのである。

接目は水を透さない様に密ならしめて置くことが必要であるし、又床全體をして水の不浸透的ならしめることは何れの床敷材料を用ふる場合でも同じことである。

中央部にある弧立した販賣臺の床は中間の通路から五乃至十糎米突稀には十二糎米突——許り高くすべきであり、この部分を花崗石や玄武岩や溶岩などの様な緣石で劃して、排水用として約四十分の一の傾斜を附すべきである。又通路も横に向つて同様の傾斜をなさしめて、且全長に亘つて約二百分の一の傾斜を有せしむべきである。

廻廊でも販賣臺丈を他の床から高くすることがある。又販賣臺は堅い壁で互に區劃されて居ないから床の境界はよく示して置くことが必要であつて、以前は幅三乃至六糎の暗黒色をした敷瓦の紐を置いて區劃したものである。

『キヨルン』では前にも述べた様に床を將碁盤の様に區劃しる一平方米突丈を華かな色の敷瓦で敷いて、その接目を黒の敷瓦で敷いて居る又『ブレスラウ』でもこの表面の區劃をして居る。

販賣臺とか中間の通路とかより流れ出る水の排除用には『アスファルト』敷の内に同じ『アスファルト』の條を造つて溝を設くべきであり、もし敷瓦を用ひる時は同じ材料で造つた溝瓦を用ひて全體の面がこの溝に傾斜する様にすべきである。

排水用の目的などの様な小さな相違を度外視して一般的に見る時は建物全體の床を水平面にして然も周圍の道路と同高に置くとよいのである。然し土地の狀況では何うしても同高に出來ないことがあるから、その時は階段で連絡せないで必ず斜面か又は阪路にすべきである。

建物中の適當な場所には廢物を集める爲に溜を設けねばならぬ。これは取出しに便利であつて同時に内容物が速かに運搬車に荷積し得る様にせねばならぬ。

周圍の壁

前章でも述べり通りこの建物の周壁は天然石が人工的の石を以て頑丈に構築せねばならぬ。

鐵筋『コンクリート』の方法が實施されてからは可なり經費もかゝるし、その仕事も可なり面倒であるし、且五年毎に更新せねばならなかつた鐵の塗工事が節約されることになつたし、他の頑丈な建築に比べて實際安價に仕上げることが出來る様になつた。

壁は下部約二米突の高さ丈を洗滌式にする必要があつて、その爲には釉藥掛の陶器か又は硝子の瓦が多く用ひられて居るが、最もよいものは内壁の或高さ丈を硝子化した煉瓦で蔽ふことである。

屋根

特種の場合には鋸齒形の屋根を用ふることは以前にも述べたことであつたが、再びこの問題につき少しく述べるとゝする。

最も多く用ひられるのは張屋根のものであつてそれは市場の幅全體に架け渡すか或はその長軸を互に並行に置た數張間のものかである。その結果棟の線は或部分は同高に或部分は異つた高さになつて居る。

佛蘭西や英吉利の或市場ではこの張屋根の代りに『マンサード』屋根を用ひて居り、時には三連型

のものをも用ふることがある。それは中央の棟を張屋根とし、兩側のものを葺卸屋根にしたものか或は『パジリカ』式の建築としたものである。

穹窿式のものとか、或はその他の形の屋根は用ひらるゝ事が極めて稀である。

大陽の光線に最も多く曝されるところの屋根を容易に熱せられない樣にすることは極めて必要なことであつて、波形鐵板の樣なもので葺くとか又は『ダンチツヒ』の市場なぞで用ひた樣に硝子張にすることは最も宜敷くない。

板石や亞鉛板や鍋瓦を張つた木骨構造が可なりよいが、それとても充分な滿足は得られない。結局斯かるものは屋根面の下に一つの甲板を入れてその甲板と日光に曝される面との間に絕緣した空氣の層を造ると初めてよくなるのである。

『キヨルン』の市場では次の方法を用ひて居る。そこでは鐵構造の屋根の上に厚さ五糎米突ある鐵筋『コンクリート』の覆をして、その上に根太を置き、又その上に條板を架してこれに瓦を引掛けたのである。

『ブレスラウ』の市場でも同じ樣な方法を用ひて居る。こゝでは厚さ六糎米突ある鐵筋『コンクリート』の蔽をして、根太の間に厚三糎米突の『コルク』板を置てある。

照明
給水
排水

市場の建物を照すについて可成直接の日光線を避くべきであることは前にも度々述べた通りであつて、天窓より採光することは全く避けねばならず、光は高い側窓から採る方が別益である。

夏期になつて垂直な窓から強い光線か入り込み市場の內部が非常に熱せられることのない樣にする爲には、硝子面を着色したり又は『ライプチツヒ』の市場でやつた樣に窓掛を用ふることが時々ある。

『キヨルン』の中央市場ではこれらの代りに『カセトラル、グラス』を用ひて居るが、それには淡黃色の材料が目下一番よいものとされて居りそれを用ふると鬱陶しい天氣でも建物の內部に愉快な情調を與へることが出來るといふことで

ある。『プレスラウ』の市場でもこの方法を用ひて居る。

電氣や瓦斯を以つてする人工照明法も設けて置かねばならぬが、市場に來る客は日中のみであるので實際用ひられることは極めて稀である。

これに較べて水は掃除用とか、魚類販賣者の需用とか、野菜などに對する必要から豊富に供給する必要があるし、建物の排水に就いても特別に考へて置く必要がある。

建物内の給水は循環式にするとよい。而して制水弁を備へて置いて鐵管の破裂などによつ故障を小區域に局限し得る様にして置かぬばならぬ。

魚の販賣臺には特種の導管を備へて、これによつて出來る丈け故障のない様にし、防火用の『ハイドラント』も必ず設けて置かねばならぬ。

水の取出しは建物全體内の適當な場所に配置してある給水栓よりし、この下に溢水盆を備へ、且各建物の掃除用としての『ホース』を置く爲に聯機をも備へて置かねばならぬ。

脂肪のある魚類販賣臺を完全に掃除するには湯を用ひねば不可能であるし、又他の目的にも湯を用ひぬばならぬので、近頃の市場の建物には温水管の設備をして居る。又これは必ず設けねばならぬものである。取出口は一階と廻廊の各口に設くるとよろしい。

建物の排水も必要なことであつて、これには建物内部の排水と、屋根に落ちた雨水の排除とに區別することが必要である。

販賣臺や通路、入口などから流れる水は特別の溝に導くことは前にも述べたが、それには十二米突乃至十五米突の間隔に吸込孔を設けて置き、それに固き格子の蓋を嵌め込まねばならぬ。又この格子の目も最小の貨幣が落ち込まない様な幅にせねばならず、吸込孔には取出すことの出來る泥溜を附しておかねばならぬ。

雨水管の排水は市場に於ける他の排水と區分して、強雨の際に道路溝の逆流による氾濫を豫防して置かねばならぬ。又雨水導管の各主要管にはその始と終りとに内部の空氣が流失することの出來る様に屋根迄達して居る垂直の管を設備して置かねばならぬ。

尚此外主要排水管の各口には八米突乃至十二米突の間隔を置いて掃除用の管を造り、之により導管の檢査と掃除とを容易ならしめねばならぬ。

暖房　今迄建てられた多くの市場では暖房を用ひたものがなく、爲に冬期ではこゝで競賣に附せらる馬鈴薯などが氷結の爲痛むことが多かつ

た。

『リューベック』の市場では低壓の蒸氣暖房を用ひたが、これは建物を温めるのではなくて、寧ろ各特定の販賣臺に對して、床に設けた肋骨形の放熱を温めて、その上に磨いた鐵の覆板を備へたものである。又北側の流し式の便所にも暖房器を備へて水害を蒙らない様にしてある。

『ハノーバー』の市場では周壁が甚だ薄いので暖房の据付をねめたし、伯林の市場も最近になつてから暖爐を据付けることに決定したし『キョルン』の中央市場では最初から暖房裝置を施して居る。

伯林のものでも『ハノーバー』のものでも蒸氣暖房を用ひて居るか、それは蒸氣鑵が既に冷却裝置用として存在しておつたからである。

『ブレスラウ』の市場は最後に建てられたものであり、その外側の壁が頑丈である丈けに暖房の取付けをして居ないか、ざれ丈長く支へ得るやと一般から非常に注目されて居る。然し此所も暖爐を取付け得る丈の餘裕を殘してある。

暖房裝置のない市場で貨物の氷結を妨ぐには適當の期間丈地下室に持込めばよく、冬期特別に寒い日には地下室でも凍害を受けることがあるからこゝに照明用の瓦斯燈を點じて澤山の熱を持たすこともよいことである。

それで地下室の照明には暖房の出來る様に電燈を止めるとよいが、反對に瓦斯の焔により地下室の空氣が汚れて貨物に害を及ぼす様にもなるし、又爆發の危險といふ事もあるからあながちに、この動議がよいといふ譯にも行かぬ。又一面に暖房設備を必要とするものは顧客であつて、販賣人はこれに慣れて居ないから暖房を施さないのか正當であるといふ人もある。

然し最近の模様では矢張暖房を必要とする方の主張が勝を占めて居る。それは販賣人や使用人などは別として貨物が凍つて非常なる損害を蒙ることがあるからである。

それで完全な設備をした小市場では暖房裝置が缺くべからざるものとなつて居り、蒸氣暖房裝置を採用しても建設費が高くない時は尚更設くべきである。

『キョルン』の市場では土地の價格が六百萬馬克であり、暖房裝置は僅に三萬馬克であるから、千分の五以下にしか當らず、一般に暖房裝置の建設費は僅少である、それは他の機械の廢汽を用ふることが出來るからである。但しこの爲に多少蒸氣の消費量が大きくなるといふことは考へて置かねばならぬ。（つゞく）



チャールス、バリー卿

曼荼羅社同人　池田谷久吉

世界的建築界の傑物たるクリストファ、レン卿を産んだ英國は次の世に於てチャールス、バリー卿を生んだ、彼はレン卿の如く數多くの作品は作らなかつたにしても一時代を畫した點に於ては前者に劣るものではない。

バリー卿にしてもレン卿の如く自然がなさしめた好機會に遭遇したならば或はより以上の功績を擧げ得たに相違なかろうかと思はれる。

彼は一七九五年五月二十三日英京倫敦ウエストミンスターに於て呱々の聲を擧げ、六十五回の生誕を迎ふる十日前卽ち一八六〇年倫敦に於て死んだ。

彼は主として家庭教育を受け一八一七年迄、ミツドルトン及ベレェーに年季見習に時を過し正規の階梯教育は受けなかつた。其の後三ヶ年の豫定を以つて大陸旅行を思ひ立ち佛蘭西、伊太利、埃及、パレスチン等に赴き其の間建築研究に趣味を持ちこれに全生活を沒頭する樣になつた。

この間こそ彼をして非常に明快に伊太利建築學に對する愛着と精通とを發輝せしめたのである。

當時、假令一般の建築家が伊太利古典式を英國風に適應せしむるに努力し、又一面時代の要求に順應すべく努力の結果、かなりの効果を擧げ得たにしてもそれは極めて小數の限られた範圍の人達のみであつてバリーには遠く及ばぬところであつた。

彼は亦、希臘や土耳古、其他シリヤ邊の東歐の諸國を遍歷してゐる、繪心のある彼は此の時代に描いた水彩畫を伊太利に歸還の上個人的にローマに於て展覽會を開き好評を博してゐる。

埃及やシリヤで描いたところの寫生の原圖は彼の旅行の伴侶者たりしダビッド、バリーの爲めに畫いたものであつて、其原圖は彼の息子のゼームス、ウルフ、バリー卿が編纂した一部の中に輯錄されてゐる。

人として最初の成功

一八二〇年彼は旅行を終へて無事に倫敦に歸着した、そして一八二四年に彼の最初の作としても重要なものであり、代表的なマンチエスターに於ける帝室美術協會を完成した。

苟もこの事業に續いては最初の成功として非常なる人氣を博し人目を惹いたものは一八二六年に竣功したブライトンに於けるセント、ピーターのゴシック式の敎會堂である。

一八三一年彼はバルマルの旅行家倶樂部を竣功せしめた、純伊太利式でフローレンスのパンドルフィニ宮の影響が著しい、然し之は悲しい哉、余り大した定評もなく寧ろ駄作ではなかろうかと思はれる位のもので彼の爲めには殘念である。

一八三〇年から一八三六年迄の間、バーミンガムに於てエドワード王のグランマースクールをプーギンを助手として設計建築に從事した、このプランマー、スクールはその後各地に此の種の建築が一つの流行として擡頭し普偏され、從つて建築學の研究に一段の進歩光明を添へ終にウエストミンスター宮殿の設計の研究資料にさへ供された。

當時の彼は精力の續き得る範圍に於て勤勉、努

方、熱心に研究に沒頭した最も華々しい活動期といふべき時代だろう。

壯大なる私邸建築



彼は一八三三年リンンコルス、イン、フイルドの測量專間學校の在來の樣式建築物に大變更を計畫實行しその結果、崇高、威嚴の極美たらしめたは全く彼の卓越せる手腕により傑作の一つであつた。

平凡な建築物に變更を施し、立派な効果を擧げ得たところの隨分多數の堂々たる作品實例の中に於ても美的建築として最も優秀なものはウオルトン、ハウスである、テームス河岸にあつて一八三七年に貴族タンカーヴヰル氏のもので英國化されたところの伊太利式邸宅の唯一の標本ともいふべきものである。

此の外一八三七年カーナーヴォン伯のハイクリヤー城を初め翌年スザーランドの公爵トレンサムホールの工事を完成し一八四八年にはウヰリアムミツドルトン卿のためにスラブランド公園を設計したことなども有名なもの丶一つである。

ヨルスモア伯の邸宅ブリツヂウオーターハウスは最も壯大なものとして知られてゐる、一八四四年ホワイル宮殿内の寶物館を建設したがこれは數多き彼の作品中に於ける最も豪膽なものとして顯著である。

ウエストミンスター宮殿

一八四〇年の春から彼の歿する迄、彼の一世の傑作たる國會議事堂の建築に終始した、その作の巧拙の批評に就いては今は扨て置き確かに畢生の偉業であると共に他の建物の何れよりも凡ての方面に於て國會議事堂の名は世界に冠たるものであ

る。尤もこの國會議事堂に就いて注意すべき點はブランの主要部分がシンメトリーなると其意匠の簡素と性質の華美とであつて古典派とゴシック派との二つの流派を巧妙に折衷し所謂古典式の主想に垂直式の精神と細部とを案配表現したものである、テームス河畔に地をトして八エーカーの面積を擁し三百萬磅の巨額を投じてゐる、長さ九百四十呎の壯重なものに高さ三百十六呎の高塔を聳立せしめてゐる。

ブーギン氏は尤も彼と共に交際してゐたので彼の弟子の數人と共に此の事業に關係し建具の製作を重として擔任監督し以前の建築樣式に於て且て見ざりし所の効果を擧げてゐる。

然るに斯くの如き大建築の優秀なものゝ意匠の効果も當時の時代思想には誠に僅小なるものであつた、即ちチユードル式の複具運動のクライマックスに達した時の事として一八六〇年竣功後と雖も矢張り世人の注意は中世建築の樣式の再燃模倣にのみ熱中して他に顧慮しなかつた。

ハリフオクスの市廳舍も特筆せねばならぬものゝ一つである。これはバー卿の最後の作品であつて彼の生前に於ては未完成であつたが彼の子息イヱム、バリーによつて父の設計を承繼、竣功された、勿論途中各部の詳細に於ては輕妙に變更されてゐるが大體は原案に基いたものである。



これは在來のものに比較して却つて單純さや、威嚴の缺けてゐる輕いところが興味ある特徵として賞揚されてゐる、これは無論、既往に於ける彼の習慣を打破した所一層獨立した自由な境地を開拓したものといつてもよい。

この建物に於ては殆んど垂直の特徵を持つてゐる、不統一な水平線に

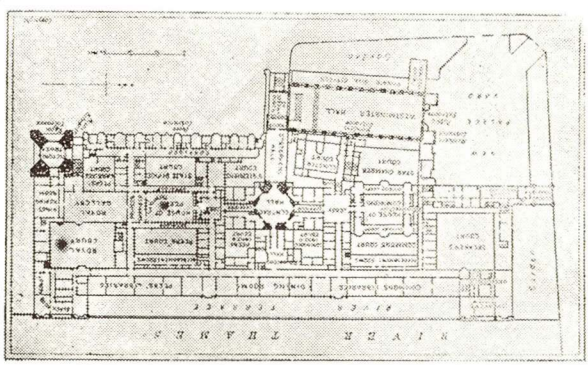
近き線や、外觀の取扱に於ける場合、表面の裝飾などがリフォームや旅行家倶樂部を設計したものとは全然その趣向に於てよほど異つた書趣深きものであつて複興式として一層華美な建築である。

だが多くの普通一般の人達は彼が一八三七年羅馬のファルネーゼ宮に倣つて設計されたパルマルのリフォーム倶樂部は實に完全無缺のものとして驚嘆したものであつた。

內部は色彩つた大理石に幾らか華美な固執的な裝飾を不調和に配列して當代の惡趣味の感を脫し得ないものであるが外部は完全なもので正しい比例のもとに場所と目的とに對して立派に釣合を保つてゐる。換言すれば古典的靈感に依て英國の沈默と感情との美を完全に征服したものであつた。

其の位置及規模共孰れも壯大なものにしてバリーにとつては唯一の好機會であつた。彼は此の機に乘じて最も完全を期するべく努力した。

彼は亦全く單純にして手法の大膽なるものとしてカールトン倶樂部を建築した、ヴェニスに於けるサンサヴヰオノ、リブレリヤ、ヴクヒヤから若きスマイルクを呼んでこの衝に當らしめた、外觀は艷麗にして些か野卑なる點を認め得るも內容に到つてはレヂナルド、ブロンフイルド卿によつて至極簡單にして英國風のものなる事を證據立てゐる。



英國に於ける建築界の彼の地位は一時代を畫してゐたとも云ふべきもので彼の歿後と共に古典式複興期の凋落となり、ゴシック式建築家の影響はいよ〳〵日々に著大となり一八五一年の博覽會迄繼續してゐた。

然してその博覽會を機會として凡ての美術工藝

は一層完全の境域に向つて突入進歩した。

大造庭師

彼は建築家として活動したのみならず、又一面造庭師としても有名であつた、彼は平素の主義として家と庭とは何れも同一人の手によつて設計さるべきものであり又斯くあらねばならぬ理想を持つてゐた事は丁度伊太利の建築家の各自の所懐と偶然合致してゐた、然して彼は着々として實現してゐる。

サツフォルクに於けるウ井リアム、ミツドルトン卿のシユラブランド公園は非常に優秀な位置にあつて且此の方面に於ける純巴里風の勝れたる標本とも云ふ事が出來る。

トレンサム、ホールも此の種に屬するもの丶一例である。こゝでは土地が平面な爲めに生ずる平凡、單調とかの支障や、缺點が除去されてゐる。

倫敦市民や又實際に皇帝もセント、ポール寺院の爲めに多大の貢献をバリーに感謝の念を捧げてゐる、彼はレン卿の傑作の爲めによりよく優秀なものたらしむるべく努力する事を喜び且つ誇りとして居た。彼は南の袖廊に置かれて居るオルガンに對して異議を唱へ、その本當の位置は西の門口の向側である事を力說した。

一般の人達は南側の廊にある場合は全建物の廣さと單調とを毀損するものなりといふ彼の意見に無條件で賛意を表した、彼のこの公の抗議書は彼の經歷を飾る唯一のものであつた。

彼は一八六〇年五月十二日ロンドンの近くのクニハムに於て歿した。そして彼の死體は本堂の奥深くロード、マカウーレー、やロバート、スチブンソン等の間近にギルバート、スコツト卿やジョーヂ、エドモンド、スツリート等の隣に安眠してゐる。

彼はローマ、ベルリン、セントペテルスブルグブラッセル、ストツクホルム等の各地美術協會の會員に推選され、一八四九年帝室技藝院の會員に補せられ、一八五二年女王の特選によつて貴族に列するの光榮を得た。

永遠の名譽

當時、彼の名聲を批難した者はあつとしても、それは極めて微弱なものであり彼の全生活に對しては何等影響しないものである。普通一般の人には其定評は相對的のものであるが彼の作品は寛大に云へば極めて早くよりその眞價を認められ稱讃されてゐた。殊に着實に、眞面目に穩堅な氣風は英國民の性質に非常に大なる影響を與へ投ずるところがあつた、仕事に於ても眞面目であり且人間としても立派な人格者であつた、勤勉にして內氣な深切な性質で賣名を排し自己の職業に幸福を求め家族的生活に於て滿足し、極めて單純なる仕事にも深き興味を持ち非常に重大なる事柄にも熱心に努力する等は彼の尊敬すべき特色中の一つであつた。即ち今日のあの壯大なる、且事實に於て完全なる大伽藍を建設した事も尊敬すべきである。

バリー卿は數へ上げる程多くの伽藍は建設しなかつたが、それ等の量を凌駕するに足る質に於ける建築學的の記念碑を今日に遺してゐる。（終）

通り雨葉かげにそそぎ
朝風のさやぎもつるる
窓邊より見ゆ

漫錄

根來の大塔

澁谷五郎



和歌山市から汽車で二十分、岩手の驛で下りて一里半、北のかた山手の方に野道を行けば、根來西阪本の僻村を通りぬけて、そこに滴らんばかりなる綠の梢をぬいて、『エメラルドグリーン』を流した樣な、そして松の翠とはまた一段と趣の變つた色で、何んとも言へぬおちつきを見せて、相輪が、ゆたかにすつくりと、擦によつて支へられながら、さびた彩を澄みきつた山の空氣に濕らしてうれしげに私の眼に投げ入れる。

これがはる〳〵戀慕ふて尋ね來た、大傳法院の多寶塔なのである。

もうたまらなくなつて一走りに走り付けやうと思つたが、樂しい逢ふ瀨をじつと靜かに、あせる心をおさへるのが尙更樂しい氣がして、わざとらしくゆる〳〵と山門をくぐつて、其昔、英傑秀吉をこまらせた根來の僧兵達の夢の跡を懷古しなが

ら若葉香ばしい緑り磴直をたどつた。

一體多寶塔なるものは、弘仁期以後のもので、それ以前には三重、五重、七重の塔婆はあつたが、高野山に弘法大師が、印度の寶塔を模して大塔を建立せらるゝ迄は、無かつたものである。唐を



通じて輸入せられた此の塔は、印度のそのおもかげをのこして、風鈴の様な格好のものに寶形屋根をかぶせて、裳階（モコシ）に四方の庇を付けたものだから、頂層圓形、下層方形、其の間に饅頭形の塗壁がのこされて居るのである。高野の大塔はたゞ名と其の跡敷のみをのこして燒け去つたが、幸にも今から四百餘年前に再興せられたる此の大傳法院の多寶塔こそは、我國唯一の大塔なのである。

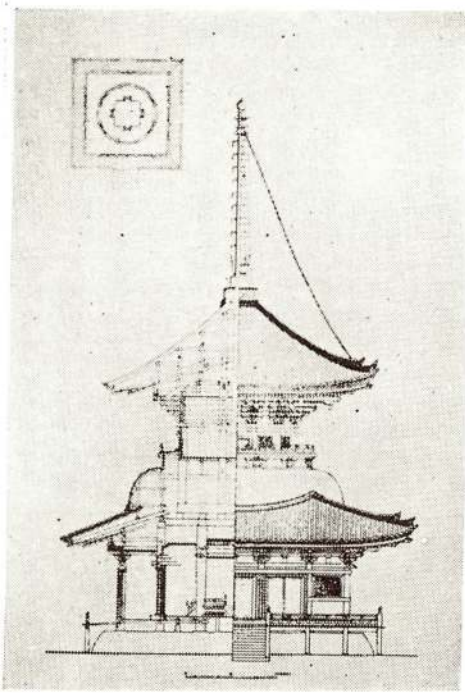
抑々根來大傳法院の由來を訪ねるに、初め寬治年中一修驗者があつて、一宇の堂を建立し興福寺と稱したのを、興敎大師覺鑁（カクバン）上人、鳥羽帝の勅命によつて、今から約八百年の昔大治四年（紀元千七百八十九年）此所に新義眞言宗を開き、大傳法院と號したのである。

名所圖會には『本尊は大日如來おんたけ一丈八尺、烏瑟に鳥羽上皇の御髮をおさめ、左金剛薩陲長さ一丈六尺、待賢門院の頭髮を座下に藏し、右尊勝佛長さ一丈六尺、花跌に美福門院の髮をこめたり』と言つて居る。

覺鑁上人については面白い傳說がある。それは西行の撰集抄に『近頃高野山に覺鑁上人とてやむことなきひじりおはしけり、眞言宗のさとりきはめて、一印頓成の春の花、にほひを寂莫の霞の衣に移し、禪心合掌の秋の月はひかりを無垢の

心のうちにてらして、弘法大師の昔の跡をおいて傳法院といふ所をたて、龍華三會（リウゲサンネ）のあかつきをまちて入定したまへりけるとかや（中畧）大衆きゝて我山にいかなる行德のあるものなりとも、いかで大師の御まねをして侍るべき、いざ彼の覺鑁の入定をさまさんと議して、俄かによせにけり覺鑁の門徒ふせぐべき力なくて、本寺の僧入定のところに亂入して見るに、不動尊二體おはしけり、一體覺鑁の日ごろのは本尊の不動にて、今一つは聖の化したると覺ゆ但しいづれとも見わきがたし、いかゞすべきとためらひけるに、ある僧の一體の不動をさぐり奉り侍れば、少しくあたゝかにおはしければ、これぞ覺鑁よとて太刀にてきりけれども露きれざりける』云々

覺鑁上人は弘法大師の流れを汲みながら次第にすさび行かんとする教義の頽勢を見て茲に新義眞言宗の旆を立てたのを見ても、きはめて行德すぐれたるひじりであつた事は明かであるが、斯くして開かれた大傳法院は、其かみ金剛峯を壓



するの概あつたものと見へ其の構へも相當の大規模であり寺領も極めて廣かつたらしいのである。時うつり星流れて世は天正の戰亂となり、政令行はれずして此所にも山僧の暴戻をもたらし、遂に秀吉をして一炬に此の大伽藍を燼さんとせしめたのであつた。

不思議にも堂宇はのこらず灰となつたにもかゝはらず、此の大塔のみは永正十年（四百十四年前）

の再興の姿を其まゝに、ゆたかな軒先の『カーブ』をうたせて、靜かな谷間に雄然とそゝり立つ、彼の高さは實に百十七尺、其の大きさ方四十九尺一寸五分である。

獨り塔下に立つて抑いで屋頂の九輪を見れば、西阪本から遙かに眺めた『エメラルドグリーン』は班らに流れて古を語るが如く、屋蓋の大きさと塔身のそれと共に、大膽なる『プロポーション』を示して、實に言ふ事の出來ぬ雄大な壯美を、不思議な音律で私の胸に刻々にせまつて來る。凝雲根嶺に集まつて、風吹けば、其の聳立てる九輪をかすめて、峰から峰に飛かとも見へ、蛟龍擦を攀じて飛雲に駕せんとするの概、靜寂なる靈氣と共に私を獨りながく止まるを得しめないほどの凄さである。

元來室町時代の建物は、あの金閣寺の樣に、きはめて『スレンダー』なものであるべきはづながら不思議にも此の大塔は創建當時の手法を遺して、きはめて勇健なものである。

初層中央部には十二圓柱が圓形に繞り、中央に壇あつて佛像を安んじ、十二圓柱の外側に方五間の裳層を出して、更に之れをめぐらすに方椽を以てして居る、柱の根は大きな龜腹の上に築いたる盛土の上の礎石に置かれて居て、柱には勿論『エンタシス』をのこさないけれども中々しつかりした木割である、初層の組物は簡單な二手先きであつて軒は二タ軒、其上に饅頭形の塗壁が殘されて屋根との取り合せに面白い曲線を畫いて居る。此塗壁の上に勾欄廻ぐりて圓孤を畫き、塔身に帶をしめ、其の勾欄の內方に僅かな幅の廻廊を設けて、其所に更に十二圓柱が建ち列び、圓孤を畫いて塔胸をなして居る、此の圓柱は、各々巧みに配列せられたる四手先の斗組で、きはめて大きな思い切つた深い軒を、さも安全に平氣で支へて居るのである。此の四手先の肘木組物を見たものは、實に其の規矩の非凡な手法に驚嘆の聲をもらさずには置けないのである。

頂屋は勿論寶形で棟集まる所冠するに露盤を以てし、上に覆鉢を戴せ、受革を以て相輪を受けて居る。天より甘露の妙雨を雨らせば受華に集めて露盤にや堪へん、げに其の受の華一瓣を取つて香

んばしき曲線を味へば地上の花とは覺へずまことに天の妙華が忉陀利華も偲ばれてゆかしき限である。相輪は擦によつて亭々として昇り、九輪盡くる所に四葉座あり、其の上に六葉座あり、更に其上に八葉座を置き、最頂には寶球を頂き四葉、六葉間に擦軸を寶珠形に飾づけ、其所から四方の降り棟の端なる面白い形の鬼に瓦鎭を引いて居る、

大和巡りに幾度か古き昔の匠の業を賞味し來れる『アート』の眼にも、此の大傳法院の寶塔こそ更に一段きは立ちて、秀拔雄偉の感を與へつゝ、室町の『アーキテクト』の腕前を靜かに誇りて、ひとりさびしく此のひなびたる山里に心ある人の訪れをわびしく待つらん此の巨塔。

巖が根につくばひ居りて

聽かまほしおのづからなる

その溪の音

建築覺書

沼島草房

藝術に於いてその形貌の大きさといふことが或場合重大な問題となり得るのは、多分建築に於いてのみであらう。もと〻量や嵩は藝術の深い本質では鋭く觸れ得ないものとされてゐるが、大きさと強さとの一定の正しい制限を越え出る時は、建築は必ずその美を失ひ去ることをジョフギルトも指示してゐる。過度の廣大はその建築の光榮ある特質である以前に、痛嘆すべき缺陷である場合が實際に於いて確に充分あり得てゐる。不快と嫌惡との感情は時として過大なる壓力あるものに就て廻る。エジプトのピラミットは世界に於いて殆んど最古の建築である矜持を有つてゐる以前に、その多分必要以上の形貌の巨大を誇らうとしてゐる點で、相當の興味をひく。事大的な刺戟と眩奇的な感興とは充分そこにある。廣漠なる土地と、巨構なる石と、過群なる多神教とがこの兒心的な塊石の堆積を生んだのであるが、こゝには完全なる有機的な美の統一が缺けてゐるらしく想はれる。美は何よりも先づ整備である。美は刺戟のための曲歪ではない。過度の誇奢は美の正しき表白ではない。並はづれた巨大は如何にも刺戟的ではあるが、この刺戟がすぐ藝術の正しい情操であるとは言へぬ。私の揣摩にして正しければ　エジプト人の藝術的信仰が美よりも巨大にあつたことは事實のやうである。從つて、ピラミッドをすぐ清高壯重な美であるとは斷定し去ることが能きないやうである。

かうした意味に於いては、その形貌の大きさといふことが、建築としての評價には幾分の本質的な交渉を有つてゐるやうである。如何に巨大な建築も本質的には藝術であることを妨げはしないのであるが、過大であることはすでに美の哀しき破

調でしかない。建築は倒れざる美の塔である。

不當に過小なる建築に於ける場合にも、殆んど同じ意味のことが言へるやうである。

建築が藝術としての眞の最初の生命を得たのはギリシャ時代であると言はれてゐるのは誤謬ではないやうであるが、ギリシャ人がその文化の黄金時代に、建築に於いてその技巧乃至技術を最も滿足さるべき完全の域にまで到達せしめ、建築を藝術としての生命の道に確立せしめたのは、實に、藝術性の豊富と簡單とを愼重に採用したためである。言ふまでもなく、豊富は藝術を壯大にし、簡單は藝術を明快なものとする。藝術は豊富であればある程優れて美しいのであるが、簡單であればある程その美の輝きは深められる。藝術に於いて最も要望さるべき純眞はこゝからのみ招來され得る。圓滿なる階調はこゝから生れる。破綻なき美はこゝに健やかに生長する。健全は全らゆる場合に於いて美であると斷言しても早計ではないやうである。ギリシャ人は古來最も健全なる歪みなき生命の文化を育てゝ來た國民である。彼等のオリンプスの神々も、最も人間らしき健全のうちに彼等と親しき友交した。美の神は同時に健全なる生命の神であり、ひいては均等整調の神であつた。

一切は彼等にあつては階調の問題だつたのである從つて、彼等の藝術の美は、必ず、均等整調の美である。古來、藝術の均等整調に就いては、ギリシャ人ほど生得的に敏感であつた國民は稀れであつたやうである。ギリシャの美は全て例外なしによく馴らされたる均等整調の美である。一言で言つて、端嚴偉麗はギリシャ藝術の奪ふべからざる特質である用ゐられた材料は唯だい石灰石。その形貌は太く短く一見壯重に見える柱。そして、柱頭の少々の簡潔な裝飾。唯これだけで彼のアクロポリス、パンテノン等を構成されてゐたのであるが、そこに表現されたる美は、すでに無條件的に素晴らしい均等整調の深い美であつたのである。その輝きはすぐそのまゝ永劫の輝きだつたのである。イクティノスは、多分、均等整調の美を建築上に創見した最初の光榮ある藝術家である。

藝術の生長は、約言すれば、その藝術家の自我の生長である。藝術はその藝術家の個性にのみ生き、藝術家はその自我にのみ自らの生命を、見す

る。藝術の價値は其藝術家の個性の價値である。藝術家の價値は自らの自我認識の深さ鋭さに依つてのみ初めて左右される。優れたる藝術に激しく脈うつ強越なる重力は、必ず、其藝術家の優れたる自我に充溢したる必至的な信仰の力強き響きである藝術の魅力はその信仰の魅力である。生命の高き輝きは茲にこそ得られむせかへる樣な自我の追心的な呼吸はこゝにこそ聞かるべき筈である。

從つて、藝術が他の藝術以外の何物にも斷じて阿附してはならないものであるやうに、この榮敗轉變極まりなき世界に、藝術家は他の如何なる勇者よりも勇敢で捨身で眞劍であることを要する。一意自らの絶體道を確歩し藝術への狂信的なる熱情を有ち、他の一切の世界には冷たき異邦人であり得ることを要する。追從阿附は一切の頽勢を示す。頽勢はすぐ死滅への道である。精進なき安易の世界は彼にはそのまゝ地獄である。榮譽と金權とは脚下に踏み、彼の藝術戰線には常に正々堂々たる美と眞實との陣がしかれなければならぬ。死に至るまで世に阿らず、自らの所信を曲げず、ゆくべきところまでは必ず行かうとする者は、彼であらねばならぬ。生れ乍らの藝術家ば生れ乍らの眞實の使徒美の殉教者であるべき筈である。その血は眞實のために、その汗は美のためにのみ流されなければならぬ。彼は彼の全生涯をあげて美を追つて止まない美の韋駄天である。

從つて、藝術家は自らの人間的相貌をその作品に直寫することに躊躇してはならぬ。藝術家の世界は眞實と美とへの直迫直即の世界である。概念化はすでに藝術から遠い。人生の深刻なる眞底に味到しないで、藝術の精緻なる本質を千古に確立し得る力はあらぬ。自我に感得される一切は其藝術家にとつては死と同じ價値を奪ふ藝術となる。そこに表現されたる情操慾情の多岐多角は反つてその表現を生命へ近づけるであらう。一切は自我から出發する。建築家はその建築に自ら虛名を印刻しやうと焦るまへに、金權の巨大を建築の本質と誤算して苛立つまへに、先づ、條件なくしてその自我に深く沈潛して生命を掘れよ。眞實への信仰は彼にとつては死にもの狂ひであることを要す

る。美への情熱は彼にとつては絶體絶命であることを要する。生長は常に生命と倶にのみある。

建築樣式は、その建築樣式の發達し開展して來た四周の複雜な事象の如何に依つて、幾多の混錯した變遷推移の果て、淺からぬ馴練を經て今日に至つたものである筈である。古來全らゆる。藝術はその藝術としての價値問題を、多くの場合、その表現樣式の價値問題として研討し、幾多の主張と立脚點とに出發して、相當の長い年月を論爭し合つて來た歷史を有つが、建築に於いては殊にその樣式形貌の如何がその問題の中心となつた場合が多かつたやうである、從つて、その根底は案外に根づよいのであるが、もとより建築がその樣姿風丰にのみ終始しやうとするのは、畢竟、僞喘と固陋との世界に安養な睡眠をむさぼらうとするもので、危い。その表現は時に眩奇激越であることも妨げないであらうが、一例すればその尖塔や空塔が全くのヒステリカルな考案でのみある場合はすでにそれは疑ふ迄もなき建築の邪道でしかあらぬ。樣式が樣式のための樣式であつては、すでにその表現は、藝術の內性からは遠い表現樣式の避け得ざる變調相違は、全てその藝術的內性の認識上の主張の如何に依るのである。安易に言つて認識の相違はそのまゝ藝術の力の鋭鈍はすぐ藝術の內性價値の輕重である。

もとより建築を單なるファンクショナリズムの立場から論議し研討しては、その主張は所謂合理的であるため、藝術としては幾分感興のないものが安易に是認賞揚されるおそれがあり、インプレッショニズムの立脚點に執即しては、その感興的表現にのみあせつて建築としては幾分偏狹なものが企圖されさうであるが、問題の結語は外にはなく內にある。全らゆる藝術に於いては其思想傾向の主張は決して、藝術の追ふべき最先的な問題ではなく、その藝術內性の認識上の主張がこそ、先づ主張さるべきであらう。言はゞ、建築に於けるその形貌樣姿は、畢竟、他の全らゆる藝術と同じく第二義以下の問題にしかすぎないものなのである。

建築の有つ社會的價値は、決して、それが何等

かの社會的活動の手段乃至目的として重用され得るところにはない。建築は藝術と名付けられたる他の全らゆるものゝ活動が、一見、社會的には何等の確定した目的を有たず、むしろそれ自らの内性に於いて全ての目的を生かし有つてゐるものであると同樣、要望さるべき効果的社會的價値は有たないものである。藝術の本然の姿は、決して、外への藝術以外の何物かの手段乃至目的の爲に巧利に依つて創生されず、言ひ得れば、唯自らの爲にのみ自らを創生し、自ら創生されるところにのみある。人間生活は、言ふまでもなく、人間生活以外のものゝためであつてはならない。生命は生命以外のものゝためでは、斷じてない、藝術活動は藝術活動以外のものゝ爲であつてはならない。藝術は手段ではない。美は巧利ではあらぬ。强ゐて言へば、藝術自らのうちにのみその出發を並べ有ち、手段と目的とを合はせ含む。

言ふまでもなく、藝術はその結果としては、到底計算し果たすことの能はない重大なる事業的効果を社會に有つ。まことに、藝術は人間文化の唯一の狂ひなき尺度となり、その活動は人間活動の唯一の枯死する日のなき源泉となる。殊に、建築はその社會的効果の大き强さに依つて其本來の貌姿と其價値とを錯覺誤算され其目標は一つに社會的効果にのみあると主張され、其道は他の藝術には離れて他の方向に進むと主張されて來た傾向を有つ。即ち、建築は他の藝術とは其目的を異にして藝術ならざる藝術であると言ふのである。墮落はすでにこゝにある。道はすでに横道である。

建築が長い文化史上に占めて來たその社會的地位は、まことに侮り難いものがあつたのは眞實ではあるが、古來、藝術以外の他の權勢の干渉に最も卑弱で、常に全らゆる他のものゝ巧利的な野望の爲の傀儡となるに甘んじさせられたもので、建築程慘めな屈辱の歷史を有つ藝術はあらぬ。建築が最も藝術的馴練と敎養との足りてゐない證査である。ひいては、建築家が最も藝術家ならざる事實の裏書である。故に、想ふ。建築が効果的な社會的事業である間は、建築は藝術としては遂に健やかに生長し得ず、建築は益々藝術ならざる藝術と名付けられたる、まことに變妙な怪鬼とのみな

り果てゝしまふであらうと。

發見は藝術家にとつては直ぐ創造である。藝術は畢竟發見なのであるが、建築上に於ける建築家の發見は、その所謂技術の新しい創案發見ではなく、寧ろその構造上の眞の發見であることを要する。技巧上の努力は藝術家にとつては寧ろ末尾の問題でしかあらぬ。

構造上の眞と言ふことは建築に於いてはすでに常識問題なのであるが、一言で言へば、この眞は構造上の素直さといふことである。この構造の一切の根底は藝術的眞への素直な他意なき理解に依つて深められる。眞は強要されてはならぬ。強要は、藝術的良心の強要すらも、すでに虚構である低俗な興味の強要は藝術を構造から追ふ。構造のための構造はすでに構造ではあらぬ。從つて構造上の眞は唯構造のために強要されたる虚構を芟除し、構造を建築の本態へまで素直に復歸せしめることによつて輝く。本然の姿に歸ることは、やがて、新しい發見への出發である。

□

アンドレイ・アントアンヌは現代に於ける所謂第一流の演劇批評家ではないかも知れませんが、彼は彼の演劇論に於いて劇場に於ける光線のことに論及して數頁を費し、光線は劇場の生命であると斷言してをります。『光線は劇場の生命であります。舞臺裝飾の廣大な精靈であります。戲曲上場法の靈魂であります。聰明に應用された光線は、舞臺裝飾に雰圍氣、色調、深味、遠近の差別等を與へます。光線は觀衆の心に官能的に働きかけます。その魔力は不思議な風に戲曲の味を強め、深刻にし、且つ絶えず戲曲の伴奏を演じます。』

常に光りの畫家と呼ばれたクロオド・モネエはその生涯を光線の研討に委ねてしまつたと言はれてをります。光りを理解しないで、彼には藝術への道を素直に歩くことが能きなかつたからであります。光りを凝視することが、彼には美を認識することであつたのです。光りを知ることが、彼には繪を畫くことであつたのです。光線が繪畫上に於いて如何なる地位を占め得るものであるかは今こゝで問題とはしないとしましても、建築上に於ける光線の地位が如何に重大であるかに就いては相當の好意ある考慮を拂つても徒勞ではないと思

はれます。

光線は全らゆる靈感的な感動的な魅力のうちで、疑ふまでもなく、最も迫心的な感動的な魅力を有つてをります。この必至的な魅力は私達の生活を生む根帶であります。光りの存在しないところに生命は見つかりませぬ。光りは全らゆる生命と名付けられたものゝ最も端的な力強き輝きであります。光りは全らゆる赤裸々なるものゝうち最も赤裸々なる深い實在であります。光りを充分に認識しないで生長を恣に感得することは能きませぬ。光りの特性は生命の特性と同一であります。光りの流れは生命の動きであります。その變化と生長とが實にめぐるましく激しくありますため、光りは一見奇怪な夢魔であり、或は定義し得ざる虚幻であると考へられ勝ちでありますが、決して、光りは捕え得べかちざる幻影でのみはありませぬ。光りは全らゆる種類の定義をも遠く越え最も現實的な、むしろ常識的な實在であります。明細な光學も光りの感情の一切を充分定義し得ないのを例としまず。確然たる不變の定義を嫌つて、全らゆる揣摩と憶測とから離れて力強い現在性を有つてゐることが、光りの平凡な強さであります。かうして、光りは確に最も官能的な鋭さをもつて私達の胸へ働きかけます。優れた畫家は或る色彩に酷く敏感である以前に、或る光線の流れに常よりは激しく敏感であります。光りを等閑に附して、生活を話してはなりませぬ。光りの問題を第二に置いて、建築を企劃してはなりませぬ。

先づ光りは最も注意深く精緻に分解され愼密に結合されなせけれなばなりませぬ。最も能動的なものが充分判別さるべきであります。光りの正しき効果はその運動の適確さにあります。その強度は殆んど光りの本質的價値の重さを左右します。光りと光りとの混合が充分理想に近く配置されなければならないわけです。こゝには巧な整調がなければなりませぬ。光りへの相當な感情的訓練が必要とされます。或る光り及び別種の或る光りが何故悲哀や喜悦や激動や沈靜の印象と刺戟さを與へるかといふ本質的な說明は誰にも能きないのが普通とされてゐます。が、私達の經驗と情感とは容易に僞瞞し終すことが能きないで、藍、綠等を

帶びた光りの動きには寒冷或は沈靜を覺え、黃、橙等に近い光りの流れには温暖乃至和やの情を經驗し强激な白光、紫光、赤光等には奮激昂揚等の痛然な氣分を味ひます。私達の汚濁なき純眞な光りへの性感がこの場合は最も重い價値を置かれなければなりませぬ。光りを誤つて捕え、誤つて逃がし去る事は充分注意されなければなりませぬ。從つて、必ず光りの導引配置に細心の注意が肝要とされます。その自由な選擇は充分考慮の拂はれた後にされなければなりませぬ。新鮮な清澄な光りや輕い光りや柔かい光りの選擇は充分愼密にされなければなりませぬ。過度の光りは過度の刺戟となつて、過多な輝きは過多な熱を導引し易く、住者を耐え難く焦燥せしめます。イタリア其他の熱國にあつては、概して窓は小數ではありますが日中はその蓋扉を閉ぢなければ室内にゐることは不可能だと言はれてをります。多くの場合、光りは熱と色彩とに親しく不離な交涉を有つてをるから、斯處にも遺漏なき考慮が必要とされます。濃やかな光線への理解が先づ求めもれなければなりませぬ。

住宅内部に於いては、採光の方法は一つに戸外への窓に依ります。採光設備は多くの場合通風或は保温等の設備と離し難い交涉を有つてをりますから、その計畫は最も注意深く着手される要があります。明るき住宅はまた通風よき住宅であります。光りに豊かなる家はまた夏期涼しく冬期は温かな家であります。通常の場合、窓は角の方が採光には最も理想的であるとされてゐます。その窓の開閉等の工作上の都合もこの場合が最も自然でありませう。新體で明快な燦爛たる汚濁なき光線がもとより求められなければなりませぬが、光線の過度の重用はそこに一種の不快な壓例的な錯覺を釀成して、住宅をなごやかに落ち着かせず、居住者を焦燥と倦怠との世界へ追ひやります。狂燥者には光りは嚴禁さるべきであります。視覺は先づ適當ならざる光線によつて亂されます。適度は完全なる尺度でありませう。言ふまでもなく、戸外の光りがそのまゝ全て室内に採り入れられる要はないやうです。私達は私達の好みのまゝに戸外

の光りを室内に導き、また拒みその希ひに應じてさり氣なき人工の影を室内に投げかけるのもまた興味深いことに考へられます。光りの明るき輝きは言ふ迄もなく快活を現はしますが、光りの適當なる鈍重さは室内の氣持よき端嚴を現はします。選ばれて適當に配置された影は時として裸のまゝなる光線よりも意義深く親しみのあるものであります。生活の慰安は光りに依つて滿され、また影に依つて補はれなければなりませぬ。光りとその投影との美はしく趣味的なる交錯混和は室内の單調凡一を充分救つてくれます。艶麗のみが美であると考へられてはなりませぬ。光りの派手やかさや艶やかさのみを光りの美的効果だと計算してはなりませぬ。輝きの消されたり光の美しさをも私達は、理解してをく要があります。偉麗はこゝにも充分認められます。光りとその投影との區劃的な線のないことも光りの美的効果を強調する一つの場合であります。餘りにも單調な明るさは、寧ろ私達に倦怠と嫌厭との情を與へます。光りには適度が必要です。聰明に導かれ運ばれたる光りはこのうえもなき室内の完全なる裝飾であります。

室内裝飾を、殊に住宅内部の裝飾を、色彩にのみ求めやうとするのはもとより誤つてをります。派手やかな色彩のみが歡賞されてはなりませぬ。斬新な室内裝飾の完成は、光線くの聰明なる理解から初められます。色彩のみに賴つては室内のなごやかな雰圍氣を破り易い危險を常に有つてをります。所謂下品な色彩はあり得ても、俗惡な光線はあまり見當らないものゝやうです。カアテンは色彩のみに依つて輝かず、色彩のみに依つて充分効果的に生きませぬ。壁は光りに磨かれないで充分輝やくことが能きませぬ。ステインド・グラスは光りに艶つけられないで其美を生かし得ませぬ。家具類への射光とその投影との交鎖混和はそれらの色彩を充分印象深く美しくします。從つて、光りへの理解は充分深くなければなりませぬ。天候と時間とに依つて刻々にめぐるましく轉變して止まない光線では、相當の考慮が拂はれなければならないのは當然でありませう。

夜間に於ける光りは、まことに、夜の生命であります。その効果は新めてこゝに書く要もないで

ありませう。單に劇場内とのみ言はず、全らゆる夜の室内の王は光りであります。夜の美は光りに依つて生れ光りに依つて死滅します。從つて夜の室内の照明問題を充分深い考慮のうちに討究され研鑽されなければなりませぬ。その計畫と設備とは唯單に効利に依つてのみ醜くされてはなりませぬ。考察は先つ美の立場からさるべきが眞實であります。こゝにも新鮮で明快な濁りなき光りが配置されなければならないのは勿論であります。光りの汚濁は室内の美を堕落させます。光りの遊戲は光りの死滅です。純潔は美の最高の特質です。純潔の制限を無用に越えて、美は健全なは實在とけては生長し得ませぬ。光りが美から離れて生長し得ないのは當然であります。太陽の光りには太陽の光りとしての美と輝きとがあります。夜には夜の美が要望されなければならないわけです。夜は夜の有つ光りの美を充分樂しんでいゝのであります。點燈が單に點燈のための點燈のみであつてはなりませぬ。晝間の光りを唯單に不充分に補ふためのみの夜間の照明であつては、夜の光りは充分にその特有の効果をあげ得ないでありませう。

街頭の照にしましても、建築や公園や橋梁等を唯深い考察もなく單に照明するのみでは、都市を反つて痛め悪しくするのみであることは問題の外であります。夜の生活とその休養とは一つに點燈の輝きの如何に依つて左右されます。夜の光りは夜を浮きあがらせ、また沈め深めさす。夜は人工の美が最も素直に生かされ、また賞讃さるべき時であります。人間の今日までの發見の最も優れたるものは、電氣の發見、續いては電燈の創見でありませう。多分、電燈の美は人工の美のうちで最も優れて純眞なものであります。點燈の設備は、放に、最も周到な考慮のうえに企劃され、その照明は能ふ限り精緻であることを必要とします。光度と色彩との離し得ざる關係は此の場合最も重要な意義を有ちます。言ふまでもなく、その光度は無制限に向上せしめられてはなりませぬ。外界への誇示を唯一の目標とするショウウキンドウの照明の如き場合を除いては、光りは強すぎるよりは和弱である方が自然で安全であるとされてゐます。強烈な赤色光は和ぎを希ふ室内には嫌はれます。

晝色光の激越なのはショウウキンドウに於いても決して最良の照明とは言へないやうです。光りの幾分の弱さはその四周の色彩に依つて充分補はれなければならない筈です。適當に細心に選ばれたる色彩は光りを遺憾なく補ひ、寧ろ印象づけ魅力づけます。色彩は光りに依つて輝き動きます。色彩は決して個立して實存せず、光りと倶に生き倶に働かせらるべきものであります。夜の室内は光りの王國としなければなりませぬ。光りを自由に一杯に伸長せしめなければなりませぬ。室内の照明設備の完全は、すぐ、その室内の裝飾と意匠との完全を表明します。

住宅の明るさは、從つて、生活の明るさであります。住宅の輝きはまた同時に生活の輝きであります。太陽の光りはまた人間生活の光りとなります。蒼空から逃避するために住宅を企圖するのであつてはなりませぬ。光りは充分すぎる程室内に採入され愛賞されなければなりませぬ。光りは生を育みます。生長は光りに依つてのみされます。晝間の採光設備、夜間の照明施設に失敗すれば、疑ふまでもなく、その建築はも早や總體的に失敗であります。住宅の外貌を裝飾し内部を潤色するのは或はその居住者の自恣ではありませうが、こゝに最も深く考慮さるべきは、壁紙の色調や家具類の形態等に終始する問題ではなく、住宅全體としての明るさの問題であるべき筈です。暗らき部室は生活を當然憂陰にします。暗さは快揚からは遠ざかります。住宅の本質的價値はその室内の贅澤さや室數の多少にかゝはりは有ちませぬ。光りは住宅の終極的價値を決定します。住宅問題の將來の解決はこゝにこそその重心を置かるべきものなのであります。今日以後の建築家にとつては、その採光照明の問題が第一の懸案でなければならないでありませう。住宅の價値は最後までその明るさの價値です。その意匠は美はしき光りの意匠であることを要します。その裝飾は選ばれたる光りの裝飾であることを要します。家は、何よりも先づ、明快な光りの家であることを要します。

笠置に遊ぶ

——七月例會參加記——

一幹事

本月例會は、炎暑の折柄ですから茲に、山紫水明にして風光明美なる且つ舊蹟に富む笠置の地をトして、納凉會を催し、一日の淸遊を試み、各位の親睦を益々深厚ならしめたいと存じます、奮つて御出席を希望致します。斯ういふ意味のことが七月例會通知として、この月の、十七日に發せられた。

二十七日、笠置の納凉會に來會の方々は、左の二十九名でした。

池田(實)、池田谷、伊藤(正)、岩尾、本多(二)、富田、近澤、小川(安)、岡本(新)、奥野、金治大工、竹谷、中村(琢)、中澤(誠)、長田(岩)、中川(彌)、永田、野村(敬)、福澤、小西(一)、油谷、荒川、阪井(米)、佐藤(正)、木村(喜)、宮崎(治)、久樹、森西の諸氏。

當日になつて、やむを得ない差支へのために、片岡副會頭、松本理事の缺席は遺憾であつた。

× × ×

五旬を經て、まだ一度の雨もみない今年は、何んといふ變つた年だらう。毎日の炎威は、殆んど文字通りの赫々として灼くやうで、人をして、甑底に在るの想ひあらしめ、江草もために枯死せんとすとは少々大仰だが、全くそれに違いない。地は裂けてしまつて、金鐵も爛けはしないかと思はれる此世の夏は、迯ても逃るゝ處とてはないが、身を松風、海月の鄕に置けば、いくらか、市井の炎塵を、洗ふことが出來はしないか。

七月の例會は、笠置溫泉で納凉會となつてかわつたが、洵に、季に相應しい催しであつた。

一、日　七月二十七日の日曜日
一、時　午後四時……會場集合
　　同　五時……晩餐開始
　　同　八時……閉　會
一、會場　笠置温泉笠置館
一、清遊　笠置山に舊蹟を偲ばるゝ御方は山案内人を、川遊びの御方には短艇の準備がしてあります、なるべく集合時前までに隨意御清遊ありたし。

以上のプランに依つて、其日天王寺、湊町から省線によりて、或は上六から大軌を利用して、三々五々笠置に向つた。

吾等は三四人と共に前十時、上六を發して奈良に着いた。途中、生駒隧道――あの有名な、そして六分間もかゝる生駒隧道を通過した。其隧道の中の涼しさは實に、例へやうもない涼さといふよりも、寧ろ寒さには、氣持のよい驚きに、目をみはつた。眞に涼味萬斛とは斯處か。

乘客の誰かが冗談に……

『この隧道の中を離れたくないね』

『全く』

『何んとか方法はなからうか、夏だけ』

『隧道ガイドにでも使つて貰ふことだね』

『そんな者に使つてくれるかね』

『君なんぞ、まあ、さうするよりほか、他に使ひ道がないなあ』

『……』

『そして油とりには時々レールを枕にするんだ』

『危ぶないではないか』

『もしか眞逆つたら、一生暑くなくてよかろう』

奈良驛で三四の方と、おち合つた。それから、關西線に乘替へて、笠置へ十一時半に着いた。

笠置驛には豫ねて打合せておいた通り、出迎人が居て、直ぐ會場の笠置館へ案内してくれた。

笠置館は前に木津川の清流を控へ、後ろに笠置山を負ふた、絶好の位置にある、古風な氣持のいゝ館であつた。會場はその二階の、一百疊の間である。一寸の間憩ふて、館主が、薦めるまゝに笠置山の舊跡を探ねることにした。一行九人――

笠置山は、木津川の南岸にあつて、高さは九百五十尺あるさうだ。山上の古蹟を一周すると、ざつと七町餘ほどあり、登阪は山の西面にあります

山は元弘の亂後、後醍醐天皇の蒙塵ましました地として、その名は誰知らぬものもあるまい。古くは天武天皇が、この山に狩し給ふた時に、大雷雨にあひ給ひ御難を遊ばした折から虛空菩薩が、出現してお救ひ申したので、天皇は深く喜び給ひ、必ず寺院を建てゝ之に酬ひむと仰せられて、着御の笠を目標に、とある石の上に置かれました。今山中に笠置石と名づけられて存してゐる石がそれである。また笠置山の名は、それから起つたといふ傳説があります。と山案内人は深切に、道すがら説明してくれる。この人のよささうな山案内人は、七十五の年を迎へて尙壯者を凌ぐていの、老いて益々壯んな人物で、『おい若い者何してゐるか。』といはぬ計りの、足どりで山を登つて行くのであつた。

古人は、心涼しければ身自ら涼しと、歌ひましたが、其處にまで、悟り到らぬ凡夫の淺間しさは九十幾度といふ、今日の苦熱には、然かも日盛りの正午すぎの、山登りは、實にこたへること、こたへること。

先づ二丁程登ると『下の堂』がある。『一の木戸』ともいふさうだ。その昔後醍醐天皇が、蒙塵の時この山に城廓を築いて、こゝをその一の木戸としたのだ。何んとかいふ賊兵を走らせた所だ。下の堂は、もと佛像を安置してあつたのだが、今は登山者の休憩所になつてゐる。こゝから西方を望んで、田畝を隔てて對峙する山をば、經塚山といつて、大塔の宮が、山頂に經卷の書寫しを埋納せられた、といはれてゐます。更に登ると『上の堂』がある。數十歩を登れば、道の兩側に平坦なる畠地があります。昔二王堂の在つた跡で、此邊も、元弘の戰陣であつて　足助次郎重範が勁弓を以て、賊將荒尾兄弟を射斃したと所と、木標に書いてゐた。又般若寺の本性房が、石を投げて敵の人馬を粉韲し、屍は積んで谷を塡めた――一寸たまげたが――のも矢張りこゝで今に人呼んで地獄谷といひ、南方裏手の谷が、それである。その上に『三の木戸』がある。三の木戸の跡に『名切り地藏尊』がある。同じ所に『名切石』がある。元弘忠死義士の名を刻してあつたのだが、震災に轉覆したので今は其跡を見るに由ない。そこを登ると

『笠置寺』である。前記天武天皇が、虚空菩薩報恩のために、建立された寺がこれであるといふが、一説には聖武天皇の勅願によつて建立されたともいふ。どつちにしても、寺は元弘の亂に燒けて、今は『福壽院』の坊が殘つてゐるだけだ。之でも昔は獨立本山として大したもので、寺中も四十九院とかあつたさうだ。寺は丁度、山頂になつてゐて寺門に事務所があり、登客のために茶場・休憩所等の設けもあるが、其處の坊さん、なかなかの商賣人で、登山記念品、名産品、書葉書等よくお薦めになる。

寺門の北隅に『鐘樓』がある。懸鐘は、解說上人が浮圖擅金を以て建久七年かに鑄造したもので、高三尺徑二尺二寸厚一寸八分、形は甚だ古雅に出來て居り、其音はいゝんださうだが、さる貴人がお撞きになつた外は誰れも絶對に撞かれないので惜しいことにはじやく〳〵たる所の其餘音を聽くことが出來なかつた。ちなみに、この懸鐘は國寶となつてゐる。

鐘樓の北側に『駒止の松』がある。天武天皇が再び御笠山の時、駒を繫がせ給ふた松といふので、見ると餘りに少さいから、尋ねると其松は老ひ枯れて、近年に至りて一小本を植えて、之を表したわけだと。

これより左へ折れ、北へ歩めば、鬱蒼たるといへば、晝なほ、小暗いやうだが實は明るい森林仙境の內に、頽然として大石が、崖上に橫はつてゐる。藥師石です。文珠石、彌勒石孰れも之に連なつてゐる。餘り大きな石だから尋ねた、

藥師石　高四十尺　巾三十一尺
文珠石　高二十二尺　巾十六尺
彌勒石　高五十二尺　巾四十二尺

と答へる。三石とも佛像を彫刻し、之を內に籠めたものに、綠の甍や、彩された棟で以て、建立された大伽藍があつたさうだが、元弘の兵燹に燒けて、像相が剝落して、今は朦朧としたる痕跡が僅かに殘つてゐる。このあたりから滿山、悉く石ばかりで、役小角が苦行したといふ『千手窟』がある千手窟は良辨僧正が、勅旨を奉じて、千手の秘法を修し、參籠せられた洞窟である。故に別に千手窟とも龍窟ともいふ。

この右に、虚空藏石（高四十二尺巾二十四尺）が


ひやりとする
のぞき岩は
午後の谷
ひやりとする
乳舎の
針
ひやりとする
風呂の水
ひやりとする
鳥ケツの水
ひやりとする
急湍
の沐浴
T.N.

あつて、石面に虚空藏菩薩の尊像が、弘法大師の手によつて彫刻せられてゐる。

次に長さ二十間餘の大石を頂いた自然の石門がある。之を「胎内潜と」言つて大石が、自然の洞となつてゐて、其隧道の長さは五丈餘、これを通つて西に折れると『大皷石』がある。この石の頭上を撃てば大皷のやうな響がします。

大皷石より東方に『千手瀑』があつて、この谷を總稱して『觀音の谷』と呼んでゐます。元弘元年九月廿八日の夜、陶山寺の奸賊が、此谷の麓にある何んとか村の老母に、間道をきゝ此谷から登つて皇居を襲ひ、遂に吾等が幾度か、歴史の時間に涙を絞つた、後醍醐天皇の笠置落ちは實に、斯處に因を發つしたといふ。老案内人が觀音の谷の説明をするときは、思ひなしか、もつ杖に力を入れ、老いの目をしばたゝき、然かも涙さへ湛へて、間道を教へた何とか村の老母を、口を極めて罵り、陶山某の行狀を詛ひ憎み、顔色は赤潮さへ帶びてゐた。其至情には人々各々心を動かされた。

思ふに彼は、案内の都度、其心に有つ勤王の念を、其木訥な言葉に、織りまぜて、多數の被案内人に、よい感化と印象とを與へて居ることであらう、洵に案内人に其人を得て吾が事のやうに、自ら欣快に感ぜられた。それもどこかのやうに、機械的に説明し、只管其日の收入多からん事を、冀ふ輩に比すれば、實に雲泥の差である。なほ前述の老母を出した村は、今に其子孫が續いてゐるが後醍醐天皇の御憎しみに依り、天刑病絶えず、今に至るも別の村として取扱はれてゐるさうだ。但し其眞疑は保障の限りではないが、もしあれば、恐るべきことだ。

あまり話しがそれたが、太皷石を過ぎると『搖ぎ石』がある。上が大きくて下が小さく、手で推すと今に倒れさうに動くが、どうしても倒れない大きな岩だ。元弘の役に大石を投げつけて、賊兵を破つたといふ、怪僧本性坊の魂魄が化して、此石になつたといふ傳説がある。松浦佐用姫は、夫戀しで、石になつたといふが、搖ぎ石のやうに、グラグラしないさうで、お尻のすはつた所が女の一心と申すべしか。

この石の下に『鹿ケ淵』がある。上から覗くと繪のやうに美くしい。搖ぎ石の附近に、平つたい數

十尺の岩がある。『平等石』である。

平等石は高さ二十五尺)なゝめに東南に突出してゐて、石上に登ることが出來る、屏風を立てたやうな、怪巖が層をして累なり石上から覗くと前方は所謂千仞の谷で、今まで炎暑に、流汗淋漓として玉なしたものが一度に、ひやつとして寒氣がたつことほど、さやうにすごい所だ。この石下に身體を、斜にして石にはらばいして、通行する所がある、之を『蟻の戸渡』といふ。

こゝから東く西すれば「貝吹岩」に來る。元弘の役に此岸の上から、指揮の法螺貝を吹いた所だといふ。法螺も座敷で吹かれてはたまらない。此所から千仞の懸崖を下瞰すると、山下は木津川の清流で、水は青く、砂は白く、帆布點々として、まさか旱天で水が少ないのに布帆點々は、ちと、おかしいが、兎に角、風景絶佳とも申さうか滿點々々。

こゝから引きかへして、彌勒石の頭上に當る所に『皇居の址』がある。石垣を圍らしてあつて、皇居の遺址なる意味の木標がたつてある。こゝは笠置山の絶頂で、數百歩の平坦な地になつて居り、石階を登つて、皇居址の御前に整列して吾等は、默禮した。

今更らに

御製『さして行く笠置の山を出しより天の下には
かくれ家もなし』

藤房卿の御返歌

『いかにせんたのむ蔭とて立よれば
なほ袖ぬらす松の下露』

が思ひ出されて、往時を追憶して、暗然之を久うした。

これから、笠置寺にもどり、例のお坊さんに土産を買され、山を下つて舘に歸つたのが午後二時過ぎだ。

暑い〳〵と口ぐせに叫ぶ、浴衣一つになる。まだ涼しくない、氷をふくむ、アイスクリームを飲む、矢つぎばやに消夏に勉める、それでも九十幾度かの、炎熱は消えない、五尺の男一疋が身の置き所に苦しむ。

誰かゞ木津川を遡らうと發議す。皆賛成々々と今のさき、山登りに、痛みつけられた人々まで、威勢よく、川に下りたち、それ〳〵短艇に乘りこ

んだ。もとより皆、褌一つだ、あの暑い西陽を眞背に受けて、だん〳〵と上流に漕いで行く。川は漸くにして、せばめられ峽中に入り流れは急となる。左右は皆削つたやうな絶壁、千尋で、松はさかさまに生じて、根は僅かに寸土に托されてゐる怪岩、奇巖は累々として、正に落ちて吾々の頭上に、來はしないかと疑はれる。

川は益々狹まく急流となる。短艇と短艇とがかちやふ。舳や艫が、川に屹立する岩に衝き合ふ。その度にひやひやする。

川は愈々せまく、亂岩奇礁は愈々多くなる。流れ又早し。緩流に短艇を捨てゝ、砂丘、突岩の間を上る。せゝらぎに到る。こゝには玄人の香魚獵師五六が、連りに香魚の朋釣りに、耽つてゐる。

『釣れますか……』

『だめです』

『どういふ譯かね』

『何しろ雨が降らないので……』

『一日にどのくらゐ漁れますか』

『まあよくて三十尾でせう』

『三十尾それは豪氣だ』

『然し漁れる日は續きません、それに此頃ときた日にはお商賣は上つたりです』

『……』

『今日も笠置館からの注文で朝から大汗ですよ』

でも見てゐる間にも、かわいゝ白い腹をみせた香魚が四つ三つ釣られた。

× × ×

晩餐に間もない。四時すぎには、己がじし、館の温泉に浴みして、見るからに、涼しさうに、浴衣一枚で、團扇を使つてゐる。

やがて五時となつた。百疊の間に二十九人が圓陣を作くつた。

池田理事長、役員を代表して、

『皆さん、暑い時分ご遠方の所を……十二分、うち寛いで各自歡をつくされん事を……』云々と、ずつとくだけた、涼しい開會の挨拶で、晩餐會は開かれた。十幾名の紅裙、酒間を斡旋す。時は進んで酒戰は、愈々急。メートルが次第に昇るそろ〳〵お自慢の何々が飛び出して、迚ても愉快滑稽は百出。

締切りが迫つてゐるので、晩餐會の模樣をもつと書きたいのだが、次號に詳細載せることゝして筆を擱く。

——一三、七、三〇——

時報

◉建築法令一部改正

勅令第百九十二號　大正十三年六月九日

市街地建築物法施行令中左ノ通改正ス

第五條第一項ヲ左ノ如ク改メ同條第五項ヲ削ル

煉瓦造建築物・石造建築物及木造建築物高ハ四十二尺軒高三十尺ヲ、木骨煉瓦造建築物及木骨石造建築物ハ高二十五尺軒高十五尺ヲ超過スルニトヲ得ス

第十四條第二項但書中「商業地域内ニ於テ」及「ノ第一階及地階」ヲ削リ同條第二項ヲ削ル

第十五條中「第一項」ヲ削ル

第二十九條ノ二　**市街地建築物法第二十六條第二項中道路ノ境域内ニ於テ行政官廳支障ナシト認ムルトキハ同法第八條、第九條及第十一條ノ規定ニ拘ラス存續期限ヲ附シ假設建築物ノ建築ヲ許可スルコトヲ得**

附　則

本令ハ大正十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

内務省令第十五號

市街地建築物法施行規則中左ノ通改正ス

大正十三年六月十二日

内務大臣　若槻禮次郎

第一條第十三號第一項ニ左ノ一號ヲ加フ

ハ　厚一尺以上ノ孔煉瓦造、厚六寸以上ノ鐵筋「コンクリート、ホロプロツク」造、厚五寸以上ノ「鐵筋コンクリート、プロツク」造ノ類ニシテ地方長官本號イ又ハロニ規定スル壁體ト同等以上ノ耐火効力アリト認ムルモノ

同條同號第二項ヲ削ル

同條第十四號ニ左ノ一號ヲ加フ

ホ　鐵骨ヲ有シ「メタルラス、コンクリート」、網入硝子ノ類ヲ以テ覆葺スル屋根ニシテ地方長官ノ承認セルモノ

同條ニ左ノ一號ヲ加フ

二十一　階數ハ地階及屋階ヲ除キタル階數ヲ謂フ

第四條第一號中「十尺」ヲ「八尺」ニ改ム

第十二條ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ下水道ノ設備アル地區ニシテ地方長官特ニ指定スル區域内ニ在リテハ便所ハ汲取便所ト爲スヘカラス

第十四條第二項ヲ左ノ如ク改ム

地方長官ハ井戸、汲取便所又ハ汚物溜ノ位置、構造、設備等ニ關シ前三條及前項ノ外必要ナル規定ヲ設ケ又ハ措置ヲ命スルコトヲ得

第十九條第八項ヲ削ル

同條第五項中「採光面ニ關シ特ニ其ノ面積ノ增加」ヲ「採光ニ關シ特ニ採光面ノ增加其ノ他適當ナル措置」ニ改ム

第二十條第二項中「第五項、第七項及第八項」ヲ「第四項、第六項及第七項」ニ改ム

第二十一條中「作業室」ヲ「居室」ニ改ム

第二十七條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

瓦葺屋根ニ在リテハ引掛桟瓦ノ類ヲ使用シ又ハ瓦ヲ野地ニ緊結スヘシ

第二十九條ノ二　地方長官ハ建築物ノ配置、構造又ハ用途ニ依リ危險ナリト認ムルモノニ付防火壁ノ設置其ノ他防火上必要ナル措置ヲ命スルコトヲ得

第三十條中「前條」ヲ「前二條ノ」ニ改ム

第三十二條中「三階建ノ」ヲ削ル

第三十四條中「三階建ノ」及「其ノ爐胸ヲ」ヲ削ル

第四十三條中「建築物」ヲ「建物」ニ改ム

第四十三條ノ二　市街地建築物法施行令第二十九條及第二十九條ノ二ノ建築物ニ付テハ地方長官支障ナシト認ムルトキハ本則第三章ノ規定ノ一部ヲ適用セサルコトヲ得

第五十三條第一項中「三十五分ノ一」ヲ「三十分ノ一」ニ、「三十分ノ一」ヲ「二十五分ノ一」ニ、「二十六分ノ一」ヲ「二十二分ノ一」ニ改ム

同條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

屋根ヲ金屬板、石盤又ハ石綿盤ノ類ヲ以テ覆葺スルトキハ前項ノ規定ノ適用ニ關シ三十分ノ一ヲ三十五分ノ一、二十五分ノ一ヲ三十分ノ一、二十二分ノ一ヲ二十五分ノ一ト爲スコトヲ得

同條第二項中「前項」ヲ「第一項」ニ「三十五分ノ一」ヲ「三十分ノ一」ニ「三十分ノ一」ヲ「二十五分ノ一」ニ改ム

二十六分ノ一」ヲ「二十二分ノ一」ニ、「十三分ノ一」ヲ「二十分ノ一」ニ改ム

第五十五條　建物ニハ適當ニ筋違又ハ方杖ヲ設クヘシ

第五十六條　削除

第五十八條但書中「九尺」ヲ「三尺」ニ改ム

第六十一條第一項ヲ左ノ如ク改ム

建物ノ壁體石造又ハ煉瓦造ナルトキハ其ノ壁長三十尺ヲ超過スヘカラス

第六十二條　建物ノ壁體石造又ハ煉瓦造ナルトキ其ノ壁頂ニ鐵又ハ鋼筋「コンクリート」ノ臥梁ヲ設クヘシ

第六十三條　建物ノ外壁煉瓦造ナルトキハ其ノ壁厚ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　長十八尺以下ノモノニ在リテハ一尺以上ト爲スコト

二　長十八尺ヲ超過シ三十尺以下ノモノニ在リテハ一尺三寸以上ト爲スコト

第六十五條中「前三條」ヲ「前二條」ニ改ム

第六十九條中「高十五尺以上ノ煉瓦」ヲ「煉瓦造」ニ改メ「及之ヲ壁頂間ノ垂直距離」ヲ削ル

第七十條中「第六十一條及第六十三條乃至」ヲ削ル

第七十二條第一項中「第六十五條」ノ下ニ「及第六十七條」ヲ加フ

同條第二項中「第六十六條」ノ下ニ「及第六十八條」ヲ加フ

第七十六條第一號ヲ左ノ如ク改ム

一　壁厚ハ其ノ部分ヨリ壁頂迄ノ垂直距離ノ十分ノ一以上ト爲スコト

同條第二號　削除

同條第三號中「前二號」ヲ「第一號」ニ改ム

第七十八條　切妻壁體又ハ高三尺ヲ超過スル扶欄若ハ扶壁ハ石造又ハ煉瓦造ト爲スヘカラス但シ切妻壁體ニシテ其ノ頂部ヲ鐵筋「コンクリート」造屋根ニ緊結シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第八十一條　石造又ハ煉瓦造ノ桔出窓、桔出縁ニ在リテハ鐵骨又ハ鐵筋「コンクリート」ヲ以テ適當ナル補強ヲ爲スヘシ

第八十六條ノ二　鐵骨造建物ニ在リテハ梁其他ノ横架材ト柱トノ接合ニハ適當ナル方杖腰板ノ類ヲ使用シ之ヲ緊結スヘシ但シ筋違又ハ鐵筋「コンクリート」ノ壁體ヲ設ケタル部分ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

第八十六條ノ三　鐵骨造建物ニハ適當ニ筋違又ハ鐵筋「コンクリート」ノ壁體ヲ設クヘシ

第八十七條　鐵骨延造物ノ張壁ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　鐵骨に緊結スルコト

二　「ホロタイル」ノ類ヲ使用セサルコト但シ間壁ニシテ適當ナル補強ヲ施シタル場合又ハ堅牢ナル壁體ノ表積若ハ裏積トシテ適當ニ之ニ連結シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第八十八條第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ其ノ用途ニ依リ已ムヲ得ス且構造上支障ナキモノニ在リテハ地方長官ノ許可ヲ受ケ第三號及第四號ノ〇定ニ依ラサルコトヲ得

同條第一項第四號中「千四百瓩」ヲ「千五百五十瓩」ニ改ム

第八十九條ノ二　鐵筋「コンクリート」構造ニ於ケル主筋ノ繼手ノ長ハ之ヲ主筋直徑ノ二十五倍以上ト爲スヘシ

第九十條ノ二　鐵筋「コンクリート」ノ主要ナル梁ニハ全張間ニ渉リ複筋及繋筋ヲ配置スヘシ

第九十一條第三號中「二十分ノ一」ヲ「十五分ノ一」ニ改ム

同條ニ左ノ一號ヲ加フ

四　主筋ノ斷面積ノ和ハ「コンクリート」ノ有効斷面積ニ對シ八十分ノ一以上ナルコト

第九十一條ノ二　第八十六條ノ三及第八十七條ノ規定ハ之ヲ鐵筋「コンクリート」造建物ニ準用ス

第九十五條　高五十尺ヲ超過スル煙突ハ鐵造又ハ鐵筋「コンクリート」造トシ支線ヲ要セサル構造ト爲スヘシ

鐵造又ハ鐵筋「コンクリート」造ニ非サル煙突ニシテ高三十尺ヲ超過スルモノニ在リテハ鐵材ヲ以テ適當ナル補強ヲ爲スヘシ

第九十六條　削除

第九十七條中「腐朽ノ虞ナキ控杭」ノ下ニ「若ハ適當ナル防腐方法ヲ施シタル木杭」ヲ加ヘ但書ヲ削ル

第百條中「前四條」ヲ「第九十五條及第九十八條」ニ改ム

第百一條ノ二　強度計算ニ於ケル地震ノ水平震度ハ之ヲ〇、一以上ト爲スヘシ但シ地方長官建築物ノ種類又ハ土地ノ狀況ニ依リ其ノ增加ヲ命シ又ハ其ノ低下ヲ許可スルコトヲ得

第百二條第二項中「千四百瓩」ヲ「千五百五十瓩」ニ改ム

第百十三條第二項中「持送ノ厚カ」ノ下ニ「梁久ハ版ノ下端ヨリ度リ」ヲ加ヘ「一、三」ヲ「〇、九」ニ改ム

第百十六條第一項ニ左ノ一號ヲ加フ

四　最終支點固定ニ近シト認メラルヽ場合ニ在リテハ終端張間ニ發ケル最大正曲能率ハ第一號ノ規定ニ依リ之ヲ定メ最終支點ノ負曲能率ハ第二號ノ規定ニ依リ定メタル負曲能率ヨリ其十分ノ二、五ヲ減シタルモノヲ以テ之ヲ定メ次ノ支點ニ於ケル負曲能率ハ第二號ノ規定ニ依リ之ヲ定ムルコト

第百二十一條第一項中「窓及」ヲ「窓又ハ」ニ「以内ノ窓」ヲ「以内ノ窓若ハ出入口」ニ「窓ニ」ヲ「窓若ハ出入口ニ」ニ、「窓ノ枠及組子」ヲ「枠、組子、棧及鏡板」ニ改ム

同條第二項中「窓」ノ下ニ「又ハ出入口」ヲ加フ

第百二十九條第一項中「窓及」ヲ「窓又ハ」ニ「以内ノ窓」ヲ「以内ノ窓若ハ出入口」ニ、「窓ニ」ヲ「窓若ハ出入口ニ」ニ、「窓ノ枠及組子」ヲ「枠、組子、棧及鏡板」ニ改ム

同條第二項中「窓」ノ下ニ「又ハ出入口」ヲ加フ

附　則

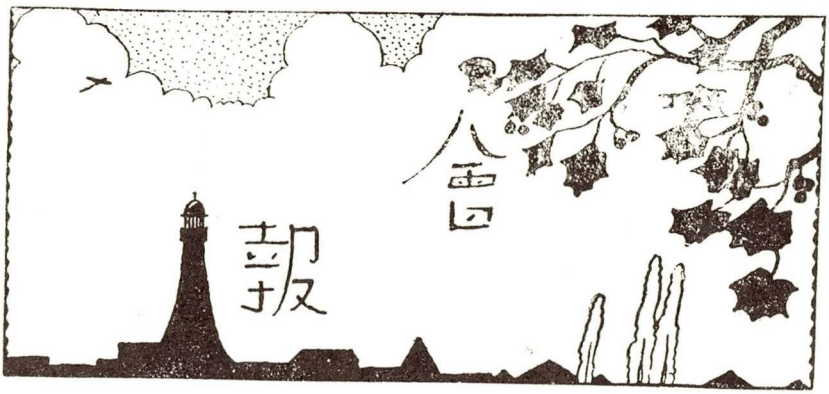
本令ハ大正十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

フレッチヤー建築圖抄出版

題記のものを出版されたが彼の大部な原著から圖面だけを分別したのは最も便宜でよい蓋し近來出色な編著の一つである

（大阪市北區樋ノ上町關西工學專修學校內フレッチヤー會出版定價參圓五拾錢）





會合

○建築職工教化に關する相談會

△日　時　七月二日午後五時三十分－九時
△會　場　大阪ホテル
△出席者　教化委員長、古宇田實、教化委員會分科會委員　小笠原釧、園部文雄、野呂長四郎、酒井勇三郎　澁谷五郎　建築業協會委員八名
△記　事　本夕は建築業協會(五日會)委員と建築職工教化に關し教化委員會提案事項に付打合旁々相談する所ありたり

○理事會

△日　時　七月八日午後六時――九時
△會　場　本協會會議室
△出席者　片岡副會頭、池田理事長、中村理事、伊藤理事、本多理事、谷口理事
△議　事　一、七月例會に關する件、本月は炎暑の折柄に付納涼會を催すことに決し左の通可決
尚本月例會は八月例會をも兼ねて行ふことゝなしたり
1、日　七月二十七日の日曜日、(當日雨天ならば八月三日の日曜日)
2、時　午後四時　集合
同六時三十分　晩餐開始
同八時三十分　閉會
3、所　箕置溫泉箕置館(京都府相樂郡箕置村)
4、電車汽車　往復隨意選定賃金は自辨のこと
5、晩餐費　一人金貳圓會場にて受領のこと
6、經費　主として協會より支出のこと
二、震災報告書に關する件
1、關東震火災視察記作製部數に付協議決定
2、同視察記寄贈先に付決定せり
三、尚左の件々に付協議せり
A.　物品購入取扱に關する件　延期
B.　電話其他の什器評價に關する件　延期

C. 神戸高等工業學校長より申越に係る秋季大會擧行に關する件
一時保留
D. 會員贊助員の所在不明者に關する件 尙精査の上例會に諮ることに決定
E. 協會員名簿新調の件 可決
四、會員銓衡

○教化委員會分科會

△日 時 七月十日午後六時——八時
△會 場 本協會會議室
△出席者 幹事 園部文雄
委員 小笠原朔、野呂長四郎
△議 事 建築職工教化事業に付協議せり

○新入會員及贊助員

會員の部

福澤 谷藏君 大阪市東區瓦町二丁目山口ビルヂング淺野物産會社内
特別贊助員の部
中村 祐三君 京都府伏見桃山
普通贊助員の部
渡邊 謹作君 東京市深川區中島町二地倉
澤方
播 八郎君 大阪市北區西野田茶園町八一地
多田 凡一君 大阪市西區市岡町六五
高橋 省吾君 靜岡縣安倍郡安東村字北安東七二地

○退會贊助員

普通贊助員 小貫 賴政君
普通贊助員 森川喜代之助君

○住所勤務先異動

高田清太郎君 富山市中長柄町一三
赤松 義夫君 大阪市北區天滿橋筋六丁目四地畑中組本店
玉川 卓一君 千葉縣山武郡東金町東金一四二
中村 義雄君 樺太東海岸、元泊郡東知取村富士製紙會社知取建設部
波江 悌夫君 大阪市役所營繕課
長田岩次郎君 兵庫縣武庫郡六甲村八幡字宮山三ノ一六
元木 德松君 東京市小石川區陸軍造兵廠技術部
前田〇之助君 大阪市西區立賣堀北通四ノ一二前田松本建築事務所
大村 太藏君 京都市丸太町通東山線東入ル
河野 誠君 京都府廳都市計畫京都地方委員會
森 與助君 兵庫縣多紀郡篠山町歩兵第七十聯隊内
寺村 善助君 東成郡天王寺村阿部野東浦一〇九
天野 博秀君 東京府下南品川町字二ツ木八九〇地伊藤方
高松吉三郎君 神戸市長田房王寺谷六一九
小松 靜君 東京府北豐島郡瀧野川町字瀧野川一四〇
村松 英一君 關東廳内務局土木課
牧野 利秋君 大阪市北區梅田新道交叉點大平ビルヂング建築場橋本組出張所
黒肥地芳太郎君 神戸市菊水町八丁目五一番屋敷
小西 武雄君 東京市京橋區木挽町一丁目一三大岩組東京支店
伊東宗太郎君 兵庫縣尼ヶ崎市別所村二七七ノ二
白木作五郎君 東成郡鯰江町大字蒲生四四〇地
金子 巴君 西成郡粉濱村七六九
福島 祿壽君 名古屋市東區田代町坂上一

山田　醇君　東京府下中澁谷大向八三三
押川　忠夫君　東京陸軍造兵廠技術部設計班
三浦　儀市君　三島郡三島村字田中
岩柳　三郎君　東京府下池袋四百地遊佐方
加藤　善吉君　兵庫縣川邊郡伊丹町女學校前通
藤井　令三君　愛知縣西春日井郡新川町大字須ヶ口豊田織機株式會社新川工場建築場清水組作業場
坂本　義信君　滿洲長春三笠町一丁目一六ノ四
南部　治房君　大阪市西區八幡屋町一三三
若林　練二君　東京府荏原郡世田谷町太子堂四六六
設樂　貞三君　神戸市西須磨上ノ町一七
藤野松九郎君　東京府下吉祥寺九九三ノ三木村別邸建築場
三宅萬太郎君　埼玉縣秩父町秩父セメント會社建築場松尾出張所内
松宮　幸輝君　西成郡中津町下三番一六一
安田　則世君　東成郡天王寺村字天王寺二二〇八
谷口　昇君　豊能郡池田町田中町二四〇
井上與左衛門君　東京市日本橋區平松町住友銀行日本橋支店
上東　辰澄君　東京市日本橋區本石町四ノ一橋本組支店
川口　一二君　兵庫縣武庫郡西ノ宮町字大井出
中西　嶌作君　都市計畫福岡地方委員會
伊藤　正文君　大阪市役所

寄贈圖書

住宅研究　郊外住宅號　文化建築社
滿洲建築協會雜誌　六號　同協會
工業評論　六號　同社
工業ノ大日本　六號　工業ノ日本社
電氣評論　七號　同社
電氣學會雜誌　四二七號　同學會
郊外の大阪　四號　郊外の大阪社
大阪工業俱樂部通俗衛生　六號　同俱樂部
人と人　六號　大阪府衛生會
都　七號　協調會
會報　第七光　都人社
榮ある生活　第十六號　名古屋工業會
學士會月報　七號　文化創設會
建築世界　四三四號　學士會
朝鮮鐵道協會報　七號　建築世界社
建築業協會月報　六月號　同協會
郊外生活社　四月號　建築業協會
　創刊號　郊外生活社
生活改善　十九號　生活改善同盟會
建築の日本　七月號　建築之日本社
建築の普及　六月號　帝國工業教育會
商工時報　第五四號　大阪市役所商工課
工業タイムス　五號　工業タイムス社
朝鮮と建築　五月號　朝鮮建築會
工業之友　第一九五號　工手學校同窓會
無線電話　創刊號　日本無線電話普及會
帝國の經濟と鐵との關係　工政會
帝都復興委員會議事要錄　五月號　工政會
セメント界彙報　第九三號　日本ポートランドセメント同業會
土木建築　六號　日本實業興信所
建築畫報　六號　同社
住宅　七號　住宅改良會
庭園　六號　同協會
建築雜誌　六月號　建築學會
建築新潮　七號　洪洋社
家庭醫學　七月號　家庭醫學社
セール、フレザー月報三號　セール、フレザー株式會社
趣味之園藝　八月號　關西園藝會
現代生活に於ける電氣壹冊　電氣學會
支那貿易の趨勢　上編　東亞經濟調査局
工政　第五六號　工政會

役員及職員

副會頭	片岡安
理事長	理事 池田寶
主記	理事 中澤誠一郎
同	理事 今林彦太郎
主計	理事 中村琢治郎
同	理事 松本禹象
編輯	理事 佐藤彰美
同	理事 本多二郎
同	理事 伊藤正文
同	理事 田中綱
同	理事 谷口廉兒

編輯係	江村郊邨
	憑取陽
庶務係	西谷節
	憑取陽
會計係	田村春松
	大和榮衛

會員	三五七
名譽贊助員	八六
特別贊助員	三三
合計（七月二十日現在）	一二〇二
會員（地方）	一四三
終身贊助員	五七
普通贊助員	五二六

本誌及廣告料定價表

本誌	册數	定價	郵稅
	一册	七拾五錢	貳錢
	十二册	九圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓
	特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ	

（毎月壹回一日發行）

大正十三年七月廿八日印刷
大正十三年八月一日發行

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人 江村恒一
大阪市東區內淡路町一丁目廿一番地
印刷兼印刷人 大阪活版所
大阪市北區堂島濱通一丁目一番地
堂島ビルヂング
發行所 日本建築協會
電話北四二九一番
振替口座大阪三九、九七五
大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店 柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座 二〇八四番

●第七集第八号　掲載広告一覧（掲載順）

岩住金庫鉄工所
日本エレベーター製造
大野正営業所
ドーマンロング商会
油脂化工社
飾磨化学工業
浅野スレート販売
政正
東京田村商会
福田製作所
ポール　イー・サンマン事務所
特許エレベーター製作所
二和商会
南満鉱業大阪出張所
宇野耐火煉瓦
原田商会
ムツ商店

石綿スレート
西孫南店
奥村重兵衛商店
高田松太郎商店
山本東作商店
田村商会
建築金物商会
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
HANKEN SEISAKUSYO
横河橋梁製作所
大平工業所
井筒政蔵商店
日本ホロタイル
鈴木商店
青木浦石材
柳生電機製作所

造幣局
湯浅蓄電池製造
大阪ビトロライト
木下商店
野沢幸三郎商店
大阪鉄管商会
関西光鯱会
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
松井建築事務所
横河工務所

横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
増田清建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
岡部建築事務所
前田松本建築事務所
西原衛生工業所
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所

大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯工務所
鴻池組営業所
有山組
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
岡本工務店
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
須賀商会
大理石工業

栄進社
松尾
山本窯業商店
萩原煖房工務所
新田ベニヤ製造所
河村青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
日本木材工芸
高島屋呉服店
コルク工業
ベニス工房
城口汚水処理研究所大阪支店
阿部鉄工所
大阪青写真調製所
浜口商店
境川文庫
中松組
岩崎商業

小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所
高田商会
関西ステインド硝子製作所
セール、フレザー
サカイブン建築鉄工所
田中タイリング商会
川崎工場
桐田商会
東京建鉄
大阪耐火リノリウム工業
日本工剤
内外土木建築材料
星製薬
日米板硝子
岡部商会
米山製作所
東洋コルク工業
亀井商店

佳桂住屋商店
フレッチャー会
田中源太郎商店
極東板硝子工業
